

## 付篇Ⅱ

# 吉田構内本部2号館新営に伴う発掘調査

### 1 調査の経過

調査地域は吉田構内の中央部からやや北寄りに位置し、標高約200mの姫山から南に延びる丘陵が西に向かって舌状に張り出す洪積台地上に立地する。

昭和54年、本部1号館の北東側に隣接して2号館の新営が計画された。本部1号館の敷地では、弥生時代後期の土壌、古墳時代のものと思われる竪穴住居跡、土壌、溝状遺構および古墳～室町時代の柱穴が多数検出されている。また、北側の家畜飼料園でも弥生、古墳各時代の竪穴住居跡、溝の検出例が報告されている<sup>1) 2) 3)</sup>。新営予定地でもその立地、本部1号館との位置関係などから埋蔵文化財の埋存が十分予想されたため、埋蔵文化財資料館は同年8月20日から9月10日にかけて試掘調査を行なった。

試掘調査は、幅約2mのトレンチを新営予定建物の西（Aトレンチ）、南（Bトレンチ）の両辺に沿って設定して行なった。その結果、大学の統合移転前に存在した民家の基礎などによって攪乱を受け、遺構が消失していたBトレンチ東部を除く両トレンチで弥生～古墳時代の柱穴を多数検出した。また、南西部では地山が大きく西に向かって下降しており、この落ち込み部分に弥生時代前期～古墳時代の遺物包含層が堆積していることが明らかとなった。

試掘調査の結果を受けて、埋蔵文化財資料館運営委員会で協議を行なった。その結果、本部2号館は1号館と機能的な位置関係にあることが望ましく、そのための代替建設地の確保が困難なことから、新営工事に先だって予定地約800㎡について、事前に発掘調査を実施することとなった。

発掘調査は、人文学部考古学研究室および山口県教育委員会の協力を得て、同年9月19日から11月20日にかけて実施した。

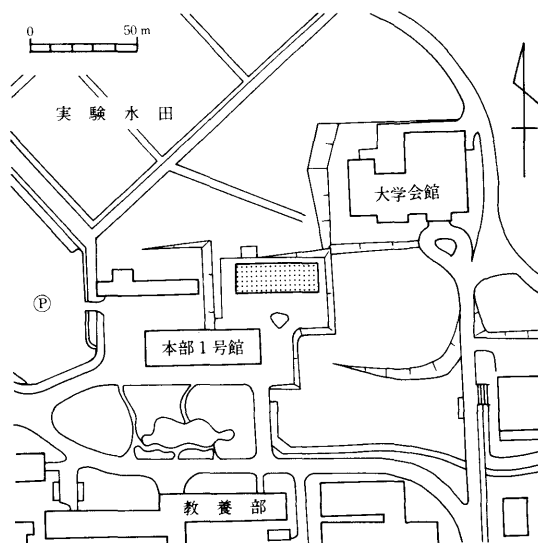


Fig. 48 調査区位置図

## 2 層位 (Fig. 49, PL. 29)

新営予定地は調査前には家畜飼料園として活用されており、地表面は東から西へ延びる丘陵に対応してゆるやかに下降していた。東部で約22.10m、西部で約21.60mで、約50cmの比高差がある。

南東部は、大学の統合移転前に存在した民家の基礎、移転時の造成などによって攪乱を受け、層厚約60～70cmの表土直下が地山である。地山検出面の標高は約21.40～21.50mである。東端部では地山が東から西へ階段状にカットされており、大学移転前の水田の畦畔に伴うものと考えられる。

西半部では遺物包含層が堆積する。地山は約9/100の勾配で北東から南西へ下降し、層厚約80cmの表土の下位に第2層：旧耕作土、第3層：床土が厚さ約10～20cmにわたって存在する。その下には鉄分が沈着し、しまりの強い層厚約3～10cmの第4層：茶褐色土が堆積する。遺物包含層は第5～7層で、縄文時代晩期～古墳時代後期の遺物が多量に出土した。各層とも単一時期の遺物で構成されておらず、二次堆積の可能性が高い。包含層は地山の落ち込みに堆積しており、検出面の標高は約20.50～20.60mである。層厚は、第6層：黒褐色粘質土が最も厚く、最大で約40cm、第5層：茶褐色粘質土、第7層：黒色粘質土は約20cmである。第8層：褐色粘土、第9層：黒色粘土は無遺物層で、極めて粘性が強く、第9層下面では湧水する。地山面の標高は南東端部で約19.50mである。

## 3 トレンチ出土遺物

### (1) Aトレンチ出土遺物 (Fig. 50・51, PL. 30・31・47・54・55)

弥生土器の壺・甕・高坏、土師器の高坏・台付鉢、歴史時代の土師器埴などの土器類のほか、打製石斧・石製円板・二次加工のある剥片などが出土した。

1～27は弥生土器。1～8は壺。1は胴部上半の外面にヘラによる無軸羽状文を施文する。2は鋤先状口縁をもつもので、口縁部は斜下方に開く。口縁部の内側への張り出しは強い。3は口縁端部外面に粘土帯を貼付するとともに、内面を上方につまみあげて端部を肥厚させる。頸部外面には断面台形状の貼付突帯が巡り、頂部には指圧による刻目を施す。4は下垂する口縁部をもち、3と同じく拡張部外面にはヘラによる鋸歯文を施文する。口縁部内面には断面三角形の低い貼付突帯を貼付する。5は胴部最大径の部位に断面三角形の貼付突帯が巡り、その上位に円形の浮文を貼付する。内面はヘラミガキののち横ナデの可能性もある。6～8は平底の底部。

9～24は甕。口縁部が如意形に短く外反するもの(13・14)、逆「L」字形に近く強く



吉田構内本部2号館新営に伴う発掘調査

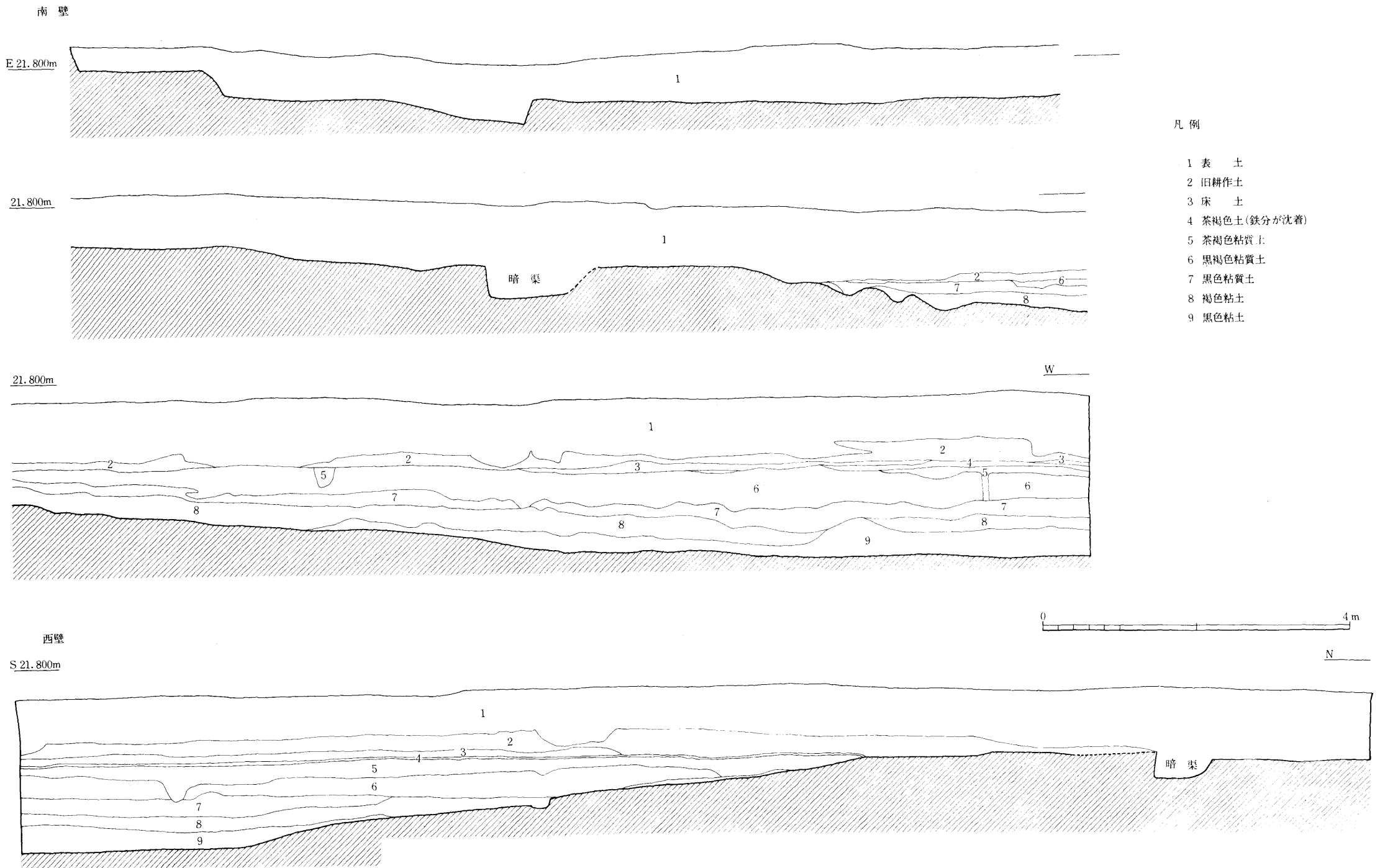


Fig. 49 土層断面図

層位・Aトレンチ出土遺物

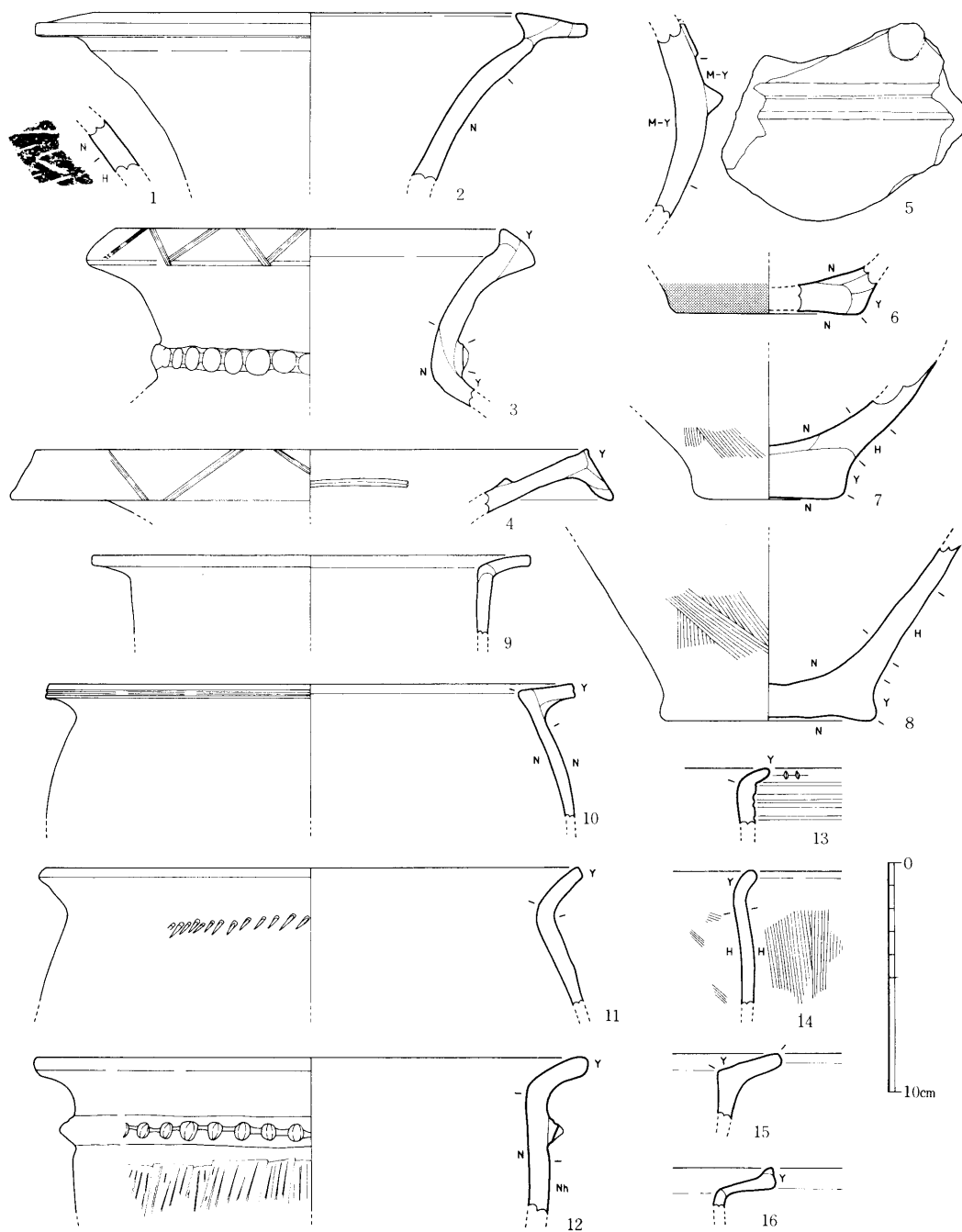


Fig. 50 Aトレンチ出土遺物実測図 (1)

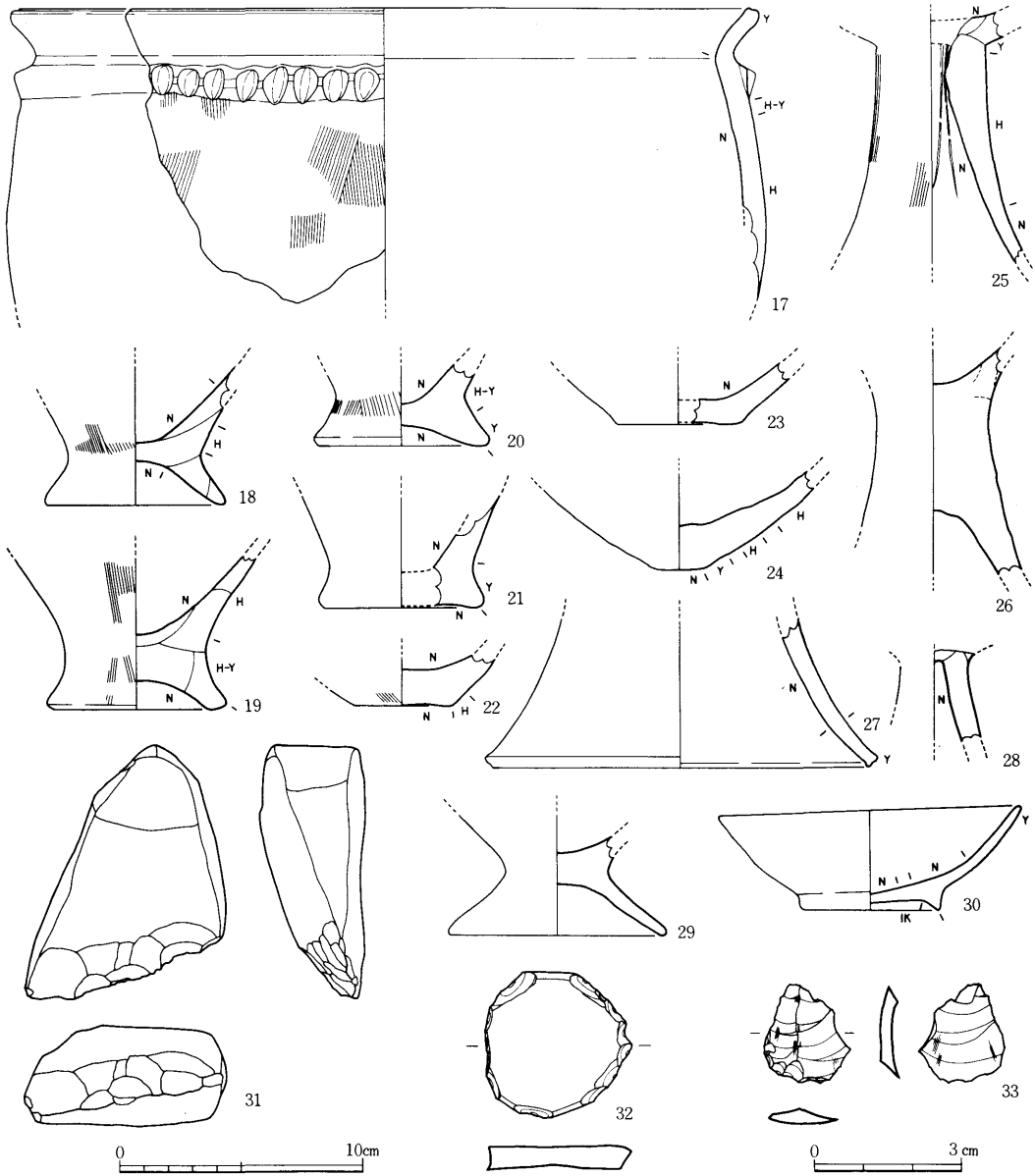


Fig. 51 Aトレンチ出土遺物実測図(2)

屈曲するもの(9・10・15・16)、「く」の字に外反するもの(11・12・17)などがある。13は頸部以下に少なくとも4条の粗いヘラ描き沈線が巡り、口唇部下端にヘラによる刻目を施す。14は口唇部に刻目をもたない。10は須玖式の甕で、口唇部外面にヘラによる1条の沈線が巡る。16は跳ね上げ口縁をもつ。11は頸部外面にヘラによる「ノ」の字の粗雑な

刺突文を施す。12・17は張りの少ない胴部をもち、頸部下位には断面三角形の貼付突帯を1条貼付する。突帯頂部には指圧による刻目を施す。12は突帯の下位に板状工具による擦過が行なわれる。17は口唇部にヘラによる1条の浅い沈線が巡る。18～24は底部。上げ底で側面が裾広がりになるもの（18～20）、平底のもの（21～23）、丸底に近いもの（24）などがある。

25～27は高坏。25は坏部に脚部を接合する。27はゆるやかに開く裾部をもつが、傾きから壺かもしれない。

28・29は土師器。28は円盤充填法の高坏の脚部。29は台付鉢で、脚台部は直線的に斜下方に開く。

30は旧耕土から出土した歴史時代の土師器。断面三角形の高台をもち、体部はあまり内弯することなく立ち上がる。口縁端部はやや尖りぎみに終わる。

31は打製石斧。三角形を呈する素材の形状を生かし、二次加工は刃部にあたる正面下縁に裏面側から行なわれる。素材の長軸と刃部が斜交する。32は土器の器面調整に用いられたと思われる石製円板。二次加工は正裏両面から行なわれているが、正面上下両縁には加工痕はない。33は二次加工のある剥片。寸づまりの縦長剥片を素材とし、正面下縁および左側縁下半に裏面側から二次加工を施す。

(2) Bトレンチ出土遺物 (Fig. 52, PL. 31・47・54)

弥生土器の壺・甕・高坏、磁器皿などの土器類のほか、打製石斧・磨製石斧・紡錘車などが出土した。

34～39は第5層から出土した弥生土器。34～37は壺。34は胴部上半に貝殻腹縁による無軸羽状文を施文する。35は口縁部が下垂する初段階のもので、口縁端部が上下に突出し、肥厚した拡張部外面にヘラによる鋸歯文を施文する。36・37は底部。36は胴部と底部の境がやや不明瞭である。37は底部が円盤状に突出する。38・39は甕。38は張りのほとんどない胴部をもち、口縁部は如意形に短く外反する。口唇部の全面にヘラによる刻目を施す。外面には煤が付着する。39は窪み底の底部。

40～48は第6層から出土した。40～46は弥生土器。40～43は壺で、40・41は胴部上半に貝殻腹縁による無軸羽状文を施文する。42・43は底部。42は器面の状態から外面はヘラミガキかもしれない。44・45は甕。如意形に外反する口縁部をもち、44は口唇部下端にヘラによる刻目を施す。46は高坏の坏部で、口縁端部は外反する。47は打製石斧。扁平な短冊形を呈し、周縁には正裏両面から比較的粗い二次加工が施される。正面下半、裏面には素

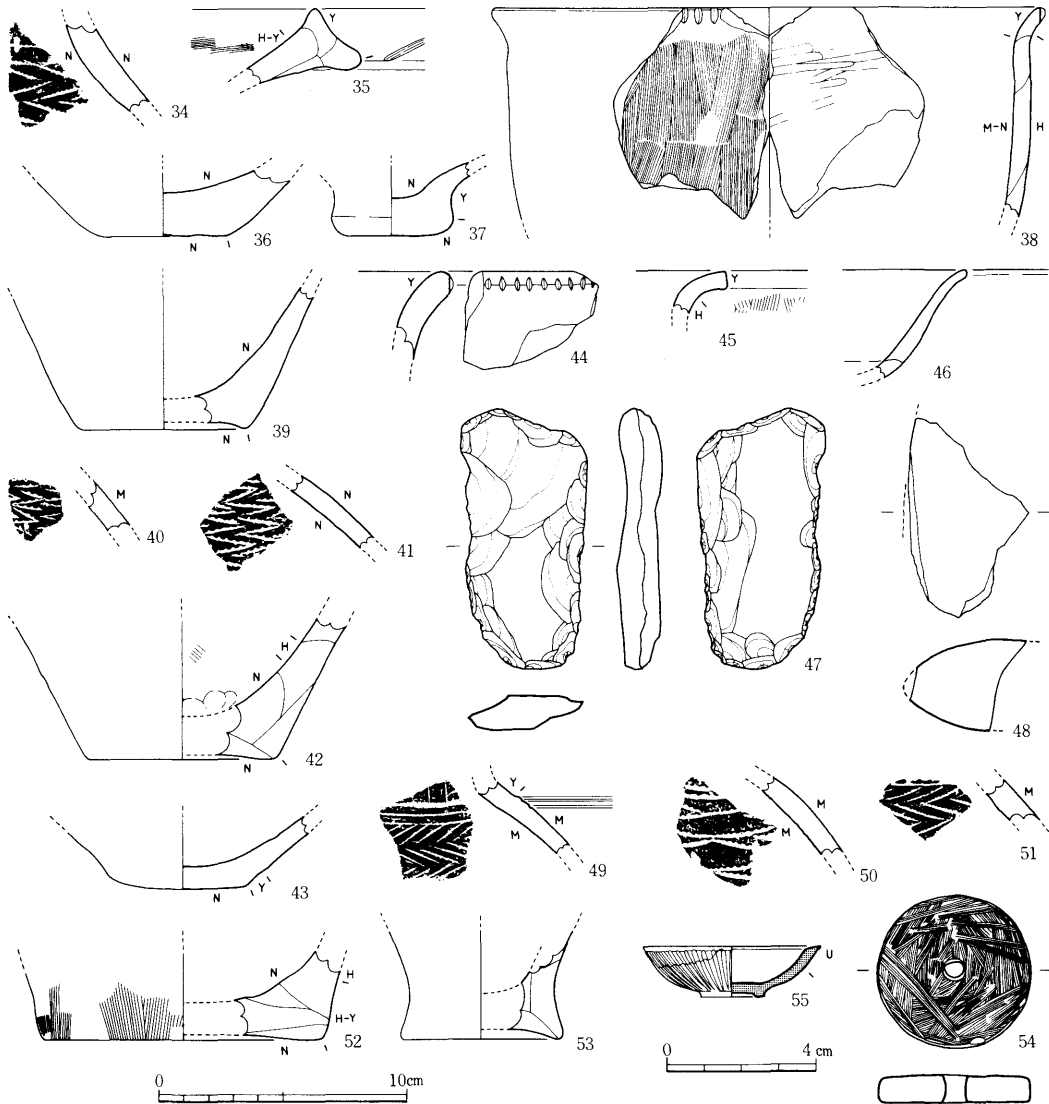


Fig. 52 Bトレンチ出土遺物実測図

材面を残す。48は磨製石斧で、正裏両面は丁寧な研磨される。

49～54は第7層から出土した。49～53は弥生土器。49～52は壺。49は肩部に削り出しによる低い段をもち、ヘラによる2条の沈線の下位に無軸羽状文を施文する。沈線の上位には縦の文様区画分割線がみられる。50・51は貝殻腹縁による羽状文が施文される。53はやや上げ底の甕の底部。54は大形の紡錘車で、正裏両面には丁寧な研磨が行なわれる。

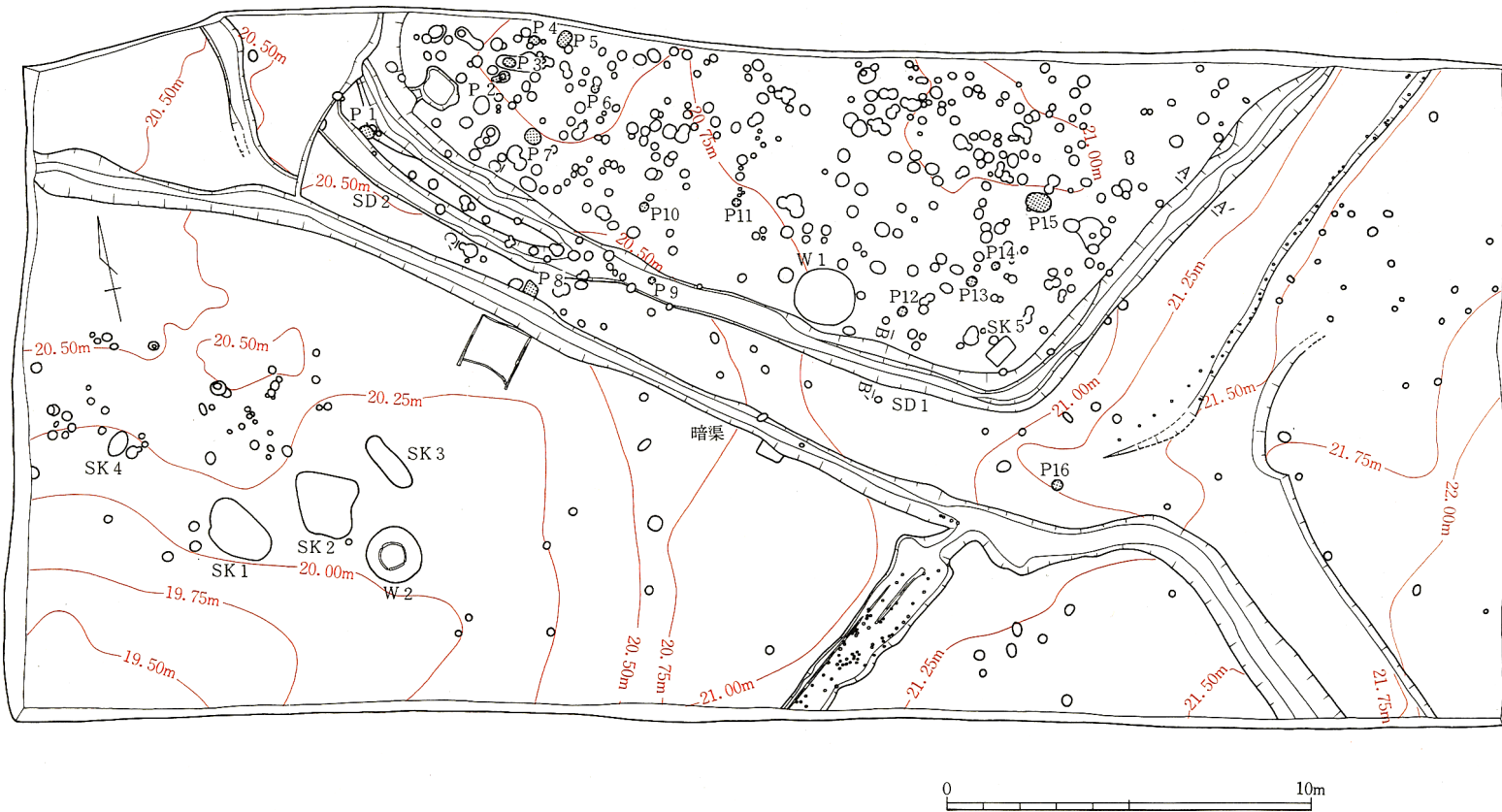


Fig. 53 遺構配置図

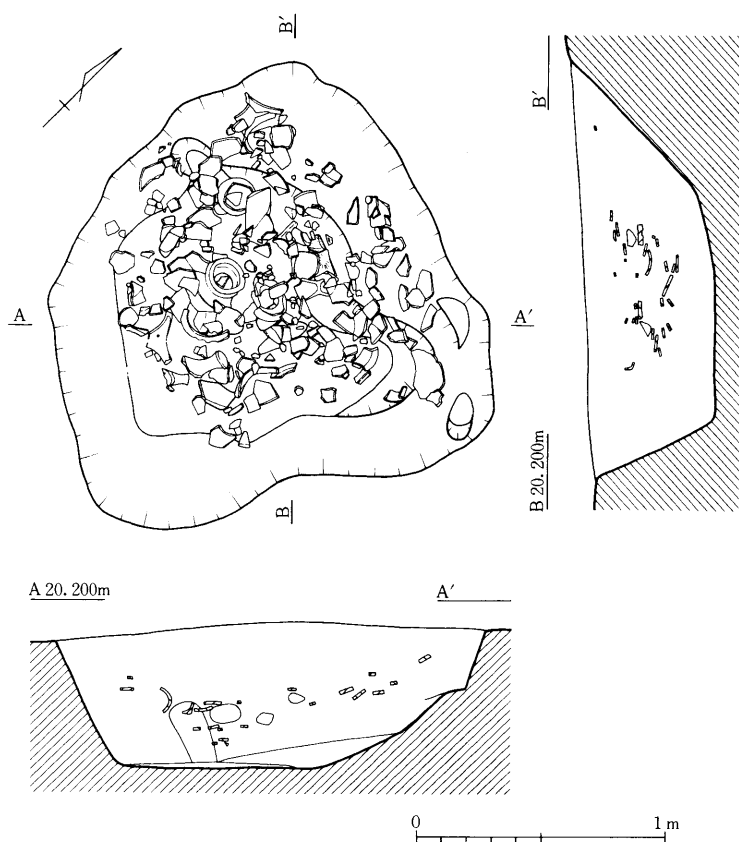


Fig. 54 第1号土坑実測図

55は旧耕土から出土した磁器の紅皿。伊万里系で、体部は内弯して立ち上がり、口縁端部には平坦な面をもつ。低い削り出し高台をもち、体部外面には菊花文を施文する。内面、体部外面上半に施釉する。

#### 4 遺構・遺物

遺構は調査区内で多寡はあるが、ほぼ全面に分布しており、地山の落ち込む南西部では弥生時代の土坑4基、北半部の平坦面では環濠の内側に

井戸、土坑墓を併設する室町時代の屋敷跡のほか、弥生時代から室町時代の柱穴多数を検出した。土坑は標高約20.00～20.25mの傾斜面に群集して分布する。なお、大学の統合移転前の井戸、水田に伴う暗渠もあわせて検出している。

#### (1) 弥生時代の遺構・遺物

##### 土坑

##### 第1号土坑 (Fig. 54, PL. 23(2)・24)

調査区の南西端部に位置する。平面形態は不整形な五角形で、東西軸174cm、南北軸167cmの規模をもつ。底面は平坦であるが、地山は北東から南西に下降しており、検出面からの深さは北東部で55cm、南西部で45cmである。検出面の標高は約20.00～20.10m、底面標高は約19.55mである。検出地点の状況から上部の削平は考えられず、土坑掘削時の規模、形態を保っているものと推察される。

弥生時代の遺構・遺物（土壙）

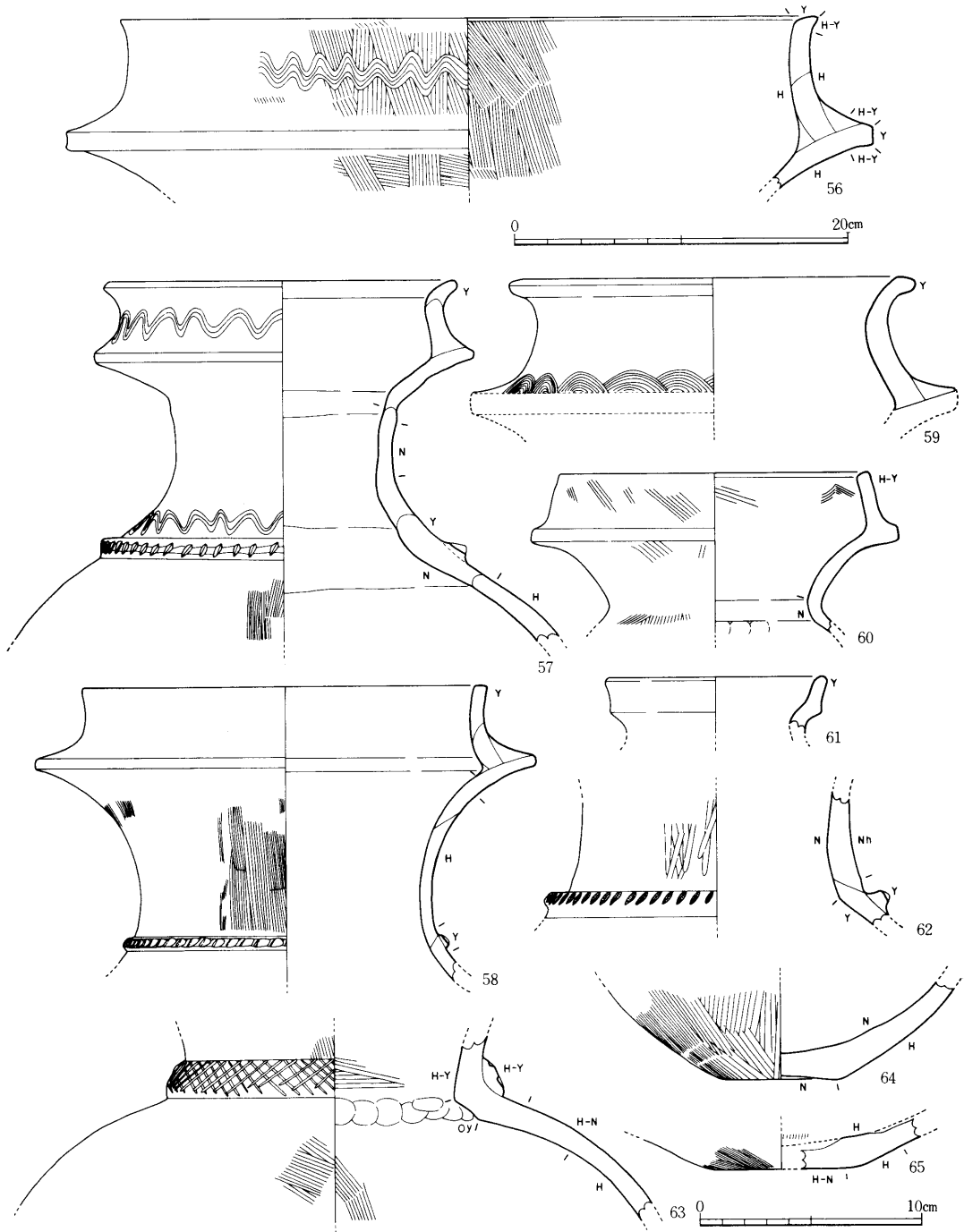


Fig. 55 第1号土壙出土遺物実測図(1)



吉田構内本部2号館新営に伴う発掘調査

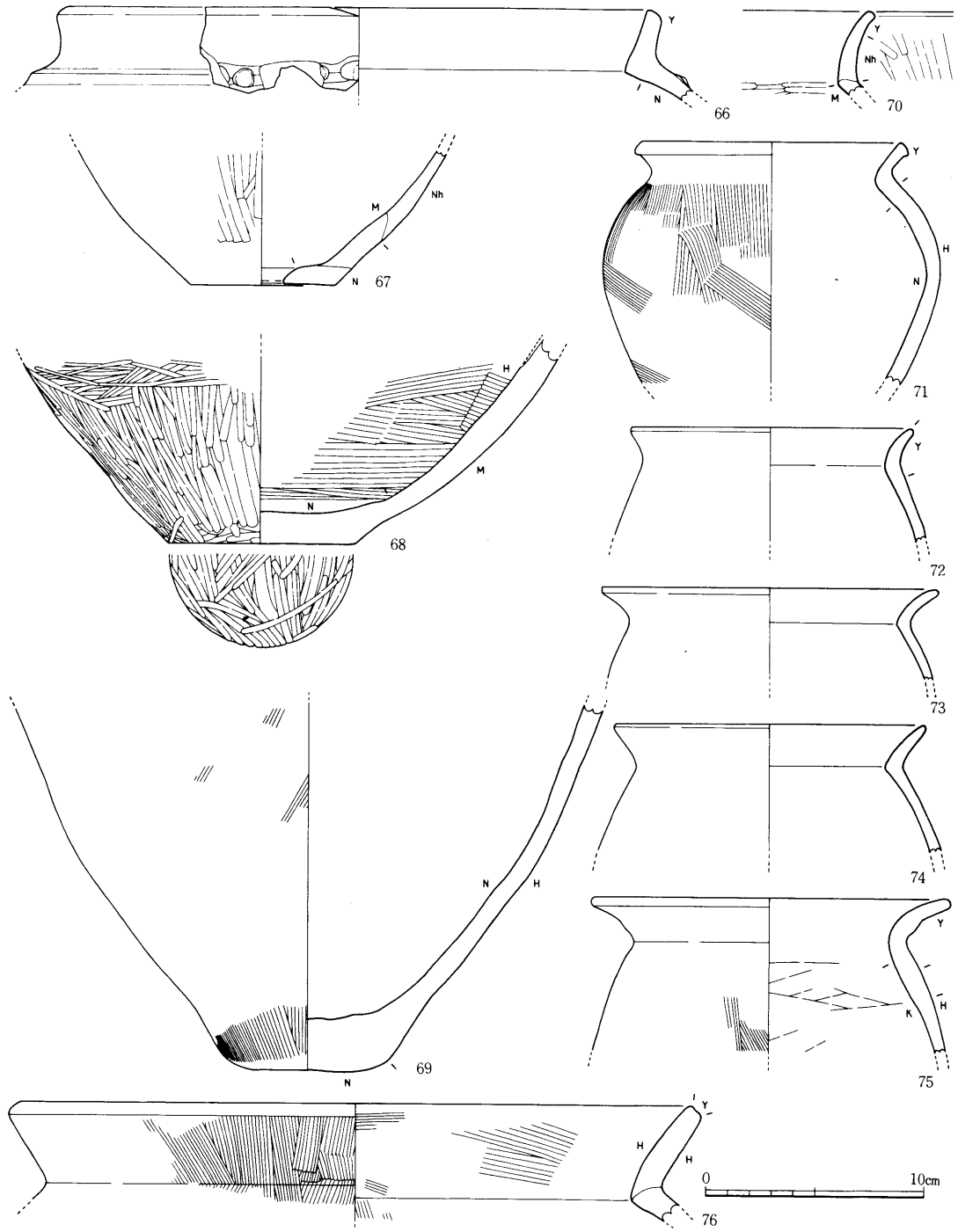


Fig. 56 第1号土壙出土遺物実測図(2)

弥生時代の遺構・遺物（土壙）

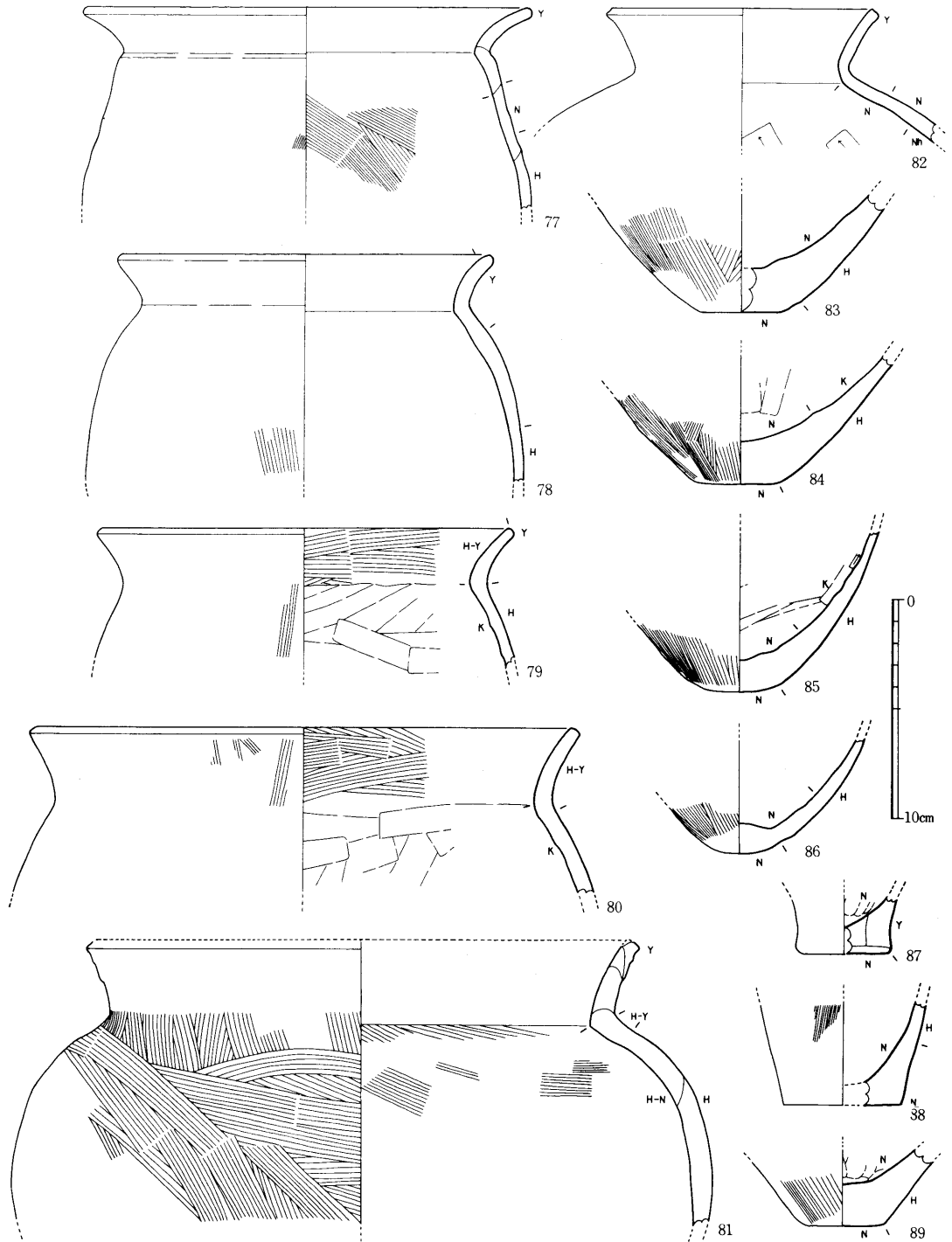


Fig. 57 第1号土壙出土遺物実測図(3)

吉田構内本部2号館新営に伴う発掘調査

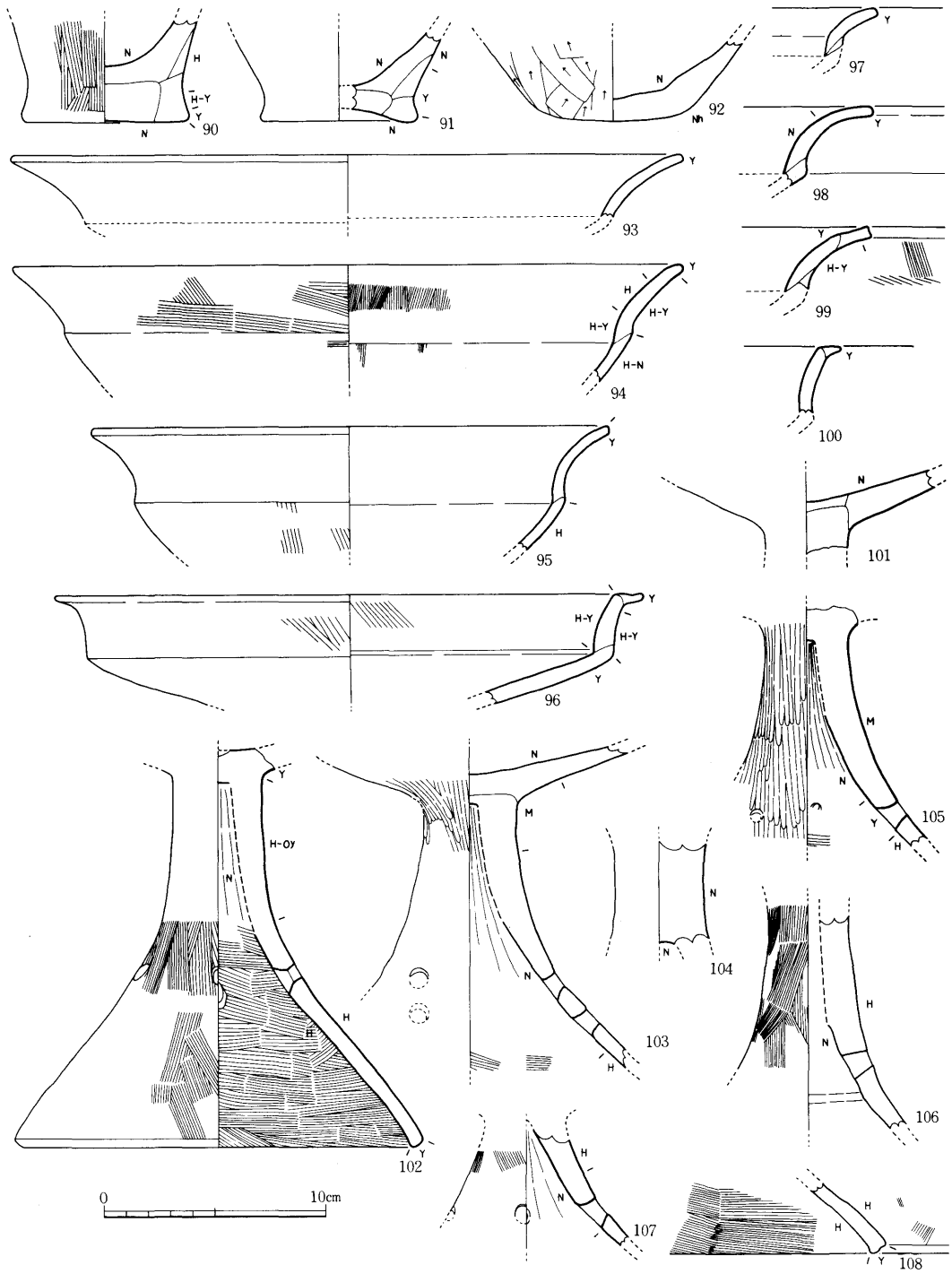


Fig. 58 第1号土壙出土遺物実測図(4)

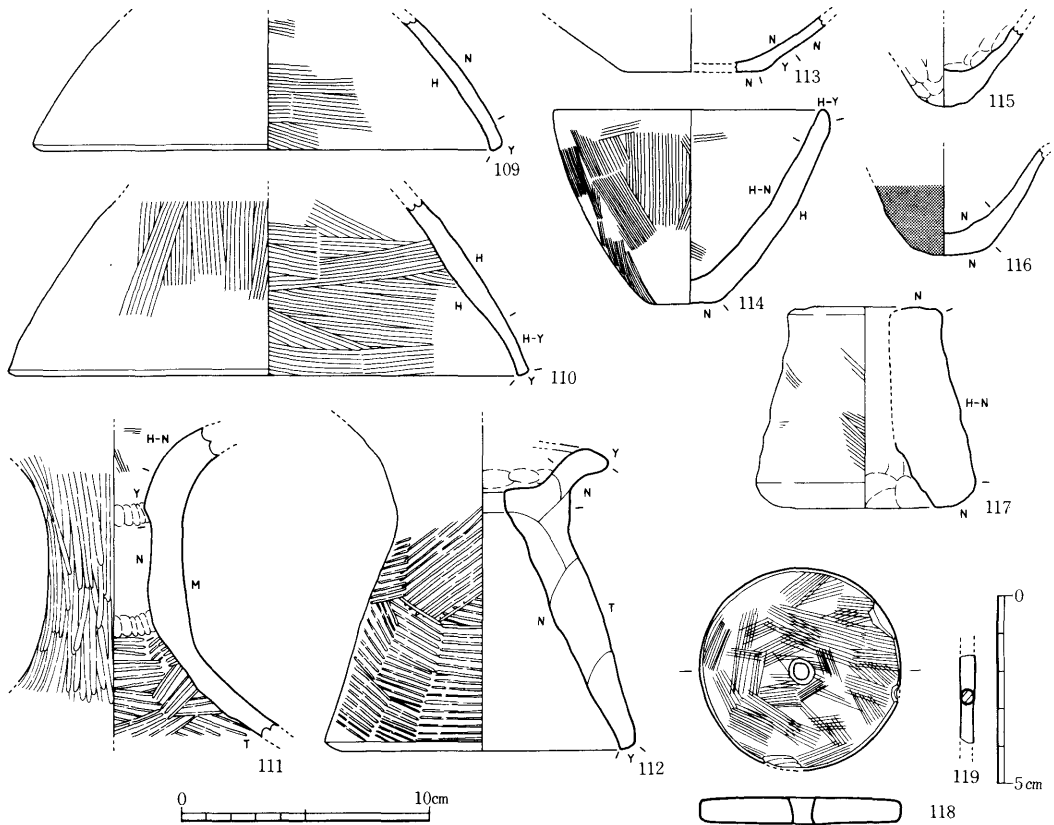


Fig. 59 第1号土壙出土遺物実測図(5)

遺物は多く、弥生土器壺・甕・高坏・鉢・支脚・器台・手捏土器のほか、紡錘車・剥片、鉄鏃などが中央部よりやや南西寄りから集中して出土した。完形品はなく、また、遺物の出土状況から投棄壙と考えられる。弥生時代後期後半～終末。

**出土遺物** (Fig. 55～59, PL. 32～35・47・48・54・55)

56～69は壺。56～61は複合口縁をもつもので、拡張部が内傾するもの（56～60）と短く外方に開くもの（61）とがある。前者には、直線的に立ち上がるもの（60）、外弯して立ち上がり中位付近で直立するもの（56・58）と口縁端部付近で大きく外反するもの（57・59）とがある。拡張部外面の施文には、波状文（56・57）や重弧文（59）があり、無文のもの（58・60）もある。肩部には貼付突帯を貼付し、突帯頂部にヘラ（57）やヘラ状工具（58）による刻目を施す。62は刷毛原体による刻目を施す。63のように斜格子文を巡らすのも、この時期に一般的にみられる手法である。66は張りの強い胴部をもち、口縁部が直

立して立ち上がる。頸部直下には断面三角形の扁平な突帯を貼付し、指圧による刻目を施す。64・65・67～69は底部。外面は刷毛目仕上げのもの（64・65・69）とヘラミガキのもの（67・69）とがある。67は外底面中央に焼成前穿孔がなされ、外面のほぼ全体に煤が付着する。

70～92は甕。70～82は口縁部が「く」の字に外反するもの。71～74は小形品で、口縁部が短く折れ曲がり、口縁部が直線的に外反して端部に面をもつもの（71）と外弯しながら開き、端部が尖るもの（72～74）とがある。75～82は中・大形品が主体で、口縁部は外弯しながら開くもの（77・78）と直線的に開くもの（76・79～82）とがあり、頸部内面に稜をもつものが通有である。胴部内面はヘラ削りのもの（75・79・80）、刷毛目仕上げのもの（76・77・81）のほか、板状工具による擦過が行われるもの（82）がある。75は胴部外面下半、77は口縁部外面上半に煤が付着する。83～92は底部で、丸底ないしは不安定な平底のもの（83～86・92）、平底のもの（87～90）、窪み底のもの（91）がある。外面は刷毛目仕上げであるが、板状工具による擦過が行われるもの（92）もある。84・85は内面をヘラ削りする。

93～110は高坏。93～100は坏部。上半部で反転して外弯しながら開くもの（93～95・97～99）と浅い坏部で上半部が直立して立ち上がり、口縁端部が水平に折れ曲がるもの（96・100）とがある。101～110は脚部。脚部を坏部に挿入するもの（101）や坏部に接合するもの（103）などがある。長脚でゆるやかに開き（102・103・105・106）、裾部が内弯ぎみに広がるもの（102・109・110）が多いが、短脚のもの（107）も存在する。透し穴は焼成前に穿孔され、三方のもの（105）、四方のもの（102・107）のほか、2穴単位で三方に施されるものもある。外面はヘラミガキされるもの（103・105）がある。

111は器台。筒状の中空部をもち、上下両端はゆるやかに外反するものであろう。外面はヘラミガキ、内面下半はタタキが施される。

112・117は支脚。112は片端が外上方に突出する有翼支脚で、外面にはタタキが施される。

113・114は鉢。114は不安定な平底で、胴部から口縁部までゆるやかに内弯しながら立ち上がる。口縁端部は尖りぎみに終わる。

115・116は手捏土器。丸底の鉢で、116の外面は丹塗りされている。

118は大形の紡錘車で、正裏両面の研磨は比較的粗い。119は鉄鎌の莖。

## 第2号土壌 (Fig. 60, PL. 25)

調査区の南西端部に位置し、第1号土壌の西に隣接する土壌である。平面形態は楕円形

を呈し、長軸 188cm、短軸 125cm の規模をもつ。底面はほぼ平坦であるが、地山が北西から南東に下降しており、検出面からの深さは北西部で 50cm、南東部で 37cm である。検出面の標高は 20.00~20.10m、底面標高は 19.65m である。壁面は比較的急角度に立ち上がる。第 1 号土壙同様、検出地点の状況から上部の削平は考えら

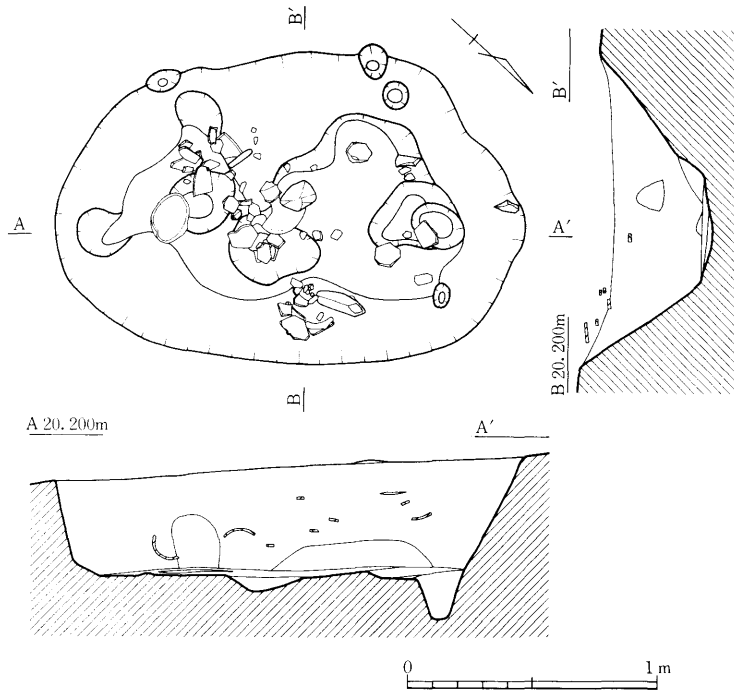


Fig. 60 第 2 号土壙実測図

れず、土壙掘削時の規模、形態を保っているものと推察される。長軸方向は北西—南東。

規模は第 1 号土壙と大差ないが、遺物は少ない。出土遺物には弥生土器壺・甕・高杯のほか、扁平打製石斧・砥石などがある。完形品はなく、また、遺物の出土状況から投棄壙と考えられる。弥生時代中期後半～後期初頭。

**出土遺物** (Fig. 61・62, PL. 35・48・54)

120~125は壺。120は下垂する口縁部をもち、拡張部外面にヘラによる 2 条単位の鋸歯文を施文する。121は口縁部が屈曲して短く上方に立ち上がる。反転部外面の稜は極めて不明瞭で、袋状口縁に近い。頸部、口縁部の外面にはヘラによる沈線が巡る。122は鋤先状口縁をもつもの。123は口縁部が直線的に内傾する複合口縁をもつ。124は口縁部がゆるやかにひらき、端部付近でさらに外方に屈曲する。125は丸底で、張りの強い球形の胴部をもつ。内面の調整は粗細二種類の刷毛原体を用いている。

126~135は甕。胴部最大径が口径を大きく上回り、外弯しながら開く口縁部をもつもの(126・127)や頸部内面に明瞭な稜をもち、長い口縁部が直線的に開くもの(128)などがある。内面は刷毛目やナデ仕上げし、ヘラ削りは行なわれない。また、逆「L」字形に強

吉田構内本部2号館新営に伴う発掘調査

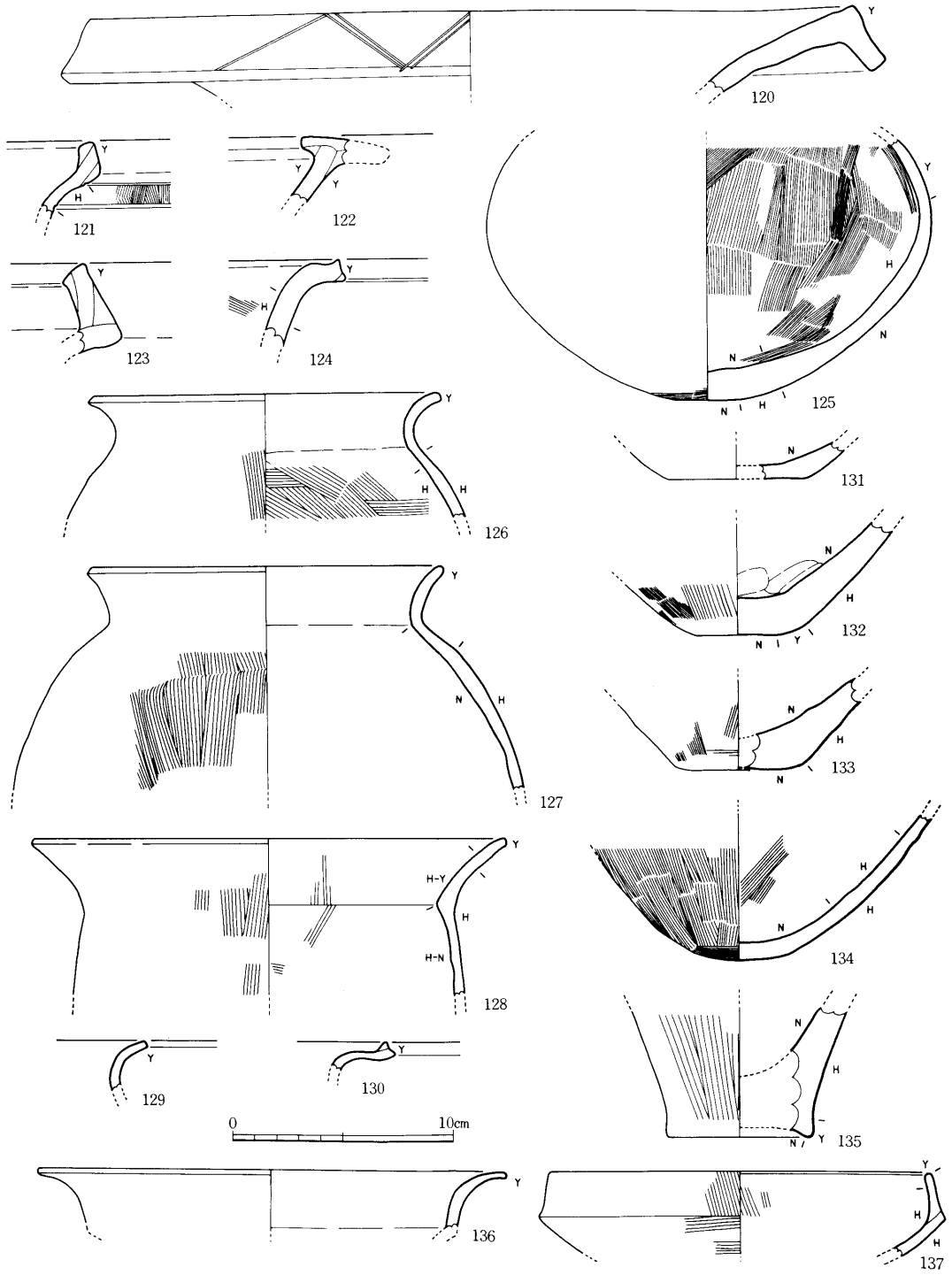


Fig. 61 第2号土壙出土遺物実測図(1)

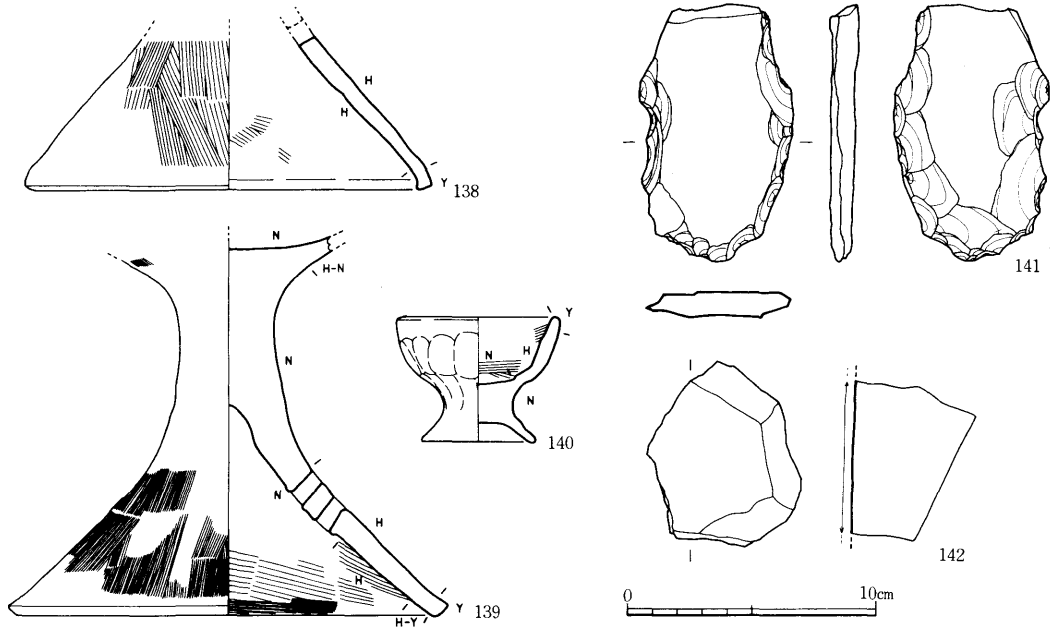


Fig. 62 第2号土壙出土遺物実測図(2)

く屈曲する跳ね上げ口縁をもつもの(130)などもある。131～135は底部。平底のもの、窪み底のもの、底部と胴部の境が不明瞭で不安定な平底のもの、丸底のものなどがある。外面の刷毛目は底部端まで行なわれていない。

136～139は高坏。坏部の形態には二種類あり、上半部で反転して大きく外弯しながら開くもの(136)とゆるやかに内弯しながら立ち上がり、上半部で屈曲して直線的に内傾するもの(137)とがある。脚部は長脚で、外弯ぎみに開き裾端部が内側に屈曲するもの(138)や内弯しながらゆるやかに開くもの(139)がある。

140は手捏土器の高坏ないしは台付鉢。

141は扁平打製石斧。二次加工は上縁部と正面左側縁上端部を除く各周縁に行なわれるが、裏面側は正面側に比べて、大きな剥離面によって構成される。正面左側縁中央部と右側縁上端部にはノッチ状の二次加工が施される。正裏両面中央部には素材面を残す。142は仕上げ砥と考えられる砥石で、研砥面は一面だけ残存する。

### 第3号土壙 (Fig. 63, PL. 26(1))

調査区の南西端部に位置し、第1号土壙の東に隣接する土壙である。平面形態は長楕円形を呈し、長軸173cm、短軸50cmの規模をもつ。底面は平坦で、検出面からの深さは30cmで



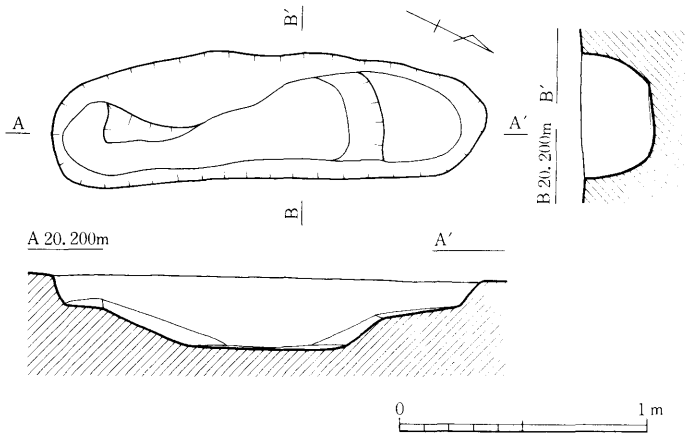


Fig. 63 第3号土壙実測図

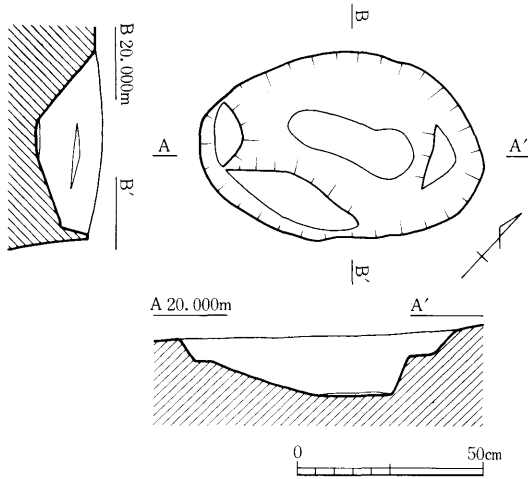


Fig. 64 第4号土壙実測図

ある。北部は底面から約15cm上位に階段状のテラスをもつ。検出面の標高は約20.10m、底面標高は約19.80mである。長軸方向は北西-南東。

出土遺物には弥生土器が若干あるが、小片のため図化できない。

#### 第4号土壙

(Fig. 64, PL. 26(2))

調査区の南西端部、第2号土壙の北西に位置する小形の土壙である。平面形態は楕円形を呈し、長軸75cm、短軸49cmの規模をもつ。上面の規模にくらべて底面は狭く、検出面からの深さは17cmである。検出面の標高は約19.95m、底面標高は約19.80mである。長軸方向は北東-南西。

出土遺物はないが、検出

地点および周辺の遺構の分布状況などから弥生時代のものと考えられる。

### (2) 室町時代の遺構・遺物

#### 1) 土壙

#### 第5号土壙 (Fig. 65, PL. 26(3)(4))

調査区中央部からやや東、第1号溝の内側のコーナーで検出した土壙で、長軸方向が第1号溝の東辺と平行に掘削されている。平面形態は長方形で、長軸81cm、短軸49cmの規模をもつ。壁面は垂直で、検出面からの深さは46cmである。検出面の標高は約21.05m、底面

室町時代の遺構・遺物（土壙・井戸）

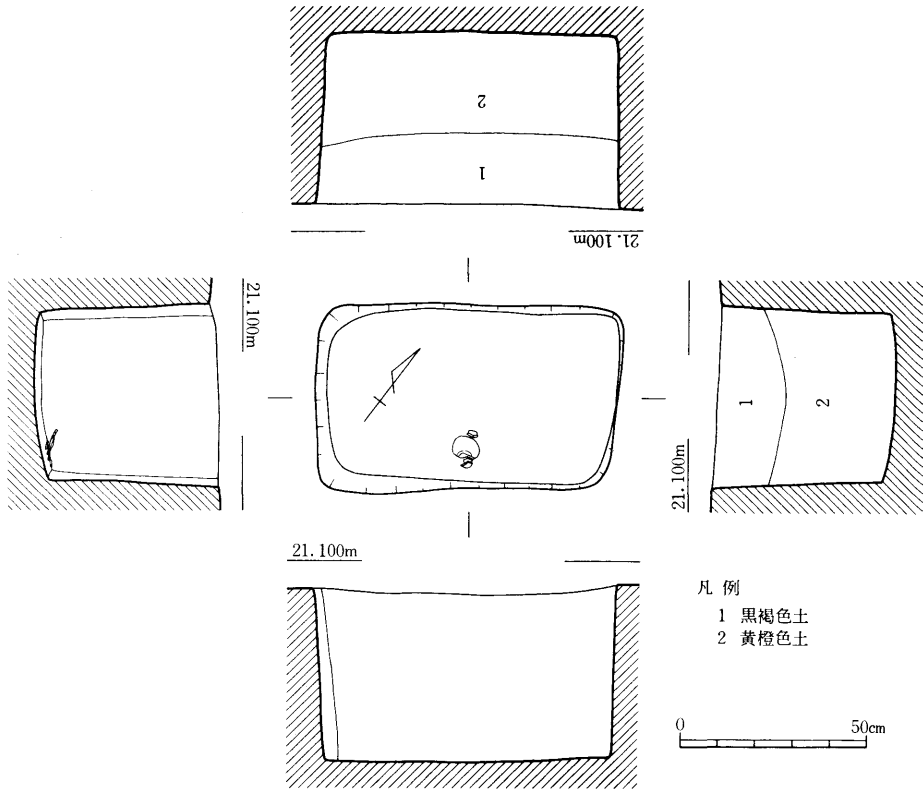


Fig. 65 第5号土壙実測図

標高は約20.60mである。長軸方向は北東-南西。壙底の南辺寄りから歴史時代の土師器皿2個体分が出土している。人骨は出土しなかったが、検出地点<sup>4)</sup>、規模、形態、遺物の出土状況などから土葬の幼児墓と考えられる。<sup>5)</sup>16世紀末～17世紀初頭。

出土遺物 (Fig. 66, PL. 36・48)

143・144は土師器皿。143は底部と体部の境が不明瞭で、体部は直線的に立ち上がる。口縁端部はわずかに肥厚する。144は体部が内弯して立ち上がり、口縁端部は面をもつ。外面および口縁部内面には煤が付着する。糸切り底で、144は板目圧痕を残す。145は非ロクロ成形の土師器坏もしくは皿で、口唇部内面は面取りぎみに内傾し、口縁端部は先細りになる。内面には煤が付着する。大内氏館跡などで特徴的に出土する「B式土師器」<sup>6)</sup>にあたる。

2) 井戸

第1号井戸 (Fig. 67, PL. 27)

第1号溝の内側のコーナー付近で検出した石組の井戸で、第5号土壙の北西約3.7mに位

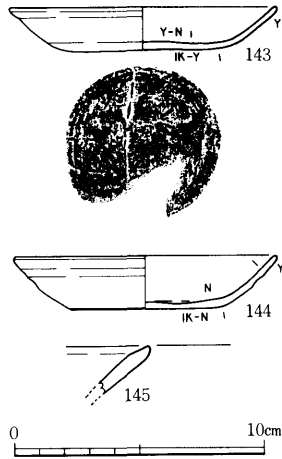


Fig. 66 第5号土壙出土遺物実測図

置する。直径165～180cmの円形の掘り方を持ち、検出面からの深さは約2mで、底面では激しく湧水する。石組の内径は上端が75～80cm、下端が55～60cmである。長軸約30～60cmの緑色片岩を主体とした板石を用いて、底面から中位までは大ぶりの板石を垂直に近く、それより上位は外方に開きながら積み上げる。検出面の標高は約21.00m、底面標高は約18.90mである。底面には曲物桶が設置されている。

埋土中から歴史時代の土師器皿、須恵質土器播鉢、瓦質土器、陶器、銭貨および桃の種子などの植物遺体が出土した。16世紀前半。

#### 出土遺物 (Fig. 68, PL. 36・48・49・55)

146～153は土師器。146～153は皿。口径12～13cm、器高3cm前後で、体部が内湾しながら立ち上がり、そのまま口縁部にいたるもの(146～148)と口縁端部が外反するもの(149)、体部が直線的に立ち上がるもの(150～152)とがある。底部端には稜をもつもの(146～148)と丸いもの(149・150・152)がある。底部内面は回転横ナデのままのもの(149)があるが、大半はそののち静止ナデを行う。体部が直線的に立ち上がるものには外底面に板目圧痕がみられる。153は小皿で、体部は内湾しながら短く立ち上がる。146～153とも糸切り底。154は須恵質土器の播鉢で、口縁端部は肥厚して内上方に突出する。内面は火熱を受け、部分的に煤が付着する。155は初鑄1037年の皇宋通寶、156は初鑄1068年の熙寧元寶で、いずれも楷書。

### 3) 溝

#### 第1号溝 (Fig. 53・69, PL. 28(1)～(3))

調査区の北部を「コ」の字状に巡る溝で、北への延長部分は調査区外に及ぶため完掘していない。西への延長部分は後世の削平によって消失している。南辺約21m、東辺約13m以上、幅約70～100cmの規模を持ち、検出面からの深さは東辺で35～40cm、南辺で15cmである。断面形はおおむね播鉢状であるが、溝底が最も広い南辺中央部では逆台形をなす。底面の標高は、東辺で約20.80m、南辺で約21.25mで、溝底は東へ向かうにつれて下降する。

出土遺物には歴史時代の土師器坏・皿、瓦質土器播鉢・鍋・こね鉢・甕・火鉢、土師質土器鍋、須恵質土器盤、貿易陶磁器青磁碗、陶器碗・皿・鉢・甕、磁器碗・湯呑・燭台、鉄釘、敲石、石臼などがある。16世紀末～17世紀初頭。

出土遺物

(Fig. 70~73, PL. 36・37・49・54・55)

157~163は土師器。157・158は坏で、底部端の稜は不明瞭。159~163は皿で、底部端に稜をもつもの（159~161）と丸いもの（162・163）とがある。163は口縁端部が肥厚し、面をもつ。いずれも糸切り底。

164~185は瓦質土器。164~170は挿鉢。口縁端部の形状によって三種に大別される。端部を内側に丸く折り返すもの(164)、内面に貼付した粘土帯が断面三角形のもの（165・166・168・169）、長方形のもの（167）がある。このうち、168は粘土帯が扁平で、端部が肥厚したようにみえる。166は端部外面に2条の凹線が巡り、170は外底面に板目圧痕が認められる。おろし目は5~7本単位でかき上げられる。171~181は鍋。口縁部が屈曲して短く外上方にのびるもの（171~173）、内面に段をもち、口縁端部が内上方に突出するもの（174・175）、口縁端部が内外方につまみ出されて肥厚し、端部が平坦な面をもつもの（176・177）などがある。

179~181は鍋の脚部で、181は端部が屈曲しない。182・183はこね鉢。内弯しながら立ち上がる体部をもち、口縁端部は内側に折り曲げる。183は片口で、体部下半は格子タタキが施される。184は甕で、口縁部は直立し、頸部上位の外面には凹のスタンプ文を施文する。185は火鉢。三足の低い脚部をもち、体部はやや内弯して立ち上がる。肩部の張りは強く、口縁部は肥厚して端部は平坦な面をもつ。口縁部外面には3個単位のヘラによる刻目が巡る。体部外面は平行タタキののちヘラミガキが行なわれる。

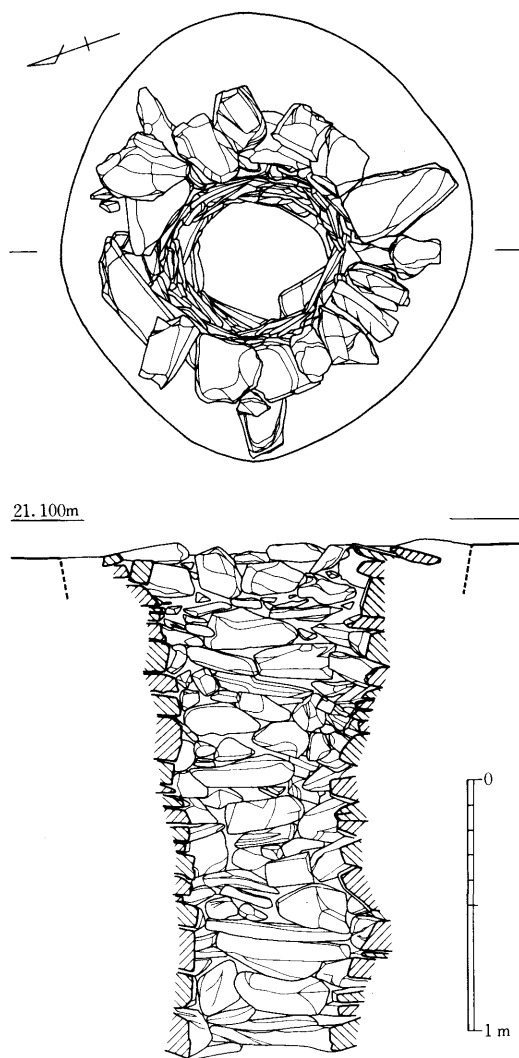


Fig. 67 第1号井戸実測図

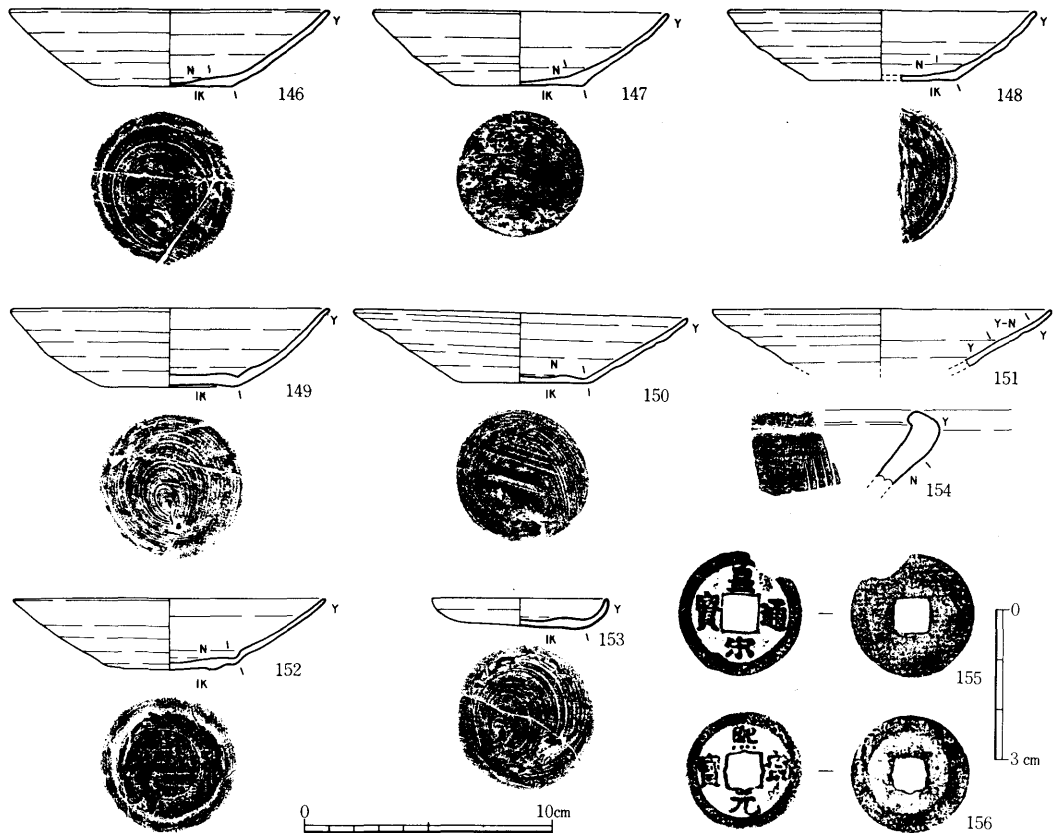


Fig. 68 第1号井戸出土遺物実測図

186～191は土師質土器の鍋の脚部。

192は須恵質土器の盤。体部は直線的に立ち上がり、口縁端部は平坦な面をもちわずかに内傾する。口縁部外面には断面三角形の双耳の把手を貼付する。

193は龍泉窯系青磁の碗。口縁端部は外反し、玉縁状にわずかに肥厚する。内面には2条の沈線と片彫り文様が認められる。

194～203は陶器。194・199・200は皿。194は体部内面に竹草、木の幹、外面に唐草文を染付する。畳付は無施釉。200は低い削り出し高台をもち、見込みに目跡痕が4ヶ所認められる。195～198は碗。195は体部外面に2条の圈線を巡らし、その間に網目文を染付する。高台脇から外底面は無施釉で、内外面に貫入がみられる。肥前系。197は腰の部分でわずかに折れ、直線的に口縁部に移行する。粘性の強い長石釉の総掛けで、高台はしっかり削り出す。萩焼系。198は天目碗。高台脇に段をもち、高台脇から口縁部のくれ部までは丸みを

もちながら開く。口縁下のくれは強い。口唇部は丸く、端部は外反する。高台は深さ3mmの削り出し高台で、高台脇から外底面までは露胎。美濃系。201は皿で、体部上半で外方に屈曲し、口縁端部は折縁状に肥厚する。体部内面には6弁の菊印花が押圧される。軟質の生地で、釉ががりは悪い。瀬戸系。202は鉢で、口縁端部が玉縁になる。口禿げ。203は甕で、口縁端部を外側に折り曲げ肥厚させる。備前系。

204～208は磁器。204～206は白磁碗。207は湯呑で、体部下半で折れ、直線的に口縁部に移行する。

外面には唐草文を染付する。208は仏飯器ないしは燭台で、畳付は釉をかき取る。肥前系。

209は円礫素材の敲石で、正裏両面に敲打痕が認められる。210は鉄釘であろう。断面が中空の方形で、頭部が片方に大きく折れ曲がる。211は石臼。下臼で6条単位の刻目が放射状に施される。

### 第2号溝 (Fig. 53・69)

調査区の北西部を北西—南東に走行する溝で、第1号溝に切られている。西への延長部分は後世の削平によって消失している。検出長は約8.5mで、幅約50～55cmの規模をもつ。検出面からの深さは15～20cmで、溝底標高は約21.20m。断面形は逆台形を呈する。

出土遺物には瓦質土器播鉢・鍋・こね鉢、陶器播鉢、須恵質土器播鉢などがある。16世紀末～17世紀初頭。

### 出土遺物 (Fig. 74, PL. 37・38・49)

212～216は瓦質土器。212～214は播鉢で、体部は直線的に立ち上がるもの(212)と丸みをもって立ち上がるもの(213・214)とがある。おろし目間の間隔が広いもの(214)もあり、6本単位(212・214)、9本単位(213)でかき上げられる。215は鍋。体部の屈曲が弱く、口縁部は直線的に長くのび、端部は肥厚する。外面には煤が付着する。216はこね鉢で、体部は直線的に立ち上がる。

217は陶器の播鉢。糸切り底で、おろし目は密にかき上げられる。備前系。

218は須恵質土器の播鉢。成形は粗雑で、口縁端部の上下両端に断面三角形の粘土帯を貼付して肥厚させる。口縁端部には面をもつ。おろし目は7本単位でかき上げられる。

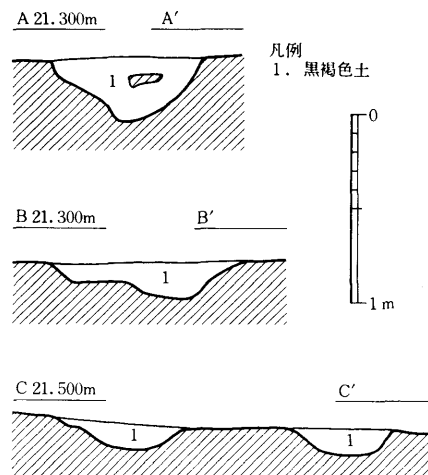


Fig. 69 第1・2号溝土層断面図

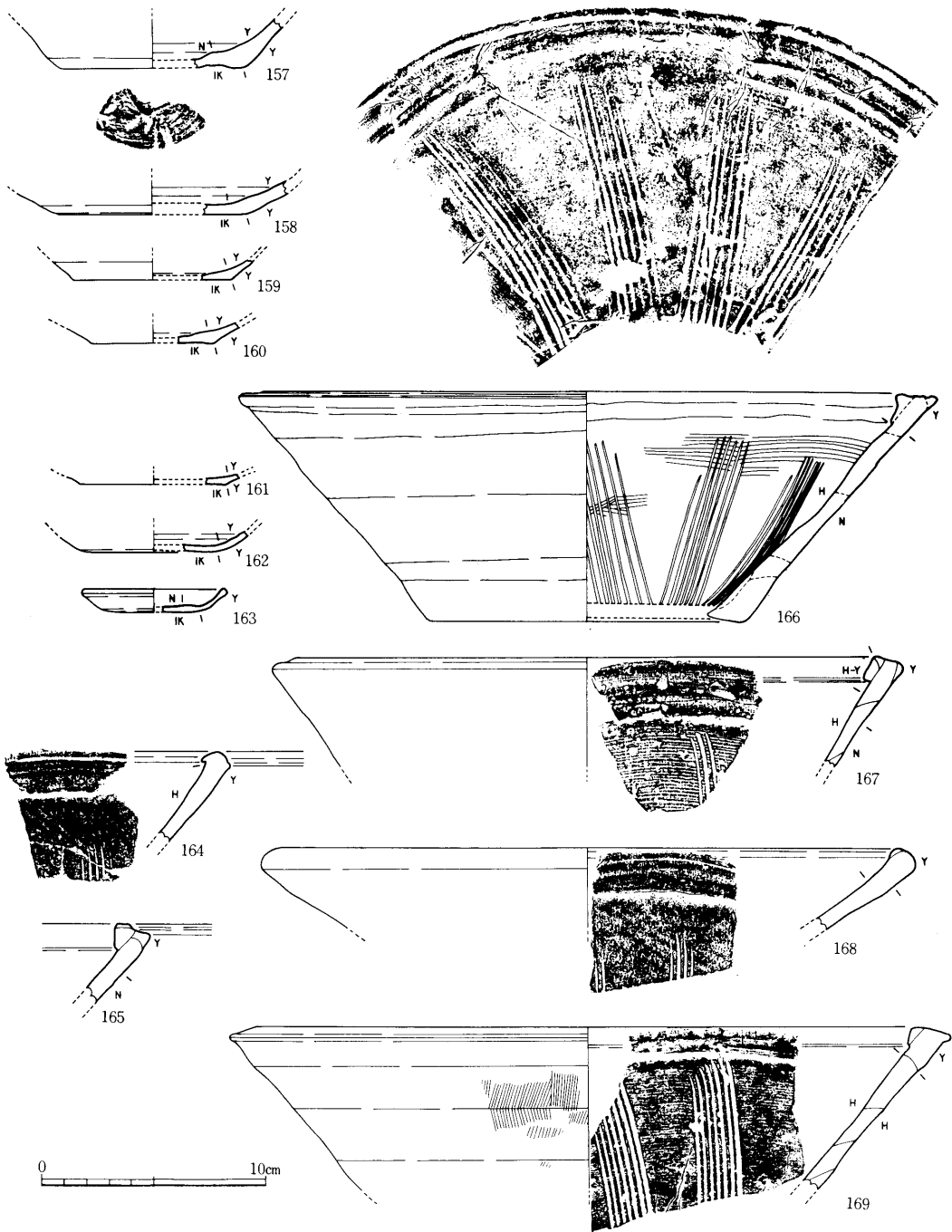


Fig. 70 第1号溝出土遺物実測図(1)

室町時代の遺構・遺物（溝）

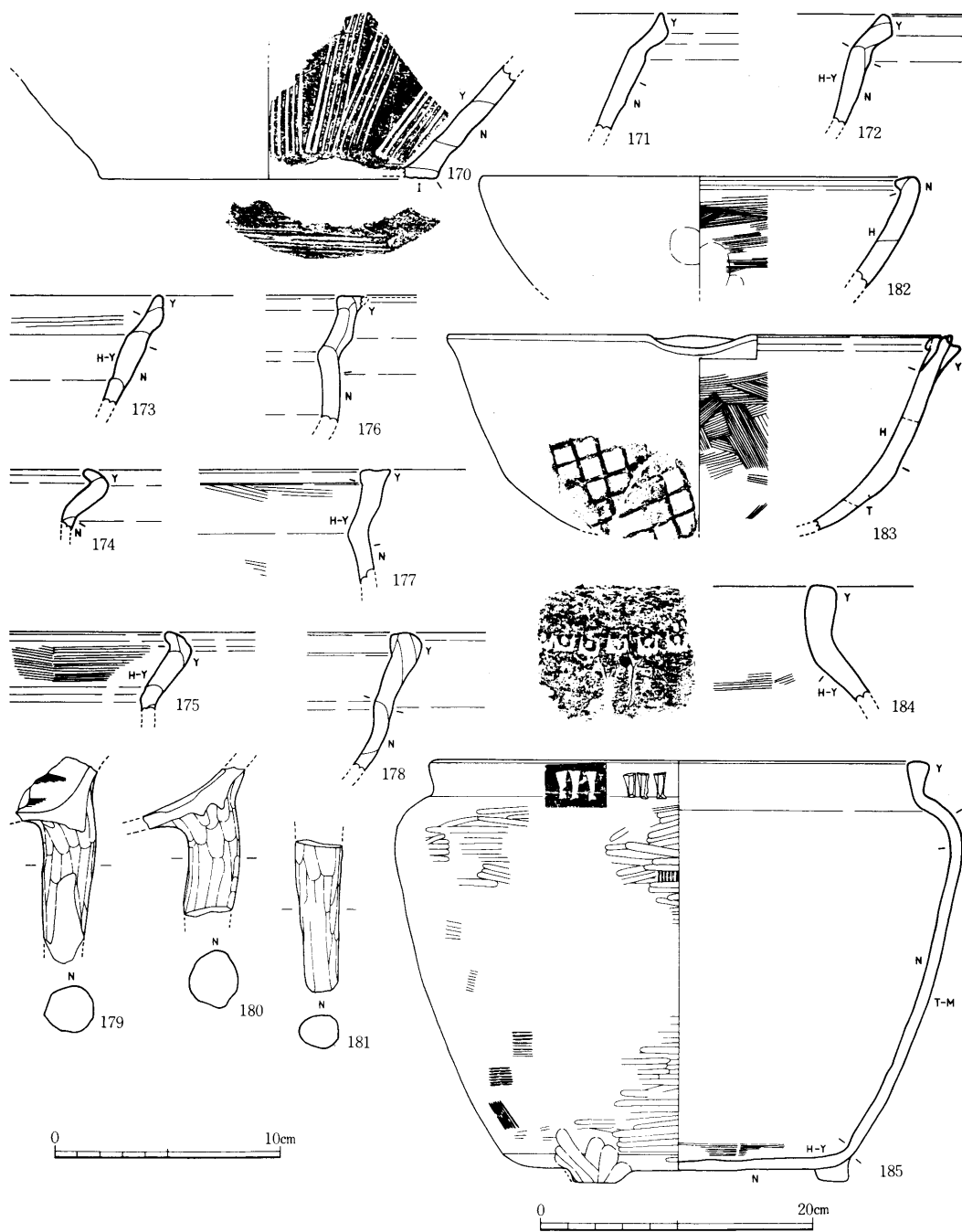


Fig. 71 第1号溝出土遺物実測図(2)



吉田構内本部2号館新営に伴う発掘調査

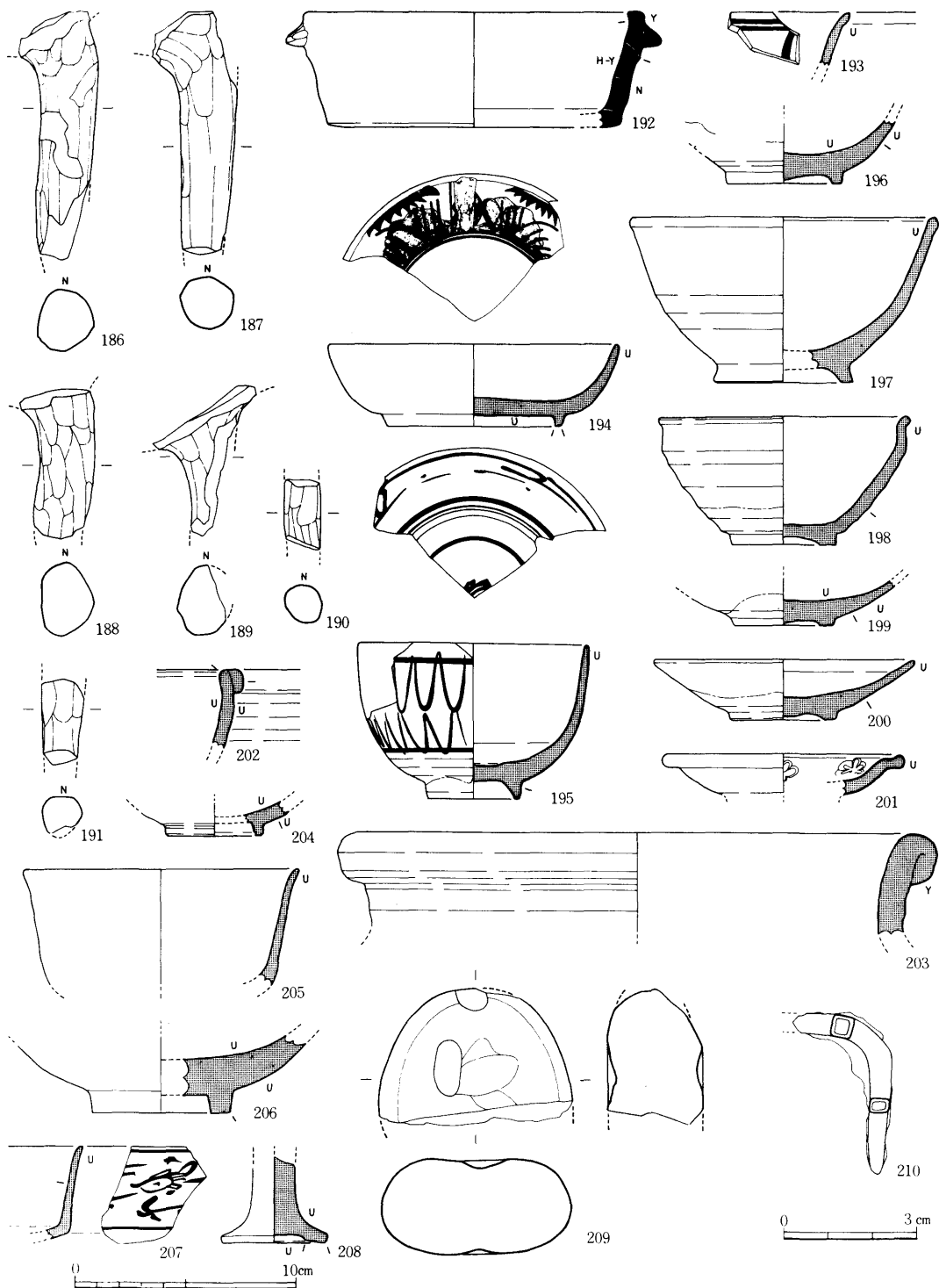


Fig. 72 第1号溝出土遺物実測図(3)

(3) 柱穴 (Fig. 53, PL. 28(4))

第1号溝の内部を中心に弥生時代中期～室町時代の多数の柱穴を検出した。なお、環濠内部は一部調査区外にあたるため完掘しておらず、室町時代の掘立柱建物跡の配置状況は将来の調査を待つことにしたい。

出土遺物 (Fig. 75, PL. 38・49・54)

219・220は土師質土器。219は鍋で、口縁部は屈曲して短く外上方にのびる。口縁端部は上方に突出ぎみになる。220は甕で、口縁部は外弯しながら短く開き、端部は肥厚する。221～226は歴史時代の土師器。222は糸切り底の坏で、体部が内弯して立ち上がる。221・223～225は糸切り底の皿。223・225は底部端

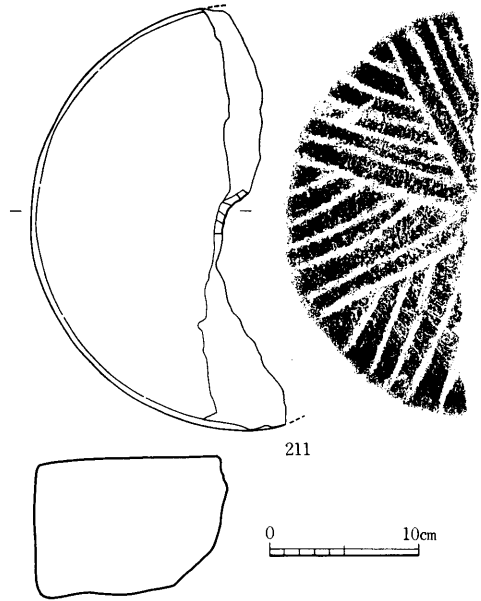


Fig. 73 第1号溝出土遺物実測図(4)

に稜をもつ。224は口縁端部が屈曲して上方に立ち上がる。226は糸切り底の台付皿で、台脚部は直立する。227は龍泉窯系の青磁碗で、内弯して立ち上がる体部をもち、端部内面は面取り風になる。内面には一条の沈線が巡り、その下位に片彫りの唐草文が認められる。228・229は弥生土器の高坏。228はゆるやかに裾部まで開く脚部。229は坏部で、上半部は反転して外弯しながら開く。上半部は長めで、反転部内面には稜をもつ。230は砥石で、上下両面を研砥面とする。231・232は歴史時代の土師器皿で糸切り底。231は口径に比べて器高が高く、口縁端部は尖る。233は陶器の碗で、竹節状の高台はしっかり削り出される。内外面とも無施釉。234・235は弥生土器。甕の底部で、窪み底と上げ底のものがある。236は歴史時代の土師器皿。器壁は薄手で口縁端部は先細りとなる。糸切り底で、板目圧痕が認められる。237は跳ね上げ口縁をもつ弥生土器の甕。

なお、各遺物の出土地点は出土遺物観察表を参照されたい。

(4) 包含層出土遺物

1) 第5層出土遺物 (Fig. 76～83, PL. 39～42・50～55)

縄文土器 (257)

257は突帯文の甕で、口縁端部はわずかに外反ぎみになる。突帯は口縁端に近く、頂部には半裁竹管風の工具による刻目を施す。

吉田構内本部2号館新営に伴う発掘調査

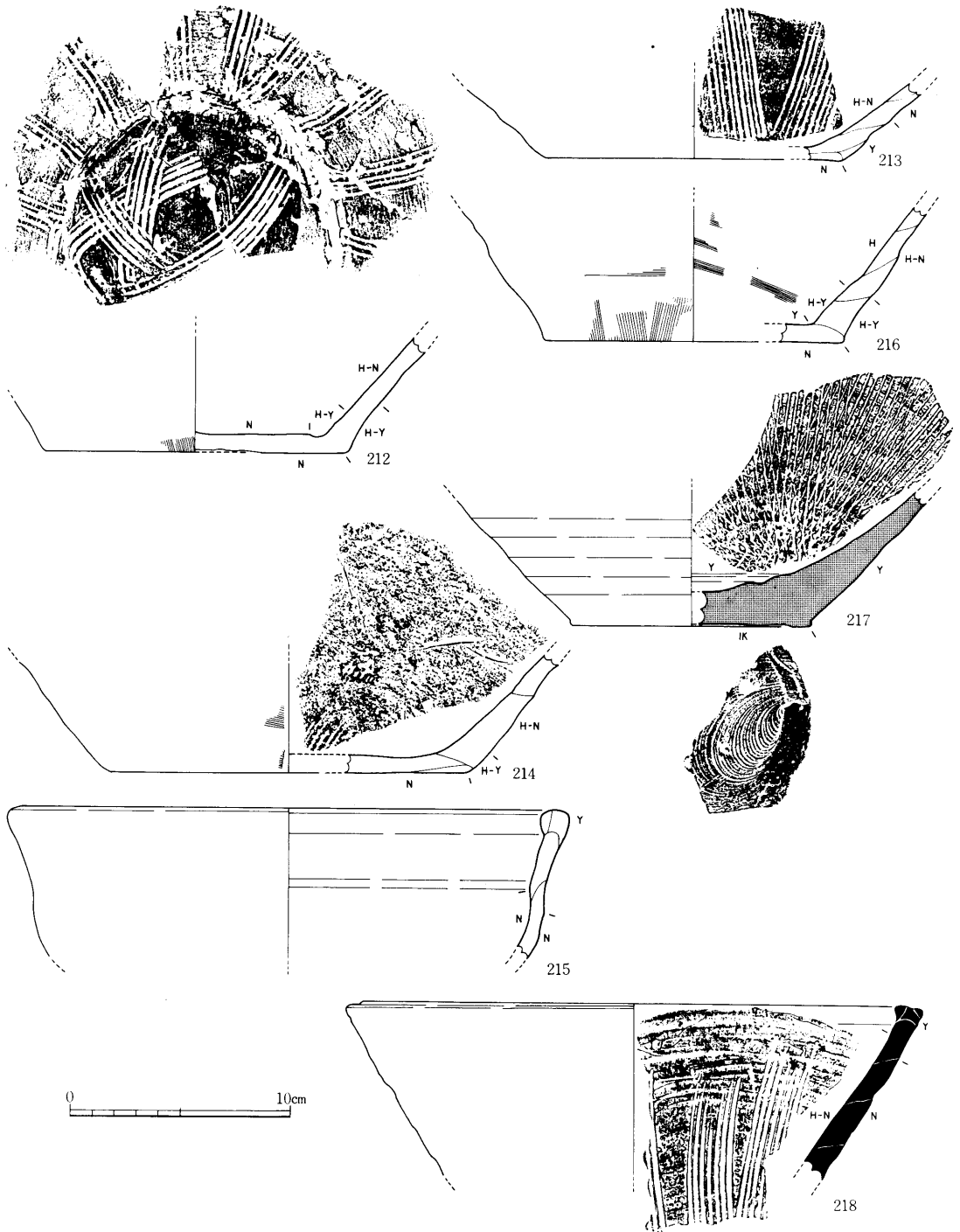


Fig. 74 第2号溝出土遺物実測図

第5層出土遺物

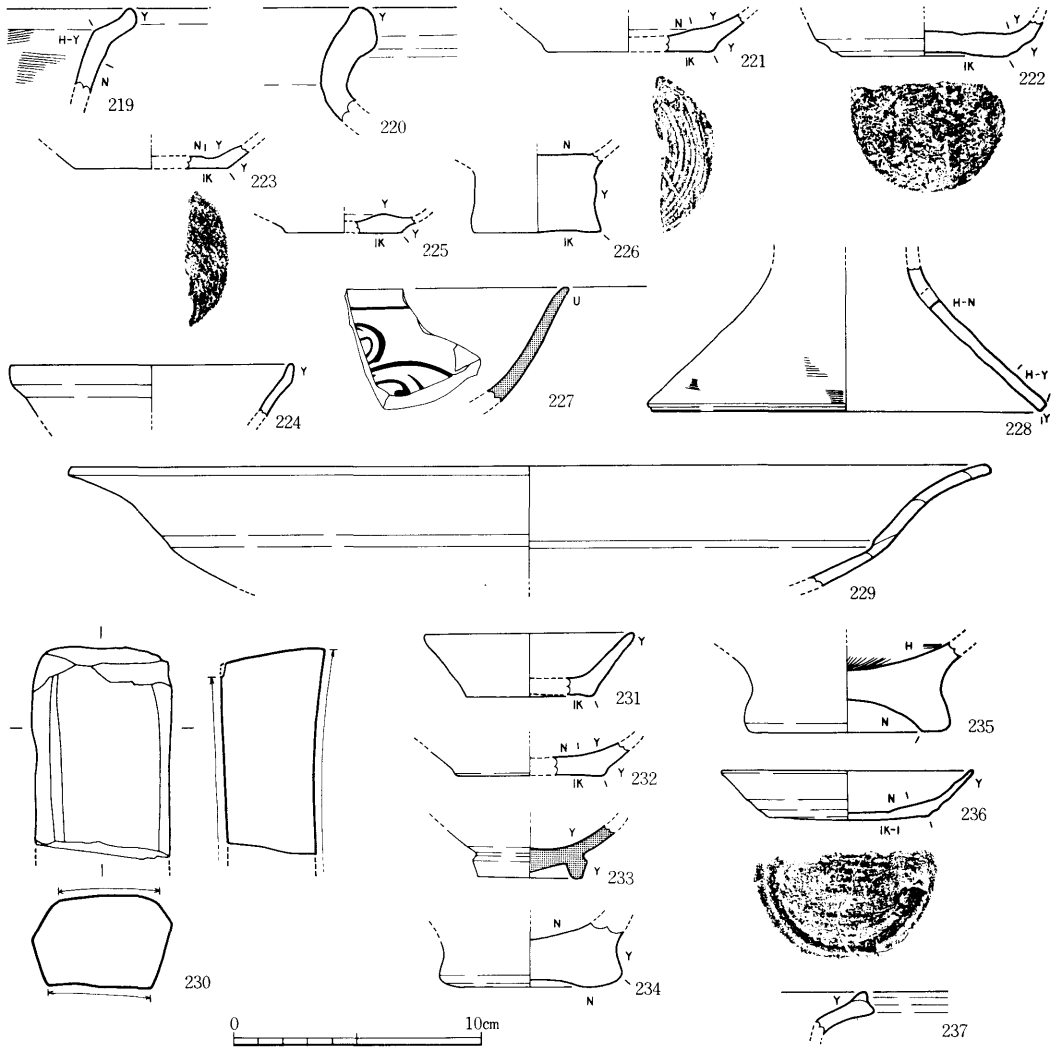


Fig. 75 柱穴出土遺物実測図

弥生土器 (238~256・258~308)

238~256は壺。前期のものは、胴上半部に無軸羽状文や山形文を貝殻腹縁 (238・239) やヘラ (240・241) で施文するものなどがある。中期のものは、口縁端部を上下両方に拡張させるもの (242)、口縁部を下垂させ、拡張した口縁部外面に鋸歯文を施文するもの (243)、斜下方に開く鋤先状口縁をもつもの (244・255) などがある。255は内側への張り出しが強く、端部は肥厚して口唇部は凹線状に窪む。口縁部外面には扁平な円形浮文を貼付する。また、櫛描文を施文するもの (245・246) もある。245は肩部に4本単位の直線

文、246は頸部に7本単位の直線文を2条巡らし、その間に3本単位の山形文を施文する。245は外面縦刷毛目のちへらミガキ、内面はナデ、246は外面縦刷毛目、内面へらミガキを行う。後期のものには複合口縁をもつもの(247・256)がある。247は器壁が薄く、口縁部はやや外弯しながら直立して立ち上がる。256は大形品で、口縁部は直立ぎみにやや内傾して立ち上がる。口縁部の施文は、247が山形文の内部および反転部外面にランダムな刺突文、256は5本単位の波状文である。248は胴部の屈曲部を肥厚させ、外面にへらによる粗い「ノ」の字の刺突文を刻む。249～254は底部。

258～301は甕。前期のものには、やや強く如意形に開く口縁部をもち、口唇部下端にへらによる刻目、頸部下位には沈線が巡るもの(258)、口縁部が逆「L」字形に屈曲し、上端部に水平な面をもつもの(259)などがある。中期のものには、口縁部が「く」の字に外反するもの(260～262)、跳ね上げ口縁をもつもの(263～266)などがある。前者は胴部が張らず、断面三角形の突帯は口縁直下に貼付される。須玖I式併行。後者は口縁部が強屈曲し、胴部の張りはほとんどない。口縁端部外面が横ナデによって窪むのも特徴的である。また、下城式の甕(268)もあり、直立する口縁部外面に断面三角形の突帯を2条貼付する。後期のものには、山陰系の甕(273～276)が含まれている。口縁部は「く」の字に外反し、上下両方に拡張した口縁端部に擬凹線が巡るもの(274～276)と無文中くほみになるもの(273)とがある。276は短く開く口縁部をもち、頸部外面にはへらによる刺突文を施文する。277～283は「く」の字に外反する口縁部をもつ。277・279は開きの弱い長い口縁部をもち、277は胴部内面をへら削りする。278は鉢に近い。281は頸部内面に明瞭な稜をもち、口縁部が肥厚して短く開く。282・283は小形品。丸底の底部をもち、口縁部は内弯ぎみ(282)、直線的(283)に短く外反する。内面はナデ仕上げ。283は外底面に初めの圧痕が認められる。284～301は底部。窪み底のものが多く、他に平底、上げ底、丸底のものがある。

302～306は高坏。坏部が内弯して立ち上がり口縁端部が内側に突出するもの(302)、上半部で反転して、口縁部が外弯しながらゆるやかに開くもの(304・305)と直立ぎみに立ち上がり端部が外方に突出するもの(303・306)とがある。

307は支脚。308は壺の蓋で、大きく広がり、丸い天井部は薄い。

#### 土師器 (309～329)

309は直口壺。310～315は甕。310～313は布留式の甕で、口縁部下半がやや膨らみ、端部が尖るもの(310)、口縁端部がやや中窪みの面をもつもの(311)、口縁部が外弯して開

第5層出土遺物

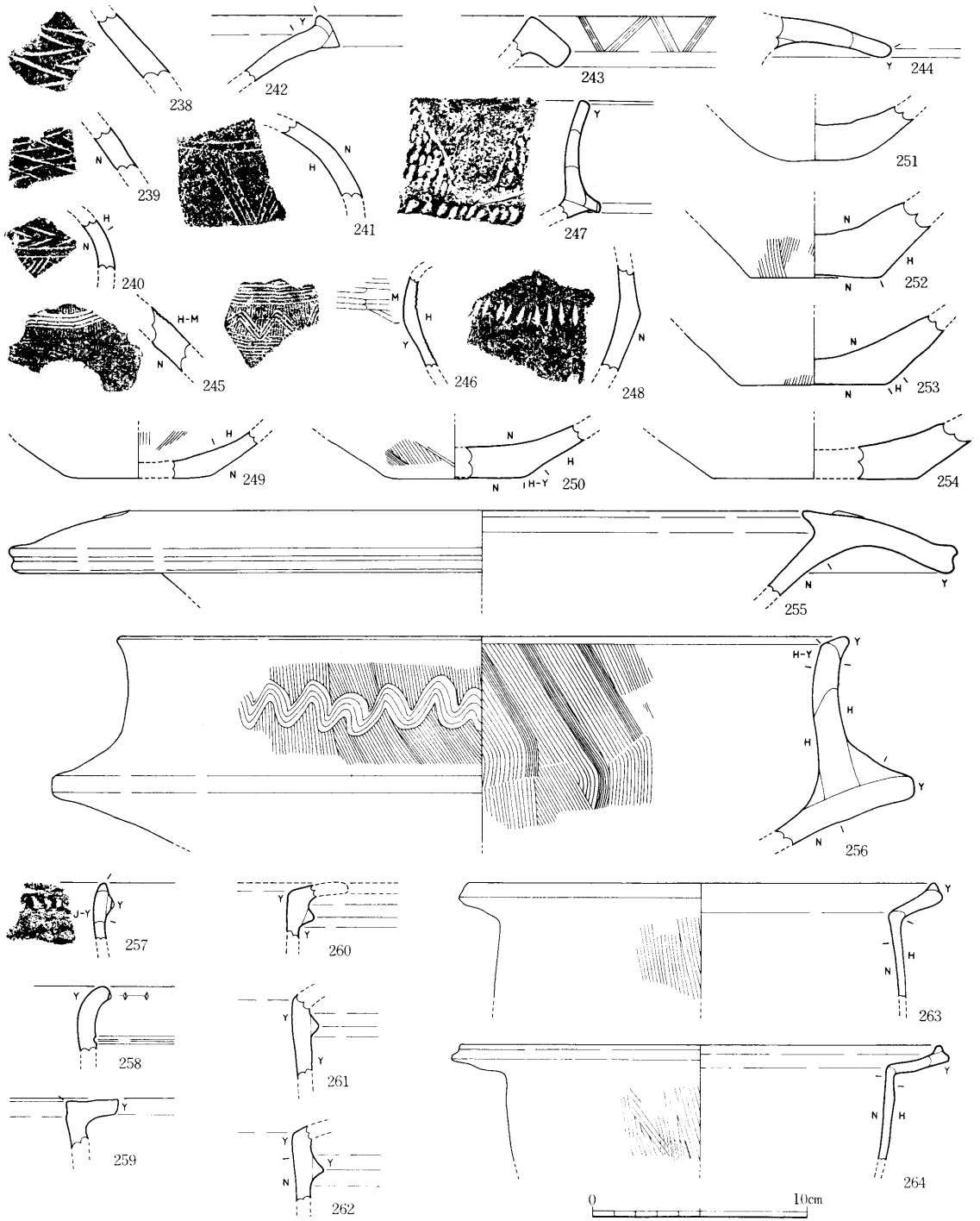


Fig. 76 第5層出土遺物実測図(1)

き、端部内面が内巻きになるもの(312)などがある。また、張りの強い胴部から内弯して立ち上がる口縁部をもち、わずかに外反する端部内面が斜めに面取りされるもの(313)もある。胴部は外面刷毛目(310・313)で、内面はヘラ削り(310)のものと刷毛目のものナデられるもの(313)がある。314は外弯して長くのびる口縁部をもち、端部は丸い。成形が粗雑で、粘土帯の接合痕が顕著に残る。315はしまりのない頸部に直線的にゆるやかに外傾する口縁部をもつ。胴部外面は斜方向のヘラナデを施す。

316～321は高坏。坏部は反転部外面に明瞭な稜をもつ(316)。脚裾部が大きく外方に屈曲するもの(319・320)とゆるやかに開き内面ほぼ全体が接地するもの(321)がある。

322～328は鉢。体部が内弯して立ち上がり、口縁部が直立するもの(323～325)とそのまゆるやかに内傾するもの(322・326～328)とがある。323・324は器高が高い。322・327はヘラミガキされる。

329は台付鉢で、体部は内弯して立ち上がり、脚台部は直線的に開く。

#### 須恵器(330～339)

330～335は坏蓋。331は平坦な天井部に直下にする口縁部をもち、端部内面は段を有する凹面をなし内傾する。端部は外反し、鋭い稜以下の口縁部が器高の約1/2を占める。天井部の約4/5強をヘラ削りし、内面は丁寧になデられる。332・333は丸い天井部からそのままゆるやかに開く口縁部をもち、稜は短く鈍い。端部内面にはわずかに段をもち、凹面をなし内傾するもの(332)と形骸的に1条の沈線が巡り、端部が丸いもの(333)とがある。天井部の約2/3弱をヘラ削りし、内面は粗雑になデられる。330も333と同様な器形であろう。334は中窪みの扁平な撮み部。335は極めて器高が低く扁平で、鳥嘴状の口縁部をもつ。

336～338は坏身。336は立ち上がりが外弯しながら内傾し、端部は丸い。外底面の約1/2をヘラ削りする。337は立ち上がりが直線的に内傾するもので、端部は丸く、内面には不明瞭な段をもつ。338は高台をもつもので、直立する断面方形の低い高台は底部と体部の境よりやや内側に貼付される。

339は短頸壺。肩部の張りが強く、口縁部は短く直立して立ち上がる。口縁端部は丸い。底体部の約1/2をヘラ削りする。

#### 手捏土器(340～365)

土師質の鉢のほか、甕形のもの(356)、高坏(365)がある。鉢には大小二種類のものがある。前者は、平底のものが多く、胴部は340のようにゆるやかに内弯して立ち上がるものや、341・342のように直線的に立ち上がるものなどがある。口縁部は胴部からそのまま

第5層出土遺物

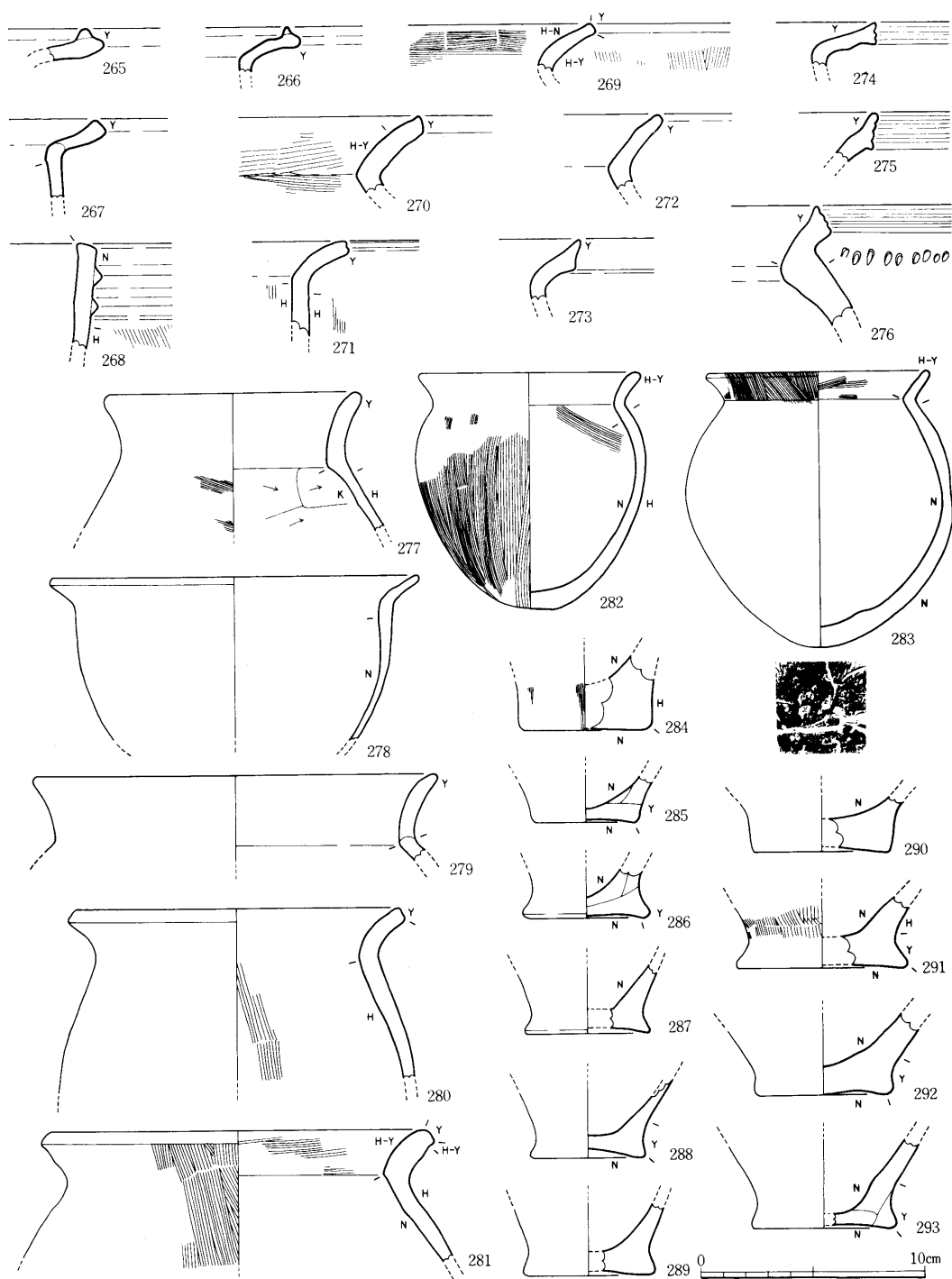


Fig. 77 第5層出土遺物実測図(2)



移行するもの(340~342)や外反するもの(343)がある。363・364のように丸底の碗形を呈するものもある。後者は平底で体部が直立するもの(349~355・361)や尖り底で体部が外方に開くもの(357・358)がある。大半が指圧による整形で、刷毛目を施すもの(340・344・362)もある。概して小形品に胎土が精選されているものが多い。356は平底で、体部は内弯しながら直立する。

#### 土製品(366~373)

366・367は土製模造鏡。中央部をつまみ出して鈕とするが、穿孔はされていない。368~373は土製丸玉。径16~22mmで、上面から焼成前の穿孔が貫通する。

#### 滑石製模造品(374~384)

374は盾形。四隅を斜めに面取りし、両側縁を繰りこんだ長方形を呈し、正面が凸レンズ状に弯曲する。裏面中央部からやや下位には、長軸に平行に断面長方形の鈕を削り出す。鈕には両側面から穿孔がされるが、貫通していない。正面上下端の研磨は整形時の第一次研磨のままであるが、中央部は長軸に平行した第二次研磨がなされる。裏面は不定方向からの第二次研磨が行われる。上端部には穿孔がなされる。

375~377は斧形。扁平な撥形で、寸づまりのもの(375)と長めのもの(376・377)とがある。いずれも周縁は面取りされて面をもち、上端部には穿孔がなされる。正裏両面とも不定方向からの第一次研磨のままのもの(375・376)と弯曲した裏面に長軸に直交する第二次研磨されるもの(377)がある。375・376は一部に素材面を残す。378は他の3例と形態は異なるが、斧形であろう。短冊形で、穿孔した上端および下端に向かうにつれて先細りとなる。正裏両面とも第一次研磨のままである。

379~383は単孔の円板。厚手で第一次研磨のままの粗雑なつくりのもの(379)と扁平で第二次研磨されるもの(380~383)とがある。前者は周縁の面取りが不十分で不整形な円形をなす。穿孔は粗い両面穿孔で、周縁寄りに偏位する。後者は大小二種があり、部分的に素材面や第一次研磨面を残す。第二次研磨は正裏両面が不定方向から、周縁は縁辺に直交して施される。穿孔は中央部に両面穿孔される。

384は鏃形。細長い扁平な菱形で、最大幅が中位付近にある。正面の第二次研磨は左右各半部で研ぎ分けを行う。

#### 石器・石製品(385~392)

385・386は石庖丁。385は外弯刃半月形の小形の磨製石庖丁で、刃部は正裏両面から均等に研削される。外弯する背部は中央部に面をもち、両面から研ぎ分けている。背部近くに

第5層出土遺物

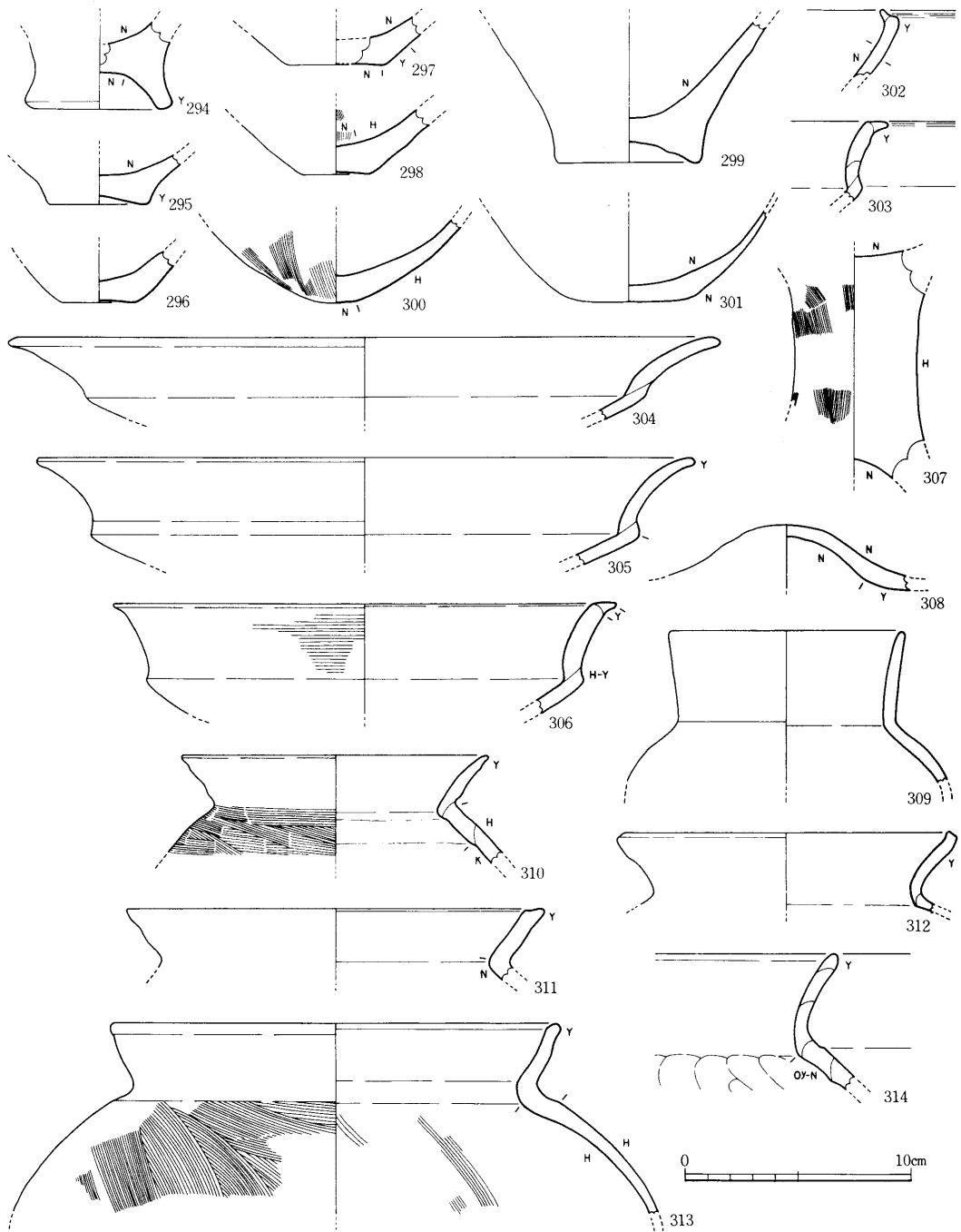


Fig. 78 第5層出土遺物実測図(3)

吉田構内本部2号館新営に伴う発掘調査

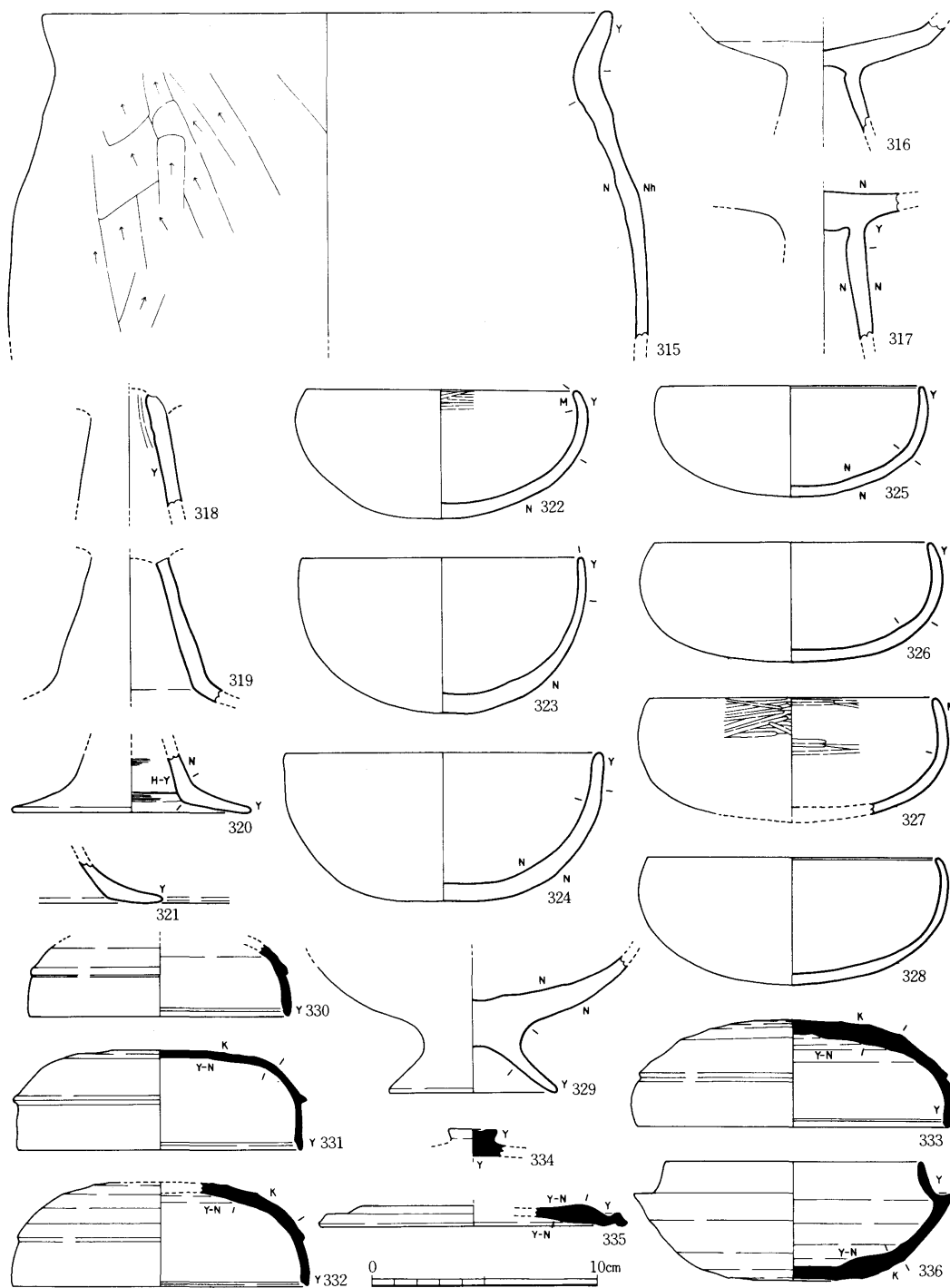


Fig. 79 第5層出土遺物実測図(4)

第5層出土遺物

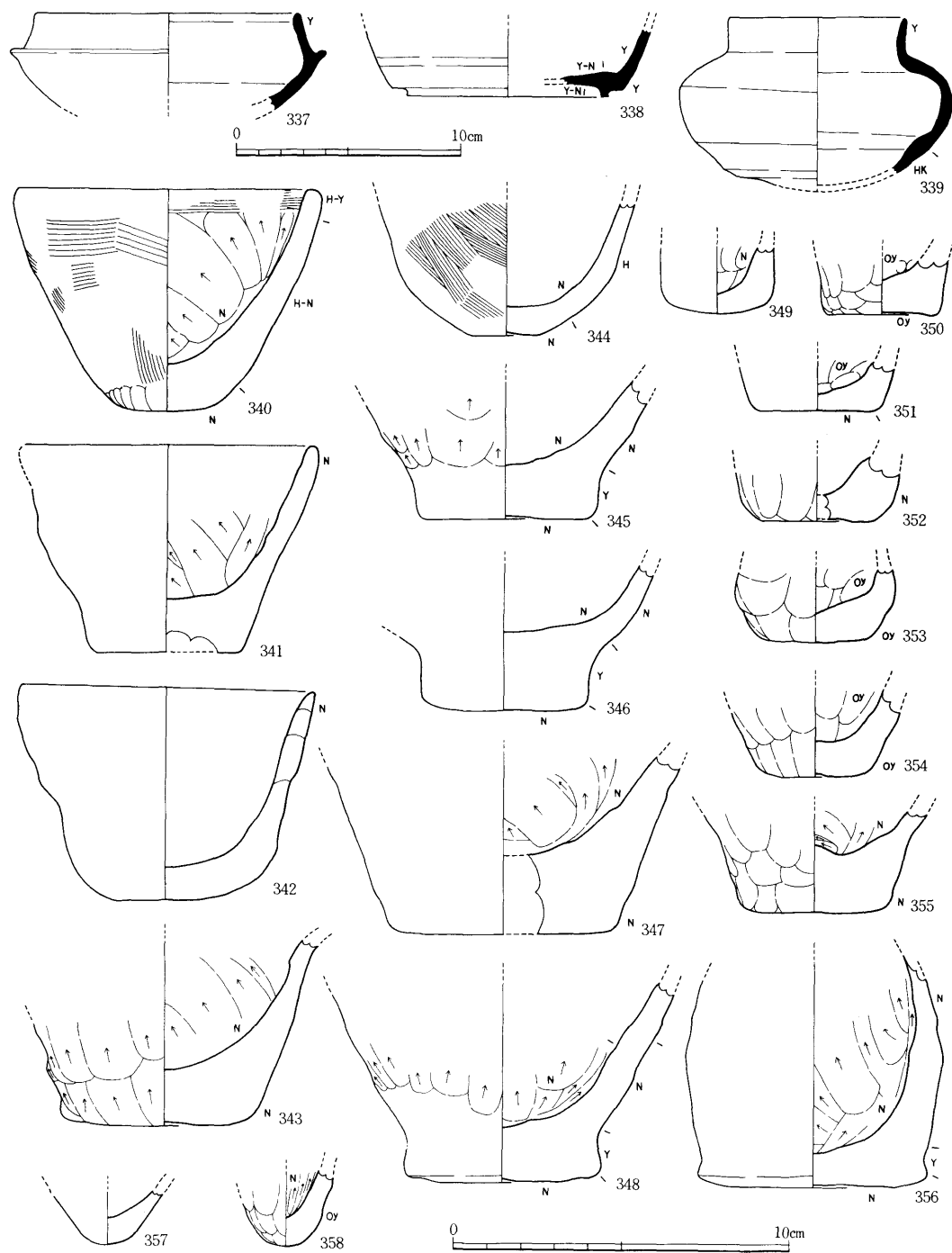


Fig. 80 第5層出土遺物実測図(5)

吉田構内本部2号館新営に伴う発掘調査

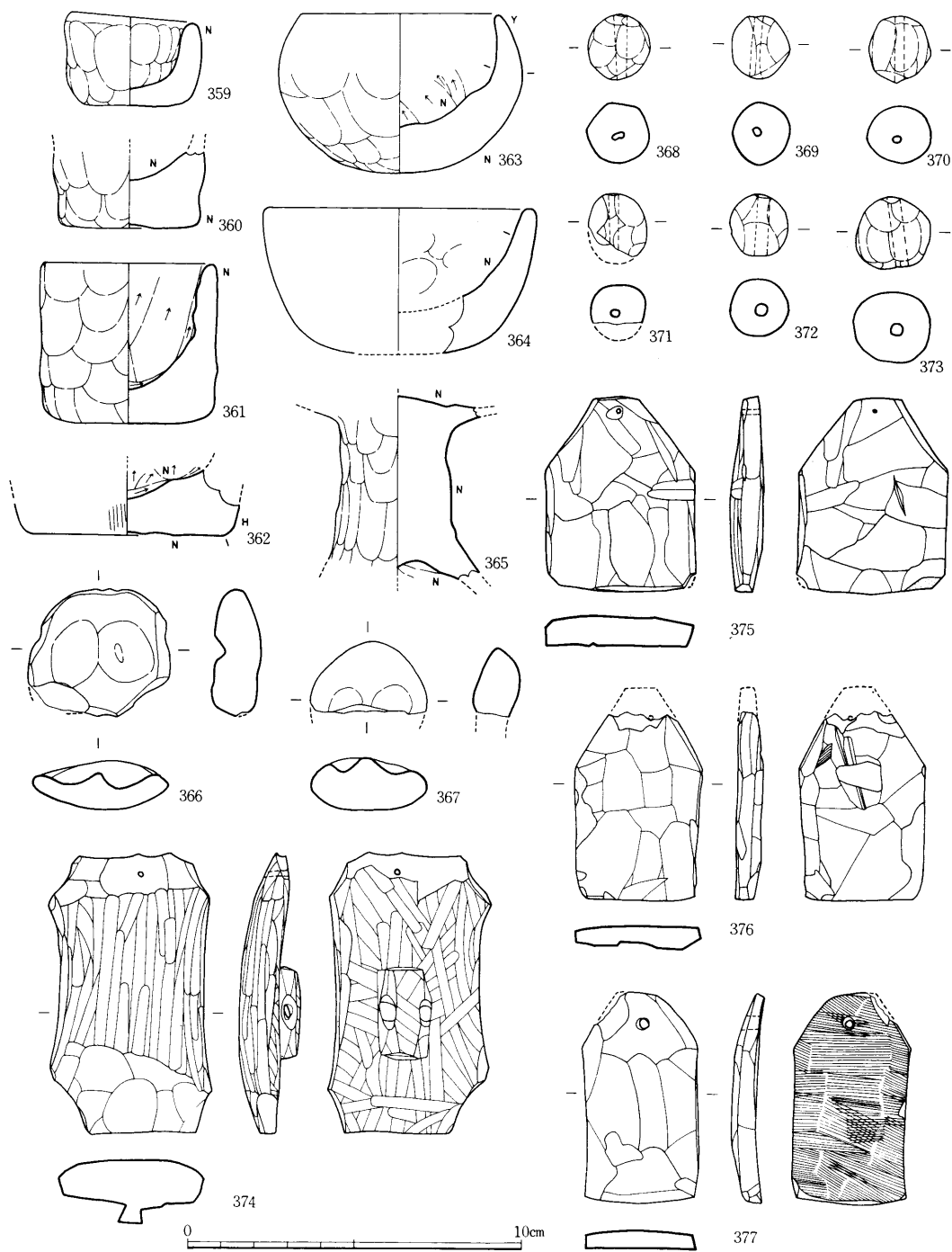


Fig. 81 第5層出土遺物実測図(6)

第5層出土遺物

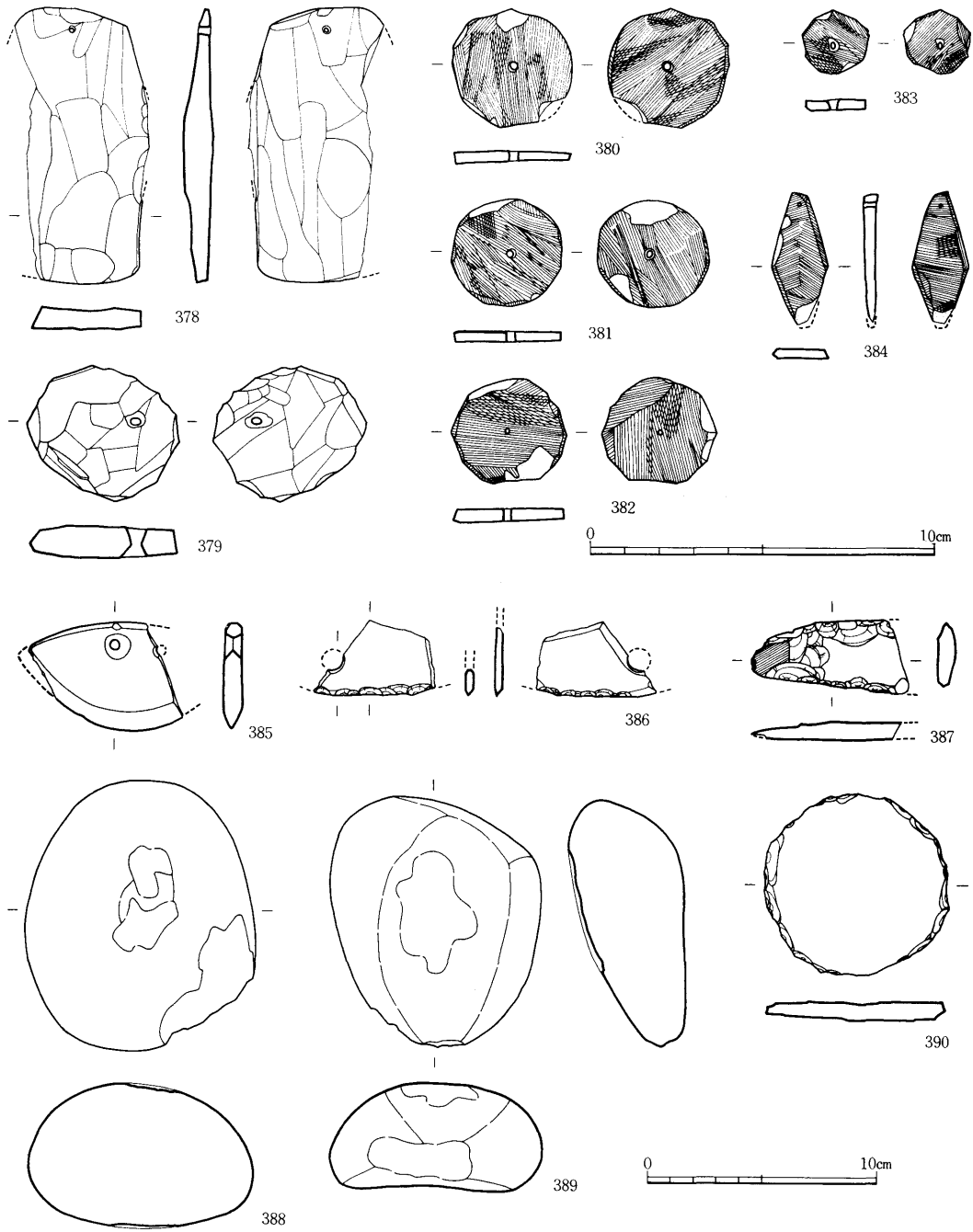


Fig. 82 第5層出土遺物実測図(7)

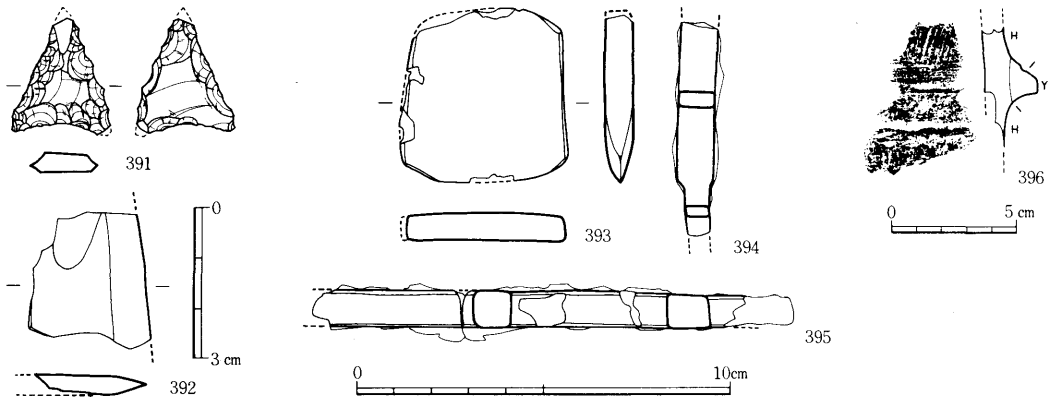


Fig. 83 第5層出土遺物実測図(8)

は2鈕孔が回転穿孔される。386は扁平な打製石庖丁で、やや外弯する刃部は大半が正裏両面からの剥離によって作出されるが、一部には研磨が施される。主要面には素材面を残す。鈕孔は大きく刃部近くに回転穿孔される。387は石鎌。外弯する上縁および直線的な下縁に階段状剥離がなされるが、先端部は剥離作業ののち研磨される。下縁の剥離は上縁にくらべて小さく、急角度に行なわれる。388・389は円礫素材の敲石。敲打痕が正裏両面中央部に残るもの(388)や正面中央部、下端に広く浅く残るもの(389)とがある。390は大形の周縁加工の円板。二次加工は不規則で片面、正裏両面からなされている。391は平基無茎式の打製石鎌で、先端部、脚部の片端を欠損する。正面中央部、裏面下半に素材面を残し、裏面側の二次加工は粗い。392は石剣もしくは石戈。周縁に精細な研磨を施し、側刃縁を作出する。

#### 鉄器 (393~395)

393は板状鉄斧。鍛造品と思われ、長幅比が約1:1の寸づまりな矩形を呈する。刃部は頭部にくらべてわずかに広い弧状の両刃で、左右両端部は明瞭な刃部を作出しておらず、狭い面をもつ。正裏両面の研ぎ出しは角度、範囲とも均一でなく、刃部の傾斜角は正面が約30°、裏面が約20°である。394は茎と身部の境に閔を有する鉄鎌で、断面は長方形を呈する。395は鑿もしくは鑿であろう。棒状で断面は正方形を呈する。

#### 円筒埴輪 (396)

土師質で、タガはやや高く断面台形をなす。外面は縦刷毛で、タガ貼付後、上位は粗い縦刷毛による二次調整が行われる。内面は風化による摩滅が激しいが、ナデと思われる。<sup>7)</sup>川西編年のV期にあたる。

2) 第6層出土遺物 (Fig. 84・85, PL. 43・52・53・54)

**縄文土器** (397～399)

粗製の甕。胴部から口縁部まで屈曲せずに立ち上がり、端部が尖るもの (397) と突帯をもたない肩部で屈曲し、口縁部が内傾するもの (398) とがある。399は底部。

**弥生土器** (400～429)

400～412は壺。前期のものには、肩部に削り出しによる段をもち、その下位に刷毛原体による施文をもつもの (400)、ヘラ描き沈線が巡るもの (401) のほか、断面台形の低い貼付突帯をもつもの (402) などがある。施文は格子文と無軸羽状文を上下に組み合わせるもの (400)、貝殻腹縁による有軸羽状文 (404)、ヘラ描きの無軸羽状文 (405) などがある。中期のものには、肩部に櫛描きの直線文・波状文 (406)、口縁部端内面に断面三角形の注口状の突帯をもち、小さく下垂する口縁部外面に波状文を施文するもの (407) が特徴的に存在する。408は鋤先状口縁をもつ須玖Ⅱ式の壺で、口縁部内面の内側への突出度は強い。409は下垂する口縁部外面にヘラによる鋸歯文を施文する。後期のものには、口縁部が外弯しながら短く直立する複合口縁をもつもの (410) がある。外面には粗い刷毛目が施される。411・412は底部。

413～426は甕。413は如意形に開く口縁部下端に、414は逆「L」字形に短く屈曲する口縁部のほぼ全面に、ヘラによる刻目を施す。416は無文。「く」の字に外反する口縁部をもつものには直線的に開くもの (417) や跳ね上げ口縁をもつもの (415・420～422) などがある。420は頸部下位の断面「M」字形の貼付突帯の頂部、口唇部上下両端にヘラによる刻目を施す。424は外弯しながら開く口縁部をもち、胴部内面は423同様ヘラ削りする。425・426は底部。

427は高坏。脚裾部はゆるやかに開き、内面上半の横刷毛は右上がりに角度を変えて行う。

428は小形の鉢。胴部はゆるやかに内弯して開き、口縁部は直立ぎみに立ち上がる。底部側面には指圧整形痕が残る。

429は受部が「U」字形に開く支脚。受部は一部二次加熱によって赤色に熟変する。

**土師器** (430)

用途、器形不明の土製品で、端部は砲弾形に尖る。把手かもしれない。

**石器・石製品** (431・432)

431は磨製石斧。扁平な撥形を呈し、頭部、正面左側縁には研磨前の荒割りの段階での剥離痕が残る。432は扁平な円転礫素材の砥石で、正裏両面を砥面とする。



吉田構内本部2号館新営に伴う発掘調査

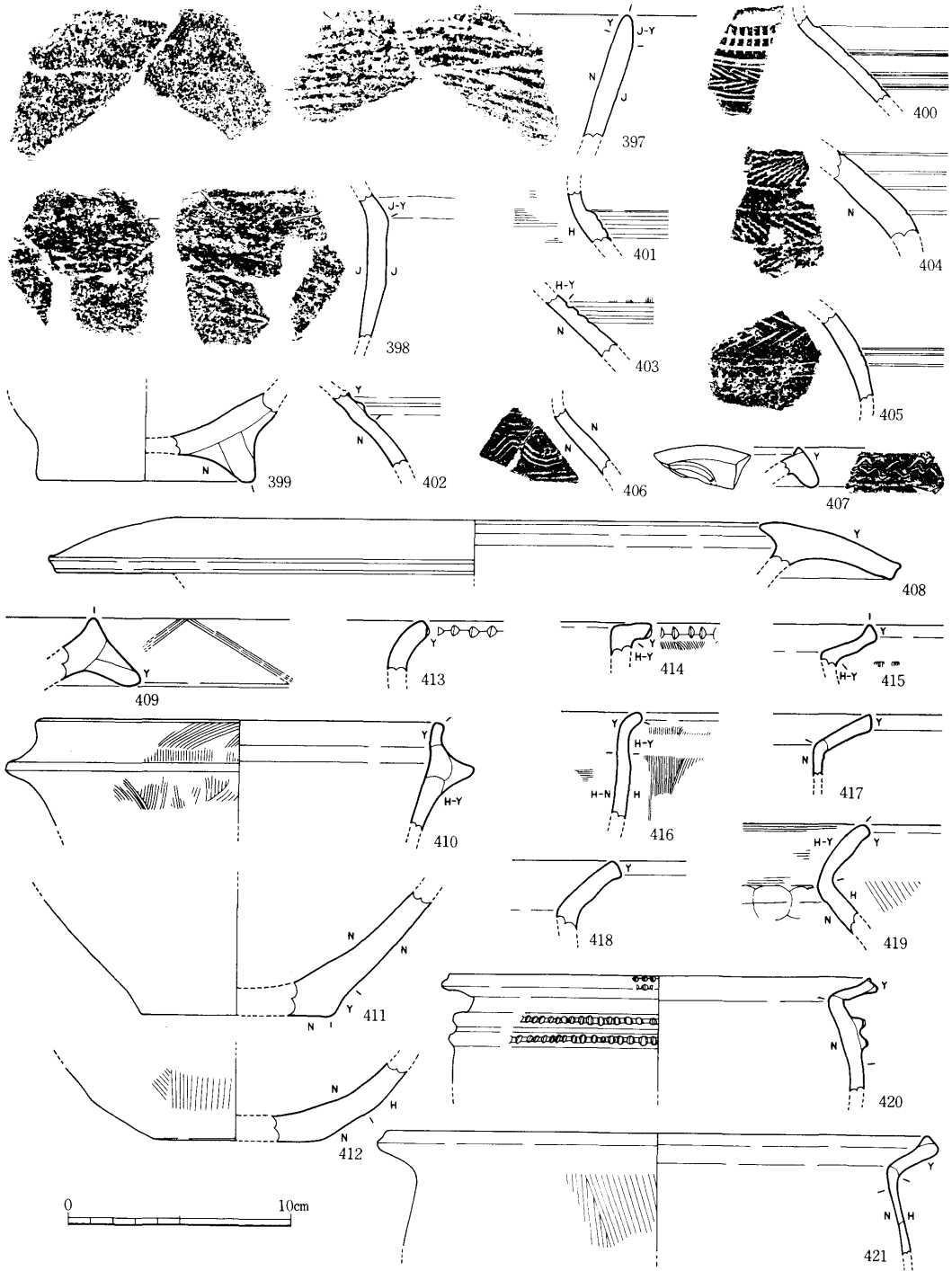


Fig. 84 第6層出土遺物実測図(1)

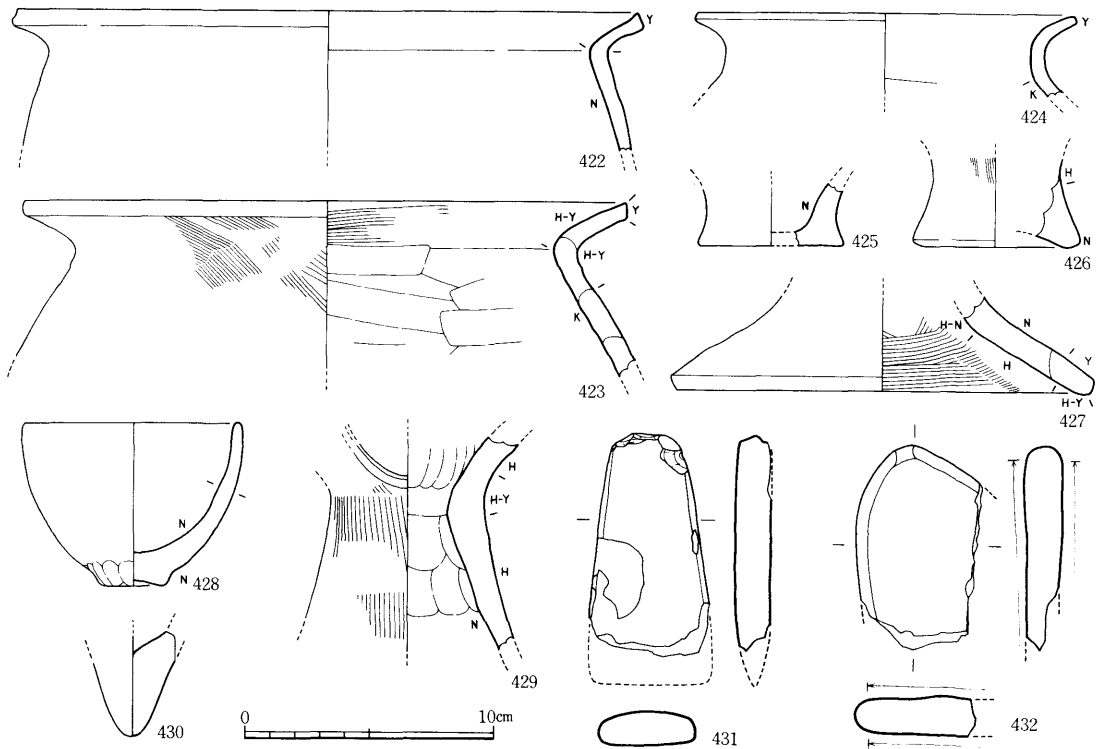


Fig. 85 第6層出土遺物実測図(2)

3) 第7層出土遺物 (Fig. 86~88, PL. 44~46・53~55)

**縄文土器 (433)**

精製の波状口縁をもつ晩期中頃の浅鉢。頸部が短い無文の浅鉢で、尖りぎみの口縁部は長くのびる。内面の段は消滅している。内外面ともよく研磨されている。

**弥生土器 (434~501)**

434~467は壺。前期のものには、短く外反する口縁部と頸部の境に段をもつもの (434) や肩部に削り出しによる段をもつもの (435~437) などがある。施文は羽状文が最も多く、他に木葉文 (436) や重弧文 (443・449) などがあり、ヘラ (435~440・448) や貝殻腹縁 (441~447・449) を用いてなされる。また、胴部には1~2条の断面三角形の貼付突帯の頂部にヘラ (445)、指 (446)、刷毛原体 (447) による刻目を施すものや扁平な断面長方形の貼付突帯にヘラ描きの沈線が巡るもの (450) などがある。内外面は大半がヘラミガキされる。中期のものには、鋤先状口縁をもつ須玖Ⅱ式のもの (451・452)、口縁端部が上下に肥厚 (454) または口縁部が下垂 (453) し、外面にヘラによる鋸歯文を施文するもの

吉田構内本部2号館新営に伴う発掘調査

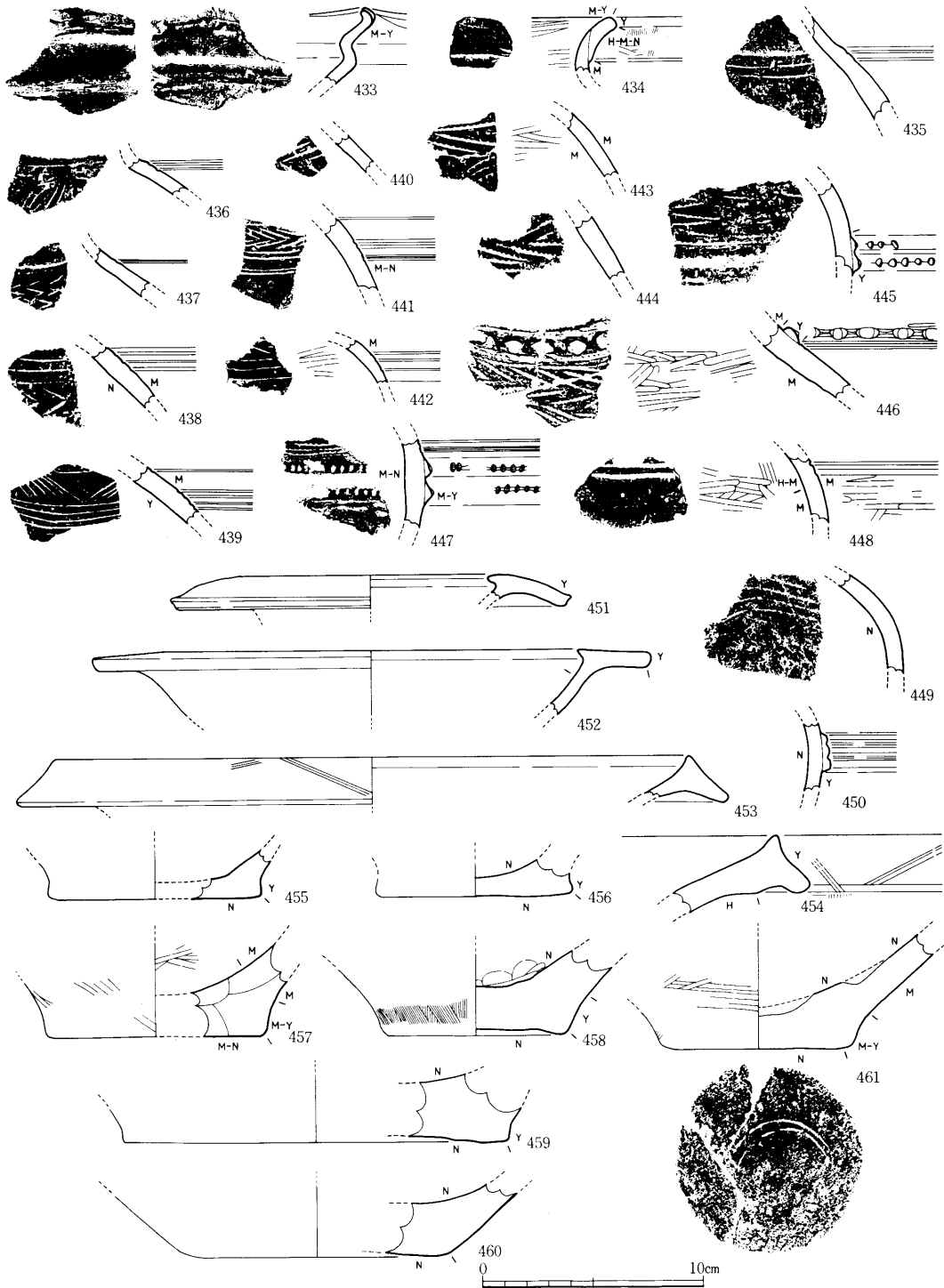


Fig. 86 第7層出土遺物実測図(1)

第7層出土遺物

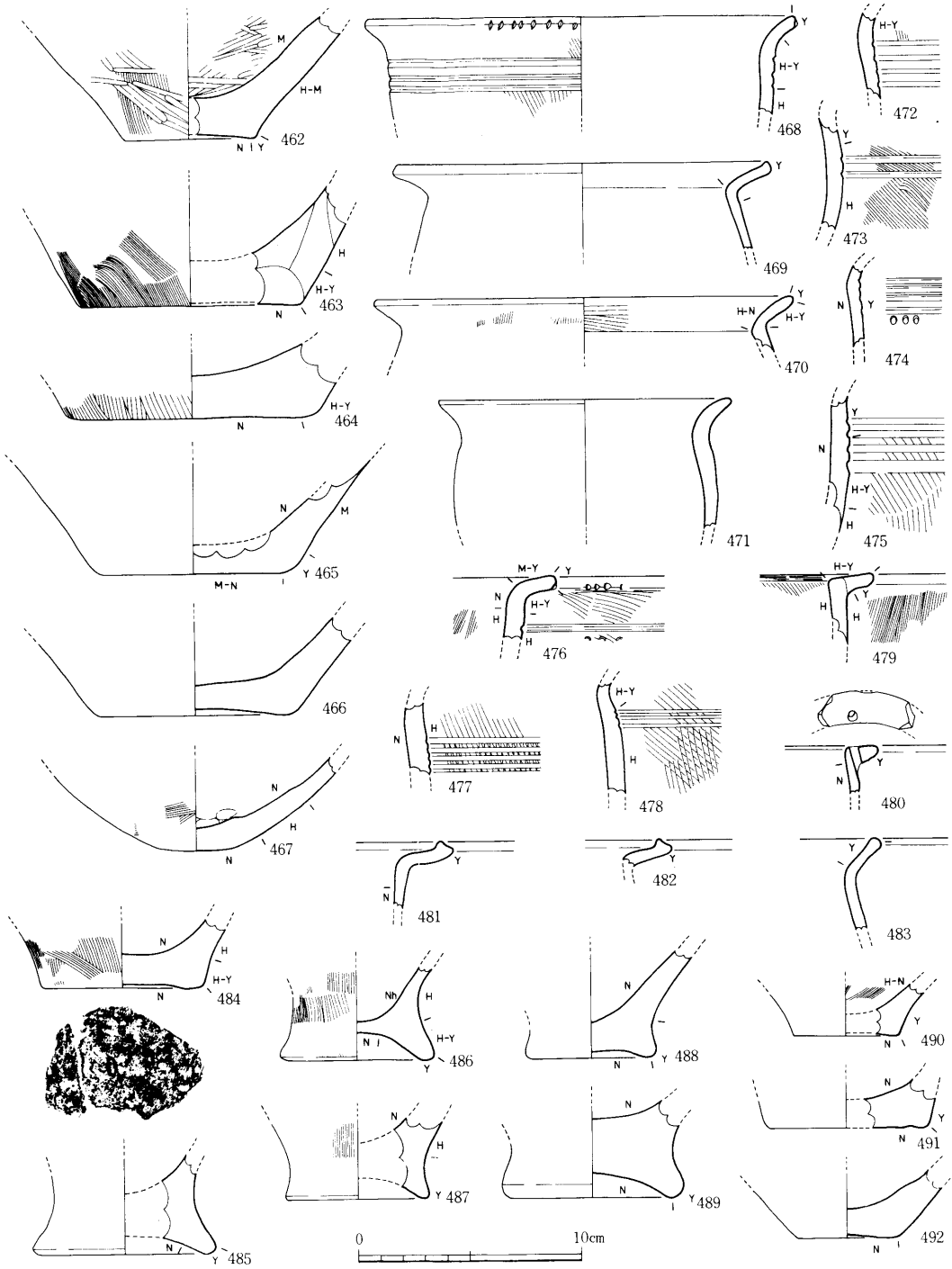


Fig. 87 第7層出土遺物実測図(2)

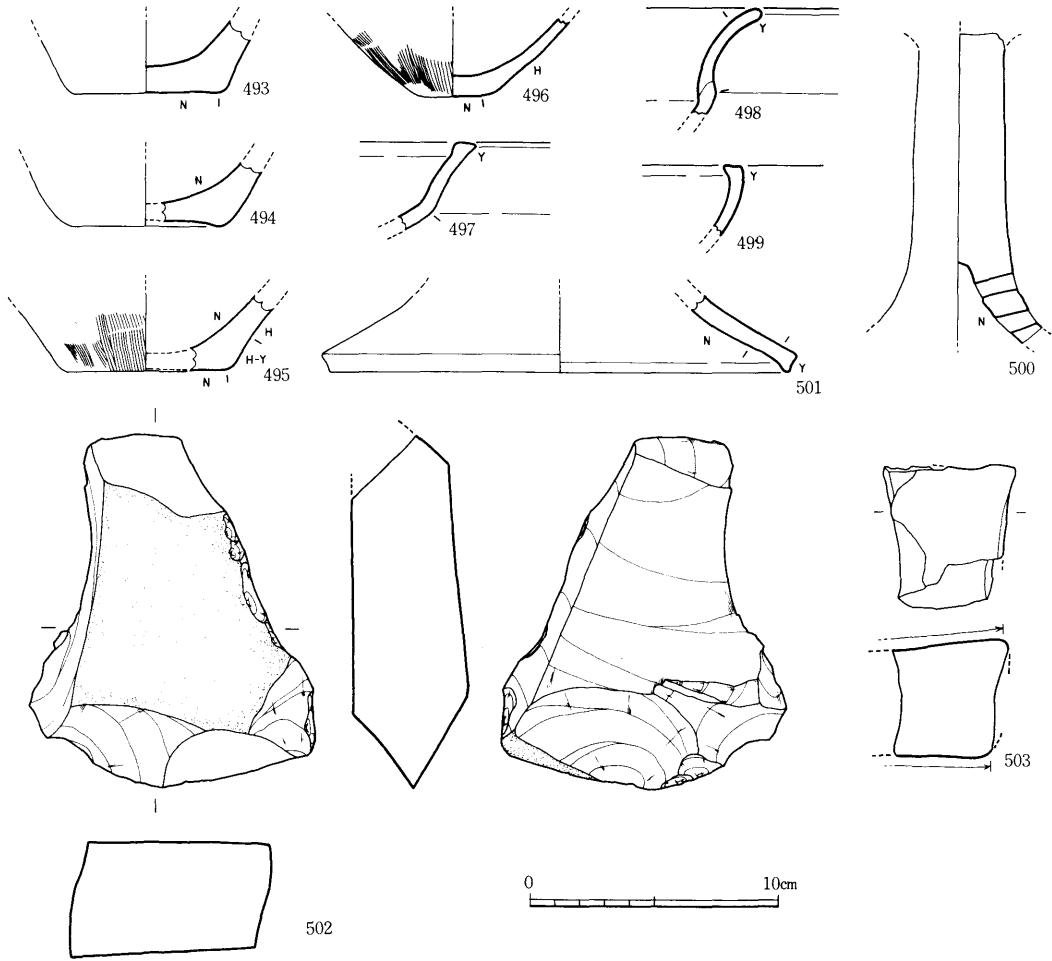


Fig. 88 第7層出土遺物実測図(3)

などがある。452は高坏かもしれない。底部は前期から後期のもので、前期のものが多い。461は外底面中央部にヘラによる重弧文が認められる。

468～496は甕。前期のものには、胴部の張りが少なく、口縁部が如意形に開き、口唇部下端にヘラによる刻目をもつもの(468・476)や逆「L」字形に開くもの(479・480)などがある。口縁下には2～4条の沈線が巡り、刺突文を刻むもの(474・476)もある。480は口縁部に蓋受けの穿孔が存在する。中期のものには、跳ね上げ口縁をもつもの(469・481・482)が多い。484～496は底部。484は外底面に刳圧痕が残る。

497～501は高坏。坏部は上半部で反転して、口縁部が外弯しながらゆるやかに開くもの

(498)と直線的に外傾し、端部が肥厚するもの(497)および内湾しながら立ち上がり、口縁端部が内側に突出するもの(499)などがある。脚部は長脚(500)で、裾部が外湾ぎみにひろがり、端部内面が下方につまみ出されるもの(501)などがある。

石器(502・503)

502は大形の打製石斧と考えられる。撥形を呈し、素材となる厚手の板石に正裏両面から均等に粗雑な剥離を加え、弯曲する幅広の刃部を作出する。正面左側縁は弯曲し、正面中央部には原礫面を残す。503は砥石で、少なくとも正裏両面を研砥面とする。

4) 第2・3層出土遺物 (Fig. 89, PL. 46・52)

504・505は歴史時代の土師器。504は糸切り底の坏で、体部から口縁部までゆるやかに内湾して立ち上がる。505は薄手の糸切り底の皿で、体部は直線的に立ち上がり、口縁端部は尖る。底部端に明瞭な稜をもつ。506は土師質土器の鍋の脚部で、端部は外方に反る。507は貿易陶磁器の白磁碗で、口縁端部はカマボコ状の玉縁となる。

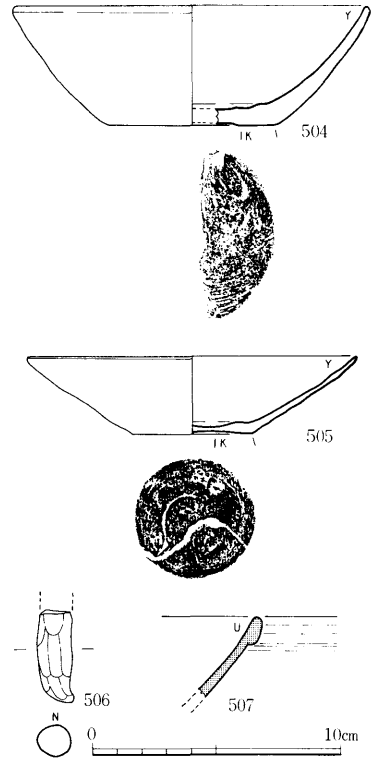


Fig. 89 第2・3層出土遺物実測図

5 小結

調査の結果、検出した遺構には弥生時代の土壙、環濠内に井戸、土葬墓を併設する室町時代の屋敷跡などのほか弥生～室町時代の柱穴多数がある。

弥生時代の土壙は調査区南西部で4基検出したが、時期がおさえられるのは後期後半～終末、中期後半～後期初頭の各1基である。この2基の土壙は規模、形態、遺物の出土状況などから投棄壙と考えられ、北東から南西に落ち込む地山の緩斜面に等高線に沿って並列する。調査区内ではこの時期の住居跡は検出されなかったが、調査区南側の大学会館前庭部では後期終末<sup>8)</sup>、北側の飼料園では中期<sup>9)</sup>の堅穴住居跡が検出されている。調査区北東の大学会館敷地では北西に開く谷が存在して<sup>10)</sup>おり、住居は当該地域東側の樹枝状に延びる低丘陵に存在するものと考えられる。

室町時代の屋敷跡は16世紀末～17世紀初頭のもので、「コ」の字状に巡る溝の内側に営まれている。環濠内のコーナーには石組井戸、幼児用と考えられる土葬墓各1基が併設さ

れており、防府市下右田遺跡<sup>11)</sup>、同玉祖遺跡<sup>12)</sup>など県内における環濠をもつ中世の富裕農民層の屋敷構え<sup>10)</sup>に共通する構造である。なお、環濠内部は一部調査区外にあたるため完掘しておらず、掘立柱建物跡の配置状況は将来の調査を待つことにしたい。

出土遺物のうち注目しておきたいものがいくつかある。

まず、第1号土壙出土の弥生時代後期の土器群がある。土壙の検出状況から上面の削平は考えられず、また、明らかに異なる時期の混入品もないことから、一括性の高い資料として取り扱うことができる。壺・甕・鉢・高坏・支脚・器台などの器種がある。

複合口縁の壺は頸部が短くゆるやかに外反し、内傾する口縁部の端部が外方に屈曲するもの(57)や口縁部が中位で直立するもの(58)などがある。肩部には貼付突帯が巡り、頂部にヘラや刷毛原体による刻目や斜格子を施文する。口縁部の屈曲部はやや強く外方に突出する。

甕は「く」の字に外反する短めの口縁部をもち、端部に面をもつものと尖るものなどがある。内面はヘラ削りするものが多く、刷毛目、ナデ仕上げも見られる。

高坏は坏部が深く、上半部で反転して弯曲して開き、口縁端部に面をもつもの(95)や、坏部が浅く、直立する口縁部の端部が水平に折れ曲がり、上面に水平な面をもつもの(96)などがある。脚部は長脚で、ゆるやかに開き、裾部が内湾ぎみに広がる。

以上の土器群の編年的位置づけを検討してみる。複合口縁壺は徳山市円光寺遺跡<sup>14)</sup>の複合口縁壺のように頸部に沈線をもつ中期的な要素をもつものはない。また、終末の標識である熊毛郡平生町吹越遺跡土器群<sup>15)</sup>に若干先行する玖珂郡玖珂町清水遺跡土器群<sup>16)</sup>のように、口縁端部が外方に屈曲するものがあること、高坏の口縁端部が水平に折れ曲がり、上面に水平な面をもつものが北部九州では第3様式<sup>17)</sup>に出現しているが、坏部が深く上半部で反転して弯曲して開き、口縁端部に面をもつものが量的には卓越していること、また、甕は「く」の字に外反する短めの口縁部をもち、端部に面をもつものと尖るものなどがあり、内面はヘラ削りするものが多い。しかし、頸部が大きくやや強く外反し、口縁部が長いものは含まれていないことから清水遺跡土器群と同時期かやや先行するものと考えられ、後期中頃～後半に位置づけられよう。

第5層から出土した滑石製模造品も特筆される。滑石製模造品は出土状況から6世紀後半のもので、盾・斧・鏃形のほか単孔の円板があり、整形段階の第一次研磨のままのものと第二次研磨まで行なわれるものが混在する。構内遺跡では大学会館前庭部で、鑿痕を残す滑石の原石が剥片を伴って出土している<sup>18)</sup>ことから、すべての滑石製模造品が製品と

## 小 結

して搬入されたものでなく、当地で加工作業が行なわれたことを示唆している。構内遺跡の南西約2.8kmに所在する山口市西遺跡では、盾はないが円板・斧形・鏃形・鏝形などほぼ同一の組成をもつ滑石製模造品が未製品とともに堅穴住居跡から一括して54点出土している<sup>19)</sup>。同遺跡では原石は出土しておらず、同遺跡では未製品として集落内に持ち運ばれたもので、構内遺跡と模造品の製作過程に相違がみられる。

また、第5層の弥生土器には櫛描文をもつ壺や「く」の字に外反する口縁部をもち、上下に拡張した口唇部外面に擬凹線が巡る山陰系甕、下城式の甕など、外来系の土器群も存在する。

さらに、タガがやや高く断面台形をなす土師質の円筒埴輪が出土している。川西編年のV期にあたり、タガの形状、調整から6世紀前半に位置づけられる。構内遺跡では、過去に本調査区の南西約400mに位置する、家畜病院から女子寮にかけての丘陵から同時期の土師質の円筒埴輪17点が採集されている<sup>21)</sup>。出土地点に距離的な大きな隔りがあること、両地点間には谷が存在すること、および、埴輪の残存状況などから相互の流入は考えられない。また、両地点とも結晶片岩の板石もあわせて出土、採集されており、本調査区周辺の丘陵にも古墳の存在が想定される。今後の調査に期待したい。

歴史時代の土器にも特筆すべき資料がある。まず、第5号土壙から出土した非ロクロ成形の土師器がある。口縁部の資料で器形は明かでないが、従来、山口市大内氏館跡や大内氏の別邸である築山跡<sup>23)</sup>で特徴的に出土する「B式土師器」<sup>24)</sup>と同一タイプのもので、白石構内の附属中学校敷地や山口市瑠璃光寺跡遺跡<sup>25)</sup>で出土例がある。瑠璃光寺跡遺跡は大内氏臣下の武士集団である仁保氏家臣の造墓地と推察されており、少なくとも16世紀代にはこの種の「特定のタイプの土器が選択」<sup>27)</sup>的に葬送儀礼用に供献されている。本学の所在する吉田の地も仁保氏と無縁ではない。当地は鎌倉時代には恒富保の一部に編入されており、鎌倉幕府から地頭職として山口市仁保庄に入部した平子重経<sup>29)</sup>から四男重継は恒富保地頭職を分割相続している。重継は以後、恒富氏と称し、13世紀には本家の恒富氏と分家の吉田氏両家に分かれ、本学キャンパスの所在する平川の恒富、吉田両郷を支配するようになり、地頭領主として成長してゆく。「両家とも戦国期に至るまで仁保の本家の軍事指揮下であり、分家後も仁保との交流があったと考えられ」<sup>30)</sup>ており、この種の土器が搬入された可能性は否定できない。吉田構内では環濠をもつ屋敷内の土葬墓から出土していることから、恒富、吉田両氏の荘園支配の過程で掌握された富裕農民層が「B式土師器」などの特定のタイプの土器を選択的に葬送儀礼用に供献したものと考えられる。



以上、今回の調査の成果を述べたが、包含層出土遺物の中に縄文時代晩期中頃～弥生時代前期の土器が含まれており、立地からも周辺に当該期の集落遺構が存在する可能性が高くなった。吉田構内では当該期の遺構は希薄で、今後の調査によって構内遺跡の歴史的変遷過程を明らかにしていく必要があるだろう。

[注]

- 1) 小野忠熙「山口大学吉田遺跡」（『考古学ジャーナル』第9号、ニューサイエンス社、1967年）。
- 2) 同 「山口大学構内吉田遺跡の性格」（『学園だより』第6号、山口大学、1970年）。
- 3) 山口大学吉田遺跡調査団『山口大学構内吉田遺跡発掘調査概報』（山口大学、1976年）。
- 4) 防府市下右田遺跡、同玉祖遺跡などでも屋敷を巡る環濠内のコーナーから土葬墓、火葬墓が検出されている。
  - a 山口県教育委員会『下右田遺跡第4次調査概報・総括』（1980年）。
  - b 山口県教育委員会『玉祖遺跡・西小路遺跡』（1983年）。
- 5) 山口市瑠璃光寺跡遺跡では15～16世紀の174基の集団墓のなかから、性別・年齢の判明している43基の墓について、墓壙の規模と被葬者の相関関係の分析を行っている。その結果、墓壙の上面の面積が0.5㎡以下の場合には大半が幼児墓と考えて大過ないと判断された。

なお、勝田至氏は屋敷墓の被葬者の性格について、屋敷墓成立の要因を「①開発者の霊と土地（とくに屋敷地）との結びつきという観念、②それを支えている屋敷・土地の所有と継承というイエ制度、③墓（死体）に死者の人格が残るとする観念」の複合体として把握している。

本例は後世の削平を考慮に入れても、埋葬形態、墓壙の平面形態および上面の面積が0.39㎡であることなどから幼児墓と考えるのが妥当であろう。防府市玉祖遺跡でも、環濠をもつ室町時代の屋敷内に幼児墓が検出されており、屋敷・土地の継承観念の反映と理解できよう。

  - a 小田村宏「墓の分析および墓群の構成と変遷」（『瑠璃光寺跡遺跡』、山口市教育委員会、1988年）。
  - b 勝田至「中世の屋敷墓」（『史林』第71巻3号、1988年）。
  - c 前掲注4）b。
- 6) 山口市教育委員会『大内氏館跡Ⅶ』（1987年）。
- 7) 川西宏幸「円筒埴輪総論」（『考古学雑誌』第64巻第2号、1978年）。
- 8) 山口大学埋蔵文化財資料館「吉田構内大学会館環境整備に伴う試掘調査」（『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅴ』、1986年）。
- 9) 前掲注1）～3）。
- 10) 山口大学埋蔵文化財資料館「吉田構内大学会館新営に伴う発掘調査」（『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅲ』、1985年）。
- 11) 前掲注4）a）。
- 12) 前掲注4）b）。
- 13) 山口県教育委員会『上辻遺跡・鑄銭司大歳遺跡・今宿西遺跡』（1984年）。
- 14) 山口県教育委員会『円光寺遺跡』（1987年）。
- 15) 平生町教育委員会・山口県教育委員会『吹越遺跡第2次調査概報』（1972年）。
- 16) 山口県教育委員会『清水遺跡』（1989年）。
- 17) 柳田康雄「高三瀨式と西新町式土器」（『弥生文化の研究』4、雄山閣、1987年）。
- 18) 前掲注8）。

注

- 19) 山口市教育委員会『西遺跡』（1986年）。
- 20) a 後藤宗俊『台ノ原遺跡』（大分県教育委員会、1975年）。  
b 坂本嘉弘『宮ノ原遺跡出土の土器』（『宮ノ原遺跡』、安心院町教育委員会、1984年）。
- 21) 吉田寛「吉田遺跡採集の円筒埴輪について」（『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅳ』、山口大学埋蔵文化財資料館、1985年）。
- 22) a 山口市教育委員会『大内氏館跡Ⅰ』（1981年）。  
b 同 『大内氏館跡Ⅱ』（1980年）。  
c 同 『大内氏館跡Ⅲ』（1981年）。  
d 同 『大内氏館跡Ⅳ』（1982年）。  
e 同 『大内氏館跡Ⅴ』（1983年）。  
f 同 『大内氏館跡Ⅵ』（1984年）。  
g 前掲注6）。
- 23) a 山口市教育委員会『大内氏築山跡Ⅰ』（1986年）。  
b 同 『大内氏築山跡Ⅱ』（1988年）。
- 24) 前掲注6）。
- 25) 山口大学埋蔵文化財資料館「亀山構内教育学部山口附属学校汚水排水管布設に伴う試掘調査」（『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅵ』、1987年）。
- 26) 前掲注5）a）。
- 27) 前掲注26）。
- 28) 内田伸・石川卓美「山口市」（『山口県の地名』、日本歴史地名体系、1980年）。
- 29) 『三浦家文書』に建久8年（1197年）、平子重経が恒富保の地頭職に任ぜられた記載がある。
- 30) 田中倫子「中世の仁保」（『瑠璃光寺跡遺跡』、山口市教育委員会、1988年）。

吉田構内本部2号館新営に伴う発掘調査

Tab. 5 出土遺物観察表

法量( )は復原値

番号	器種	法量 (cm) (①口径②底径③器高)	色調 (①外面 ②内面)	胎土	焼成	備考
Aトレンチ (Fig. 50・51)						
1	弥生土器 壺		にぶい黄橙色(10YR7/2)	精	良	良好
2	弥生土器 壺	①(18.0)	橙色(7.5YR7/6)	不	良	良好 鋤先状口縁
3	弥生土器 壺	①(16.8)	①灰褐色(5YR4/2) ②灰褐色(7.5YR6/2)	不	良	堅緻
4	弥生土器 壺	①(24.2)	①にぶい黄橙色(10YR6/3) ②橙色(7.5YR6/6)	良	好	不良
5	弥生土器 壺		浅黄橙色(10YR8/3)	良	好	良好
6	弥生土器 壺	②(7.9)	浅黄橙色(10YR8/4)	良	好	良好 外面丹塗り
7	弥生土器 壺	②(5.8)	浅黄橙色(10YR8/3)	良	好	良好
8	弥生土器 壺	②(8.8)	浅黄橙色(2.5YR8/3)	不	良	良好
9	弥生土器 甕	①(17.6)	①浅黄橙色(7.5YR8/3) ②灰白色(7.5Y8/1)	良	好	不良
10	弥生土器 甕	①(23.0)	①橙色(5YR6/6) ②黒色(N2/0)	精	良	堅緻 須玖式
11	弥生土器 甕	①(23.4)	灰白色(10YR8/2)	良	好	不良
12	弥生土器 甕	①(24.0)	浅黄橙色(7.5YR8/3)	精	良	堅緻
13	弥生土器 甕		にぶい黄橙色(10YR6/3)	不	良	やや不良
14	弥生土器 甕		①灰褐色(5YR5/2) ②にぶい橙色(7.5YR7/3)	良	好	良好
15	弥生土器 甕		灰白色(5Y8/2)	やや不良	良	良好
16	弥生土器 甕		①灰黄色(2.5Y7/2) ②淡黄色(2.5Y8/3)	不	良	良好 跳ね上げ口縁
17	弥生土器 甕	①(29.9)	①灰黄色(2.5Y7/2) ②浅黄橙色(10YR8/3)	良	好	堅緻
18	弥生土器 甕	② 7.2	灰白色(5Y7/1)	良	好	良好
19	弥生土器 甕	② 6.6	①橙色(2.5YR7/6) ②にぶい橙色(5YR7/4)	不	良	良好
20	弥生土器 甕	②(6.9)	橙色(2.5YR7/6)	良	好	堅緻
21	弥生土器 甕	② 6.4	①橙色(5YR7/6) ②褐灰色(10YR4/1)	不	良	やや不良
22	弥生土器 甕	② 4.0	①橙色(2.5YR6/6) ②灰白色(10YR8/2)	やや不良	良	良好
23	弥生土器 甕	② 5.0	①明赤褐色(2.5YR7/2) ②灰黄色(2.5Y7/2)	不	良	やや不良
24	弥生土器 甕	② 2.0	①にぶい褐色(7.5YR5/3) ②にぶい黄橙色(10YR7/2)	良	好	良好
25	弥生土器 高坏		浅黄橙色(10YR8/3)	良	好	良好
26	弥生土器 高坏		①淡黄色(2.5YR7/2) ②灰白色(5Y8/2)	良	好	不良
27	弥生土器 高坏	②(15.4)	浅黄橙色(10YR8/3)	不	良	やや不良
28	土師器 高坏		赤色(10R5/8)	良	好	良好
29	土師器 台付鉢	② 8.8	①淡赤褐色(2.5YR7/4) ②灰白色(10YR8/2)	良	好	良好
30	土師器 埴	①12.2 ② 5.4 ③ 4.1	灰白色(10YR8/2)	良	好	良好
Bトレンチ (Fig. 52)						
34	弥生土器 壺		①浅黄橙色(7.5YR8/3) ②灰白色(10YR8/2)	良	好	良好
35	弥生土器 壺		浅黄橙色(10YR8/4)	良	好	やや不良
36	弥生土器 壺	②(4.9)	①淡黄色(2.5Y8/3) ②暗灰色(N3/0)	良	好	良好
37	弥生土器 壺	② 3.0	①淡黄色(2.5Y8/3) ②にぶい橙色(5YR7/4)	精	良	良好
38	弥生土器 甕	①(21.8)	にぶい褐色(7.5YR5/4)	精	良	良好

出土遺物観察表

法量 ( ) は復原値

番号	器種	法量 (cm) (①口径②底径③器高)	色調 (①外面 ②内面)	胎土	焼成	備考
39	弥生土器 甕	②(6.5)	①にぶい橙色(5YR7/4) ②暗灰色(N3/0)	不良	良好	
40	弥生土器 壺		橙色(7.5YR7/6)	良好	良好	
41	弥生土器 壺		①にぶい褐色(7.5YR5/4) ②にぶい橙色(7.5YR7/4)	良好	良好	
42	弥生土器 壺	②(7.4)	にぶい黄橙色(10YR7/3)	良好	堅緻	
43	弥生土器 壺	② 3.3	灰白色(7.5Y8/1)	やや不良	不良	
44	弥生土器 甕		橙色(7.5YR7/6)	不良	やや不良	
45	弥生土器 甕		浅黄橙色(10YR8/3)	良好	やや不良	
46	弥生土器 高坏		にぶい橙色(5YR7/4)	不良	良好	
49	弥生土器 壺		にぶい褐色(7.5YR6/3)	精良	堅緻	
50	弥生土器 壺		①灰白色(2.5Y8/2) ②灰黄褐色(10YR6/3)	良好	良好	
51	弥生土器 壺		浅黄色(2.5YR7/3)	精良	良好	
52	弥生土器 壺	②(11.1)	赤褐色(2.5YR4/8)	不良	やや不良	
53	弥生土器 甕	②(6.3)	①橙色(2.5YR6/8) ②橙色(7.5YR7/6)	不良	良好	
55	磁器 紅皿	① 4.8 ② 1.7 ③ 1.35	素地-灰白色(7.5Y8/2) 釉調-明緑灰色(7.5GY8/1)			伊万里系
第1号土壙(Fig. 55~59)						
56	弥生土器 壺	①41.9	橙色(2.5YR7/8)	やや不良	良好	複合口縁
57	弥生土器 壺	①15.6	淡橙色(5YR8/4)	良好	良好	複合口縁
58	弥生土器 壺	①18.2	灰白色(2.5Y8/2)	良好	良好	複合口縁
59	弥生土器 壺	①(16.7)	淡黄色(2.5Y8/3)	やや不良	やや不良	複合口縁
60	弥生土器 壺	①13.8	灰白色(2.5Y8/2)	精良	良好	複合口縁
61	弥生土器 壺	① 9.7	淡黄色(2.5Y8/3)	不良	良好	複合口縁
62	弥生土器 壺		①にぶい黄橙色(10YR7/3) ②灰黄褐色(10YR5/2)	良好	良好	
63	弥生土器 壺		①にぶい橙色(7.5YR7/4) ②灰褐色(10YR4/1)	精良	精良	
64	弥生土器 壺	②(5.0)	①橙色(5YR6/6) ②灰黄褐色(10YR5/2)	良好	良好	
65	弥生土器 壺	②(5.8)	①浅黄橙色(10YR8/4) ②灰白色(7.5Y8/1)	不良	やや不良	
66	弥生土器 壺	①26.4	橙色(2.5YR7/6)	良好	良好	
67	弥生土器 壺	② 6.5	①橙色(5YR7/6) ②淡黄色(2.5Y8/3)	良好	良好	
68	弥生土器 壺	② 8.5	①にぶい褐色(2.5YR6/4) ②灰白色(5Y8/1)	良好	良好	
69	弥生土器 壺	② 4.5	①赤褐色(10R6/6) ②灰白色(7.5Y8/1)	不良	良好	
70	弥生土器 甕		①赤色(10R5/6) ②にぶい褐色(7.5YR5/4)	良好	堅緻	
71	弥生土器 甕	①11.8	赤色(10R5/8)	良好	良好	
72	弥生土器 甕	①(11.8)	①淡黄色(2.5Y8/3) ②灰白色(5Y7/1)	良好	不良	
73	弥生土器 甕	①(15.4)	赤褐色(10R6/8)	良好	不良	
74	弥生土器 甕	①(14.0)	淡黄色(2.5Y8/3)	やや不良	不良	
75	弥生土器 甕	①(15.9)	①にぶい褐色(5YR7/4) ②灰白色(2.5Y8/2)	やや不良	やや不良	
76	弥生土器 甕	①(30.8)	橙色(2.5YR7/6)	良好	良好	
77	弥生土器 甕	①(20.3)	①灰褐色(5YR5/2) ②黄褐色(2.5Y5/1)	精良	堅緻	
78	弥生土器 甕	①(17.0)	灰白色(10YR8/2)	不良	不良	

吉田構内本部2号館新営に伴う発掘調査

法量( )は復原値

番号	器種	法量 (cm) (①口径②底径③器高)	色調 (①外面 ②内面)	胎土	焼成	備考	
79	弥生土器 甕	①(18.8)	①にぶい黄橙色(10YR7/4) ②にぶい橙色(7.5YR7/3)	良	好	良	好
80	弥生土器 甕	①(24.6)	赤色(10R5/8)	不	良	精	良
81	弥生土器 甕	①(24.4)	浅黄橙色(10YR8/3)	良	好	良	好
82	弥生土器 甕	①(11.8)	灰褐色(7.5YR4/2)	精	良	堅	緻
83	弥生土器 甕	②(3.6)	①浅黄橙色(10YR8/3) ②灰白色(10YR8/3)	やや不良	良	好	
84	弥生土器 甕	②(3.7)	①灰黄色(2.5Y7/2) ②灰白色(10YR7/1)	良	好	良	好
85	弥生土器 甕	② 4.1	①淡赤橙色(2.5YR7/4) ②灰白色(2.5Y8/2)	良	好	良	好
86	弥生土器 甕	② 1.5	①淡黄色(7.5Y8/3) ②淡黄色(2.5Y8/3)	良	好	やや不良	
87	弥生土器 甕	②(3.4)	①赤色(10R5/6) ②にぶい褐色(7.5YR6/3)	精	良	堅	緻
88	弥生土器 甕	②(5.4)	灰黄褐色(10YR6/2)	やや不良	堅	緻	
89	弥生土器 甕	②(2.8)	①にぶい黄橙色(10YR7/3) ②にぶい橙色(5YR6/4)	不	良	良	好
90	弥生土器 甕	②(7.2)	①灰白色(2.5Y8/1) ②灰白色(5Y7/1)	良	好	良	好
91	弥生土器 甕	②(6.7)	①橙色(5YR7/6) ②浅黄褐色(10YR8/4)	不	良	堅	緻
92	弥生土器 甕	②(3.0)	①橙色(7.5YR7/6) ②浅黄色(2.5YR7/3)	やや不良	堅	緻	
93	弥生土器 高坏	①(30.0)	淡黄色(2.5Y8/3)	良	好	やや不良	
94	弥生土器 高坏	①(30.0)	橙色(2.5YR6/6)	良	好	良	好
95	弥生土器 高坏	①(22.2)	①橙色(5YR7/6) ②にぶい黄褐色(10YR7/3)	やや不良	良	好	
96	弥生土器 高坏	①(26.4)	にぶい黄褐色(10YR7/4)	やや不良	良	好	
97	弥生土器 高坏		橙色(2.5YR7/8)	やや不良	不	良	
98	弥生土器 高坏		にぶい黄褐色(10YR7/3)	良	好	やや不良	
99	弥生土器 高坏		①褐色(5YR4/1) ②橙色(2.5YR7/6)	不	良	不	良
100	弥生土器 高坏		①にぶい黄褐色(10YR7/3) ②灰色(5Y5/1)	やや不良	良	好	
101	弥生土器 高坏		淡黄色(2.5Y8/3)	良	好	やや不良	
102	弥生土器 高坏	②17.4	灰白色(10YR8/2)	精	良	堅	緻
103	弥生土器 高坏		赤褐色(10R6/8)	良	好	良	好
104	弥生土器 高坏		浅黄褐色(10YR8/3)	良	好	良	好
105	弥生土器 高坏		①灰褐色(5YR5/2) ②黄灰色(2.5YR4/1)	精	良	堅	緻
106	弥生土器 高坏		にぶい橙色(5YR7/4)	不	良	良	好
107	弥生土器 高坏		にぶい赤褐色(10YR6/4)	精	良	不	良
108	弥生土器 高坏		赤褐色(10R6/8)	精	良	良	好
109	弥生土器 高坏	②(17.8)	赤褐色(10R6/6)	良	好	不	良
110	弥生土器 高坏	②(20.1)	①灰白色(2.5Y8/2) ②にぶい橙色(7.5YR7/4)	精	良	良	好
111	弥生土器 器台		灰白色(2.5Y8/2)	精	良	堅	緻
112	弥生土器 支脚	②11.0	浅黄褐色(10YR8/3)	良	好	良	好
113	弥生土器 鉢	②(5.4)	①灰白色(10YR8/2) ②にぶい橙色(5YR7/4)	精	良	良	好
114	弥生土器 鉢	①10.5 ② 2.7 ③ 7.8	灰白色(5YR8/2)	精	良	良	好
115	手捏土器 鉢	② 0.8	灰白色(7.5Y8/1)	やや不良	やや不良		
116	手捏土器 鉢	② 1.3	①黄褐色(7.5YR7/8) ②灰白色(2.5Y8/1)	やや不良	不	良	外面丹塗り

出土遺物観察表

法量 ( ) は復原値

番号	器種	法量 (cm) (①口径②底径③器高)	色調 (①外面 ②内面)	胎土	焼成	備考
117	弥生土器 支脚	①(3.6) ②(5.6)	にぶい橙色(7.5YR7/4)	不	良 堅 緻	
第2号土壙 (Fig.61・62)						
120	弥生土器 壺	①(34.0)	浅黄橙色(10YR8/4)	良	好 良 好	
121	弥生土器 壺		浅黄橙色(10YR8/3)	不	良 やや不良	
122	弥生土器 壺		浅黄橙色(10YR8/3)	良	好 良 好	勦先状口縁
123	弥生土器 壺		橙色(5YR7/6)	良	好 堅 緻	複合口縁
124	弥生土器 壺		にぶい黄橙色(10YR7/4)	良	好 良 好	
125	弥生土器 壺	② 2.8	浅黄橙色(10YR8/3)	精	良 良 好	
126	弥生土器 甕	①15.6	にぶい橙色(5YR7/4)	良	好 堅 緻	
127	弥生土器 甕	①(15.8)	灰白色(10YR8/2)	良	好 やや不良	
128	弥生土器 甕	①(21.3)	黄橙色(10R6/8)	良	好 不 良	
129	弥生土器 甕		①にぶい橙色(7.5YR7/4) ②にぶい橙色(5YR6/3)	良	好 良 好	
130	弥生土器 甕		浅黄橙色(7.5YR8/3)	精	良 やや不良	跳ね上げ口縁
131	弥生土器 甕	②(6.0)	①橙色(2.5YR6/6) ②にぶい黄橙色(10YR5/3)	不	良 良 好	
132	弥生土器 甕	② 3.6	①橙色(2.5YR7/6) ②褐灰色(10YR6/1)	良	好 堅 緻	
133	弥生土器 甕	②(3.6)	①にぶい黄橙色(10YR7/3) ②浅黄橙色(10YR8/4)	良	好 良 好	
134	弥生土器 甕	② 1.5	にぶい黄橙色(10YR6/3)	良	好 良 好	
135	弥生土器 甕	②(6.0)	①灰黄色(2.5Y7/2) ②灰白色(10YR8/2)	良	好 良 好	
136	弥生土器 高坏	①(21.2)	橙色(5YR7/6)	やや不良	やや不良	
137	弥生土器 高坏	①(16.8)	①浅黄橙色(7.5YR8/4) ②灰色(7.5Y8/1)	不	良 やや不良	
138	弥生土器 高坏	②(15.4)	①赤橙色(10YR6/8) ②にぶい橙色(5YR7/3)	良	好 良 好	
139	弥生土器 高坏	②16.8	①浅黄橙色(10YR8/3) ②橙色(7.5YR7/6)	良	好 良 好	
140	手捏土器 高坏or台付鉢	① 6.0 ② 4.1 ③ 5.0	赤橙色(10R6/6)	良	好 良 好	
第5号土壙 (Fig.66)						
143	土師器 皿	①10.6 ② 6.0 ③1.75	淡黄色(2.5Y8/3)	やや不良	良 好	
144	土師器 皿	①10.3 ② 6.2 ③2.15	淡黄色(2.5Y8/3)	良	好 良 好	
145	土師器 坏or皿		にぶい橙色(7.5YR7/3)	精	良 良 好	
井戸 (Fig.68)						
146	土師器 皿	①12.7 ② 5.2 ③ 3.1	明褐灰色(7.5YR7/2)	良	好 良 好	
147	土師器 皿	①11.7 ② 5.2 ③ 3.0	①淡黄色(2.5Y8/3) ②にぶい黄橙色(10YR7/2)	精	良 堅 緻	
148	土師器 皿	①(12.2) ②(5.8) ③2.85	にぶい橙色(7.5YR7/3)	やや不良	良 好	
149	土師器 皿	①12.6 ② 5.2 ③ 3.2	にぶい橙色(7.5YR7/4)	精	良 堅 緻	
150	土師器 皿	①13.2 ② 5.1 ③2.85	①淡黄色(2.5Y8/3) ②にぶい黄橙色(10YR7/2)	良	好 良 好	
151	土師器 皿	①(13.5)	明黄橙色(7.5YR8/3)	良	好 堅 緻	
152	土師器 皿	①12.4 ② 3.7 ③2.85	灰白色(2.5Y8/2)	精	良 やや不良	
153	土師器 皿	① 7.0 ② 4.6 ③1.25	にぶい橙色(7.5YR7/4)	精	良 堅 緻	
154	須恵質土器 搦鉢		灰白色(10YR8/1)	良	好 良 好	

吉田構内本部2号館新営に伴う発掘調査

法量( )は復原値

番号	器種	法量 (cm) (①口径②底径③器高)	色調 (①外面 ②内面)	胎土	焼成	備考
第1号溝 (Fig. 70~72)						
157	土師器 坏	②(8.0)	浅黄橙色(7.5YR8/4)	やや不良	やや不良	
158	土師器 坏	②(8.2)	①灰白色(2.5YR7/1) ②褐灰色(10YR5/1)	やや不良	良好	
159	土師器 皿	②(7.0)	①浅黄橙色(7.5YR8/3) ②灰白色(10YR8/2)	良好	堅緻	
160	土師器 皿	②(5.4)	灰白色(10YR8/2)	良好	やや不良	
161	土師器 皿	②(6.4)	①にぶい橙色(7.5YR7/4) ②浅黄橙色(7.5YR7/4)	良好	堅緻	
162	土師器 皿	②(5.6)	灰白色(2.5YR8/2)	良好	やや不良	
163	土師器 皿	①(6.2) ②(4.0) ③(1.05)	浅黄橙色(10YR8/3)	良好	堅緻	
164	瓦質土器 擂鉢		灰色(N6/0)	不良	良好	
165	瓦質土器 擂鉢		灰白色(10YR8/1)	不良	やや不良	
166	瓦質土器 擂鉢	①27.4 ②13.8 ③10.1	灰色(N4/0)	やや不良	やや不良	
167	瓦質土器 擂鉢	①(25.6)	灰白色(N8/0)	良好	良好	
168	瓦質土器 擂鉢	①(27.4)	灰色(N4/0)	やや不良	やや不良	
169	瓦質土器 擂鉢	①(28.8)	①灰白色(5Y8/1) ②灰色(N6/0)	良好	良好	
170	瓦質土器 擂鉢	②(14.7)	①灰色(N4/0) ②灰色(7.5Y6/1)	良好	良好	
171	瓦質土器 鍋		明青灰色(5B7/1)	やや不良	堅緻	外面に煤付着
172	瓦質土器 鍋		暗青灰色(5B4/1)	良好	堅緻	外面に煤付着
173	瓦質土器 鍋		①灰白色(2.5Y8/2) ②灰白色(5Y8/1)	良好	良好	外面に煤付着
174	瓦質土器 鍋		暗灰色(N3/0)	精良	良好	
175	瓦質土器 鍋		①灰色(N5/0) ②灰白色(7.5Y7/1)	良好	良好	
176	瓦質土器 鍋		灰色(N3/0)	良好	良好	
177	瓦質土器 鍋		①灰オリーブ色(5Y6/2) ②暗青灰色(5B4/1)	良好	良好	
178	瓦質土器 鍋		灰色(7.5Y5/1)	不良	やや不良	
179	瓦質土器 鍋		青灰色(10BG5/1)	良好	良好	
180	瓦質土器 鍋		青灰色(5BG5/1)	良好	良好	
181	瓦質土器 鍋		灰色(N5/0)	良好	やや不良	
182	瓦質土器 こね鉢	①18.0	①灰白色(10Y8/1) ②灰黄色(2.5Y7/2)	良好	良好	
183	瓦質土器 こね鉢	①21.9	灰色(N6/0)	精良	良好	片口
184	瓦質土器 甕		灰色(7.5Y6/1)	不良	不良	
185	瓦質土器 火鉢	①34.4 ②24.0 ③31.7	灰色(10Y5/1)	良好	良好	
186	土師質土器 鍋		橙色(2.5YR7/6)	やや不良	良好	
187	土師質土器 鍋		灰白色(7.5Y8/2)	良好	良好	
188	土師質土器 鍋		明黄褐色(10YR7/6)	不良	良好	
189	土師質土器 鍋		赤橙色(10R6/8)	良好	良好	外面一部に煤付着
190	土師質土器 鍋		灰白色(10YR8/1)	精良	良好	
191	土師質土器 鍋		にぶい橙色(5YR7/4)	良好	不良	
192	須恵質土器 盤	①(14.0) ②(13.1) ③5.2	青灰色(5B5/1)	やや不良	良好	
193	青磁 塊		素地-灰白色(7.5Y6/1) 釉調-灰オリーブ色(7.5Y5/2)			龍泉窯系

出土遺物観察表

法量 ( ) は復原値

番号	器種	法量 (cm) (①口径②底径③器高)	色調 (①外面 ②内面)	胎土	焼成	備考
194	陶器 埴	①(12.8) ②(7.8) ③ 3.7	素地-灰白色(10Y8/1) 釉調-明緑灰色(10GY7/1)			染付
195	陶器 埴	①10.3 ② 4.1 ③ 7.0	素地-灰白色(2.5Y8/2) 釉調-明緑灰色(7.5GY8/1)			呉須-青灰色 (5BG5/1)
196	陶器 埴	② 5.0	素地-橙色(2.5YR6/6) 釉調-灰白色(2.5Y7/1)			
197	陶器 埴	①(13.6) ②(6.2) ③ 7.4	素地-灰色(N4/0) 釉調-白			萩焼系 井戸形
198	陶器 埴	①(11.0) ② 4.7 ③ 5.7	素地-明赤褐色(2.5YR5/6) 釉調-暗赤色(10R3/4)			美濃系 天目形
199	陶器 皿	② 4.4	素地-にぶい黄褐色(10YR7/2) 釉調-にぶい黄色(2.5Y6/4)			
200	陶器 皿	① 11.8 ② 4.6 ③ 2.7	素地-にぶい褐色(7.5YR6/4) 釉調-黄褐色(2.5Y5/3)			
201	陶器 皿	①(10.4)	素地-灰白色(10YR8/2) 釉調-オリ-ブ灰色(10Y5/2)			瀬戸系
202	陶器 鉢		素地-にぶい赤褐色(7.5R5/3) 釉調-半透明、灰黄褐色(10Y6/2)			
203	陶器 甕	①(24.6)	暗灰色(N3/0)	良	好	備前系
204	白磁 埴	②(4.2)	素地-灰白色(N7/0) 釉調-明緑灰色(10GY8/1)			内外に貫入あり
205	白磁 埴	①(12.0)	素地-灰白色(10YR8/2) 釉調-灰色(5Y8/1)			
206	白器 埴	②(6.2)	素地-灰白色(N8/0) 釉調-明緑灰色(10G7/1)			
207	磁器 湯呑		素地-灰白色(7.5Y8/1) 釉調-灰白色(10Y8/1)			呉須-暗青灰色 (5BG4/1)
208	磁器 燗台or仏飯器	② 4.6	素地-灰白色(7.5Y8/1) 釉調-灰白色(10Y7/1)			肥前系
第2号溝 (Fig. 74)						
212	瓦質土器 播鉢	②13.6	暗青灰色(5BG4/1)	良	好	やや不良
213	瓦質土器 播鉢	②(13.2)	暗青灰色(5B3/1)	良	好	良好
214	瓦質土器 播鉢	②(16.0)	青灰色(10BG6/1)	不	良	良好
215	瓦質土器 鍋	①(24.0)	暗灰色(N3/0)	やや不良	良	好 外面に煤付着
216	瓦質土器 こね鉢	②(13.4)	①灰色(7.5Y6/1) ②にぶい褐色(7.5Y7/3)	良	好	良好
217	陶器 播鉢	②(10.8)	赤灰色(2.5YR4/1)	良	好	良好 備前系
218	須恵質土器 播鉢	①(23.6)	青灰色(5BG6/1)	良	好	良好
柱穴 (Fig. 75)						
219	土師質土器 鍋		灰白色(2.5Y8/2)	良	好	堅 緻 P 1
220	土師質土器 甕		褐色(2.5Y7/6)	やや不良	良	好 P 1
221	土師器 皿	②(6.6)	①にぶい褐色(5YR6/3) ②にぶい褐色(7.5YR7/4)	精	良	堅 緻 P 2
222	土師器 坏	②(6.8)	①褐色(2.5YR6/6) ②にぶい褐色(7.5YR7/4)	やや不良	良	好 P 3
223	土師器 皿	②(6.2)	にぶい褐色(7.5YR7/4)	良	好	やや不良 P 4
224	土師器 皿	①(11.3)	浅黄褐色(7.5YR8/4)	良	好	良好 P 4
225	土師器 皿	②(4.7)	褐色(5YR7/8)	良	好	良好 P 5
226	土師器 台付皿	② 5.2	褐色(2.5YR6/8)	精	良	良好 P 5
227	青磁 埴		素地-灰白色(N7/0) 釉調-オリ-ブ灰色(10Y6/2)			P 6 龍泉窯系
228	弥生土器 高坏	②(15.6)	淡褐色(5YR8/4)	良	好	不良 P 7
229	弥生土器 高坏	①(37.0)	淡褐色(5YR8/4)	良	好	不良 P 7
231	土師器 皿	① 8.4 ② 5.1 ③ 2.5	褐色(5YR7/6)	精	良	良好 P 9
232	土師器 皿	②(5.8)	褐色(2.5YR7/6)	良	好	良好 P 10
233	陶器 埴	② 4.2	素地-灰白色(10YR8/1)			P 11



吉田構内本部2号館新営に伴う発掘調査

法量( )は復原値

番号	器種	法量 (cm) (①口径②底径③器高)	色調 (①外面 ②内面)	胎土	焼成	備考
234	弥生土器 甕	② 5.4	①橙色(2.5YR7/8) ②灰褐色(5YR6/2)	良 好	良 好	P12
235	弥生土器 甕	② 7.8	淡黄色(2.5Y8/3)	不 良	不 良	P13
236	土師器 皿	①(10.2) ②(6.2) ③ 2.0	灰白色(10YR8/2)	良 好	良 好	P14
237	弥生土器 甕		にぶい橙色(7.5YR7/4)	良 好	良 好	P15 跳ね上げ口縁
第5層 (Fig. 76~81・83)						
238	弥生土器 壺		にぶい橙色(7.5YR7/4)	良 好	良 好	
239	弥生土器 壺		灰白色(10YR8/2)	良 好	良 好	
240	弥生土器 壺		灰白色(2.5Y8/1)	良 好	良 好	
241	弥生土器 壺		①にぶい橙色(5YR7/3) ②褐灰色(10YR5/1)	やや不良	良 好	
242	弥生土器 壺		浅黄橙色(7.5YR8/4)	不 良	良 好	
243	弥生土器 壺		浅黄橙色(7.5YR8/3)	不 良	良 好	
244	弥生土器 壺		にぶい橙色(7.5YR7/3)	不 良	やや不良	鋤先状口縁
245	弥生土器 壺		明赤褐色(2.5YR5/6)	精 良	堅 緻	
246	弥生土器 壺		にぶい橙色(5YR6/4)	精 良	堅 緻	
247	弥生土器 壺		橙色(5YR7/6)	やや不良	やや不良	複合口縁
248	弥生土器 壺		にぶい橙色(7.5YR7/4)	良 好	堅 緻	
249	弥生土器 壺	②(5.6)	①灰褐色(5YR6/2) ②褐灰色(7.5YR4/1)	良 好	良 好	
250	弥生土器 壺	②(6.4)	浅黄橙色(7.5YR8/3)	良 好	良 好	
251	弥生土器 壺	②(2.6)	灰白色(2.5Y8/2)	不 良	不 良	
252	弥生土器 壺	②(6.0)	①淡赤褐色(2.5YR7/4) ②灰白色(2.5YR8/2)	良 好	良 好	
253	弥生土器 壺	②(6.8)	灰白色(2.5YR8/2)	不 良	良 好	
254	弥生土器 壺	②(9.4)	①明褐灰色(7.5YR7/2) ②灰白色(10YR8/2)	やや不良	良 好	
255	弥生土器 壺	①(29.7)	浅黄橙色(7.5YR8/3)	良 好	良 好	鋤先状口縁
256	弥生土器 壺	①(33.5)	にぶい橙色(7.5YR7/4)	やや不良	良 好	複合口縁
257	縄文土器 甕		①にぶい黄橙色(10YR7/4) ②黄灰色(2.5Y4/1)	良 好	良 好	
258	弥生土器 甕		明黄褐色(10YR6/6)	良 好	良 好	
259	弥生土器 甕		橙色(5YR7/6)	良 好	やや不良	
260	弥生土器 甕		浅黄橙色(7.5YR8/4)	良 好	良 好	須玖I式
261	弥生土器 甕		にぶい黄橙色(10YR6/3)	良 好	良 好	須玖I式
262	弥生土器 甕		①浅黄橙色(10YR8/3) ②浅黄橙色(7.5YR8/4)	良 好	良 好	須玖I式
263	弥生土器 甕	①21.6	にぶい橙色(7.5YR7/4)	良 好	堅 緻	跳ね上げ口縁
264	弥生土器 甕	①22.0	淡橙色(5YR8/4)	精 良	堅 緻	跳ね上げ口縁
265	弥生土器 甕		浅黄橙色(7.5YR8/4)	精 良	やや不良	跳ね上げ口縁
266	弥生土器 甕		①灰褐色(5YR6/2) ②褐灰色(10YR4/1)	精 良	良 好	跳ね上げ口縁
267	弥生土器 甕		にぶい橙色(5YR7/4)	不 良	良 好	
268	弥生土器 甕		橙色(5YR6/8)	やや不良	やや不良	下城式
269	弥生土器 甕		灰褐色(5YR4/2)	良 好	良 好	
270	弥生土器 甕		明褐灰色(7.5YR7/2)	良 好	良 好	

出土遺物観察表

法量 ( ) は復原値

番号	器種	法量 (cm) (①口径②底径③器高)	色 (①外面 ②内面)	胎土	焼成	備考
271	弥生土器 甕		①橙色(2.5YR7/8) ②灰白色(2.5Y8/2)	不良	不良	
272	弥生土器 甕		にぶい橙色(7.5YR7/3)	良好	良好	
273	弥生土器 甕		淡黄色(2.5Y8/3)	やや不良	不良	山陰系
274	弥生土器 甕		①にぶい橙色(7.5YR7/4) ②淡黄色(2.5Y8/3)	良好	良好	山陰系
275	弥生土器 甕		灰白色(2.5Y8/1)	良好	不良	山陰系
276	弥生土器 甕		灰白色(10YR8/2)	やや不良	不良	山陰系
277	弥生土器 甕	①(11.0)	橙色(7.5YR6/6)	良好	良好	
278	弥生土器 甕	①(16.4)	淡黄色(2.5Y8/3)	良好	やや不良	
279	弥生土器 甕	①(17.7)	浅黄橙色(7.5YR8/3)	良好	不良	
280	弥生土器 甕	①(14.5)	橙色(2.5YR7/6)	良好	やや不良	
281	弥生土器 甕	①(16.6)	にぶい黄橙色(10YR7/3)	精良	良好	
282	弥生土器 甕	① 9.2 ③10.5	にぶい褐色(7.5YR6/3)	良好	良好	
283	弥生土器 甕	① 9.6 ③12.2	にぶい褐色(7.5YR5/3)	良好	良好	底部に初痕
284	弥生土器 甕	②(5.2)	橙色(2.5YR6/8)	良好	良好	
285	弥生土器 甕	②(4.4)	①橙色(2.5YR6/6) ②明褐灰色(7.5YR7/2)	良好	良好	
286	弥生土器 甕	②(4.9)	淡赤橙色(2.5YR7/4)	精良	堅緻	
287	弥生土器 甕	②(5.4)	①にぶい橙色(5YR7/4) ②浅黄橙色(10YR8/3)	不良	やや不良	
288	弥生土器 甕	②(4.8)	灰白色(7.5YR8/2)	やや不良	不良	
289	弥生土器 甕	②(5.0)	①赤灰色(2.5YR4/1) ②灰色(7.5YR4/1)	良好	やや不良	
290	弥生土器 甕	②(6.0)	にぶい橙色(7.5YR7/4)	やや不良	やや不良	
291	弥生土器 甕	②(7.2)	①にぶい橙色(5YR6/4) ②にぶい褐色(7.5YR6/3)	良好	堅緻	
292	弥生土器 甕	②(5.6)	①にぶい褐色(5YR6/3) ②灰褐色(7.5YR6/2)	不良	やや不良	
293	弥生土器 甕	②(5.6)	灰白色(10YR8/2)	精良	堅緻	
294	弥生土器 甕	②(5.8)	①にぶい褐色(5YR7/4) ②浅黄橙色(10YR8/3)	精良	堅緻	
295	弥生土器 甕	② 4.1	①にぶい褐色(7.5YR5/3) ②にぶい褐色(5YR7/4)	精良	良好	
296	弥生土器 甕	② 3.2	灰白色(2.5Y8/1)	やや不良	やや不良	
297	弥生土器 甕	②(4.2)	①にぶい褐色(5YR7/4) ②灰白色(2.5Y8/1)	良好	良好	
298	弥生土器 甕	②(3.0)	①褐色(2.5YR7/8) ②にぶい褐色(7.5YR6/3)	不良	やや不良	
299	弥生土器 甕	②(6.2)	①淡褐色(5YR8/4) ②淡黄色(2.5Y8/3)	良好	良好	
300	弥生土器 甕		淡黄色(2.5Y8/3)	良好	不良	
301	弥生土器 甕	② 3.0	浅黄橙色(7.5YR8/4)	良好	やや不良	
302	弥生土器 高坏		浅黄橙色(10YR8/3)	精良	良好	
303	弥生土器 高坏		①褐色(7.5YR7/6) ②浅黄橙色(10YR8/3)	不良	やや不良	
304	弥生土器 高坏	①(30.6)	にぶい赤褐色(10R6/4)	やや不良	やや不良	
305	弥生土器 高坏	①(29.0)	①褐色(5YR7/6) ②浅黄橙色(10YR8/3)	良好	やや不良	
306	弥生土器 高坏	①(22.2)	灰白色(2.5Y8/2)	良好	不良	
307	弥生土器 支脚		灰白色(2.5Y8/2)	良好	良好	
308	弥生土器 壺の蓋		にぶい黄褐色(10YR7/3)	良好	やや不良	

## 吉田構内本部2号館新営に伴う発掘調査

法量( )は復原値

番号	器種	法量 (cm) (①口径②底径③器高)	色調 (①外面 ②内面)	胎土	焼成	備考
309	土師器 直口壺	①(10.2)	橙色(5YR6/6)	良	好 やや不良	
310	土師器 甕	①13.4	①橙色(5YR7/6) ②淡黄色(2.5Y8/3)	良	好 良 好	布留式
311	土師器 甕	①(28.4)	①赤褐色(10YR4/4) ②にぶい橙色(7.5YR7/4)	良	好 不 良	布留式
312	土師器 甕	①14.1	橙色(5YR6/8)	不	良 良 好	布留式
313	土師器 甕	①(19.6)	橙色(2.5YR6/4)	精	良 良 好	布留式
314	土師器 甕		にぶい黄橙色(10YR7/3)	精	良 堅 緻	
315	土師器 甕	①25.0	橙色(5YR7/6)	精	良 良 好	
316	土師器 高坏		①浅黄橙色(7.5YR8/3) ②灰白色(10YR8/2)	良	好 不 良	
317	土師器 高坏		橙色(2.5YR7/6)	良	好 良 好	
318	土師器 高坏		橙色(5YR7/8)	良	好 良 好	
319	土師器 高坏		橙色(2.5YR6/8)	精	良 やや不良	
320	土師器 高坏	②(10.5)	赤橙色(10R6/8)	精	良 堅 緻	
321	土師器 高坏		①橙色(5YR7/6) ②浅黄橙色(7.5YR8/4)	良	好 良 好	
322	土師器 鉢	①12.0 ③ 5.7	橙色(5YR6/6)	精	良 良 好	
323	土師器 鉢	①12.2 ③ 6.9	にぶい橙色(5YR7/4)	良	好 やや不良	
324	土師器 鉢	①(13.8) ③ 6.5	にぶい黄橙色(10YR7/3)	良	好 良 好	
325	土師器 鉢	①(11.4) ③ 4.9	にぶい橙色(5YR7/4)	精	良 良 好	
326	土師器 鉢	①12.0 ③ 5.3	橙色(5YR6/8)	やや不良	やや不良	
327	土師器 鉢	①12.6 ③(5.5)	明赤褐色(5YR5/8)	良	好 良 好	
328	土師器 鉢	①12.7 ③ 5.7	淡橙色(5YR8/4)	良	好 やや不良	
329	土師器 台付鉢	②(7.4)	橙色(5YR7/6)	精	良 良 好	
330	須惠器 坏蓋	①(11.4)	青灰色(10BG5/1)	良	好 堅 緻	
331	須惠器 坏蓋	①(12.4) ③ 4.4	暗青灰色(10BG4/1)	精	良 良 好	
332	須惠器 坏蓋	①(13.1) ③(4.5)	灰白色(5Y8/2)	良	好 不 良	
333	須惠器 坏蓋	①13.6 ③ 4.8	①灰色(10Y4/1) ②暗青灰色(5B4/1)	良	好 良 好	
334	須惠器 坏蓋		暗青灰色(10BG4/1)	やや不良	堅 緻	
335	須惠器 坏蓋	①(13.0)	①暗緑灰色(10GY4/1) ②青灰色(5BG6/1)	良	好 良 好	
336	須惠器 坏身	①11.3 ③ 5.2	灰白色(5Y7/1)	精	良 やや不良	
337	須惠器 坏身	①(11.6)	灰色(N6/0)	精	良 堅 緻	
338	須惠器 坏身	②(9.0)	灰色(N6/0)	良	好 堅 緻	
339	須惠器 短頸壺	① 7.8 ③(7.8)	①暗灰色(N3/0) ②灰色(N6/0)	やや不良	良 好	
340	手捏土器 鉢	①(8.6) ②(2.4) ③ 6.6	にぶい褐色(7.5YR6/3)	良	好 良 好	
341	手捏土器 鉢	①(8.5) ② 4.2 ③6.15	褐灰色(7.5YR5/1)	やや不良	良 好	
342	手捏土器 鉢	① 8.6 ② 3.7 ③ 5.3	①灰白色(10YR8/2) ②浅黄褐色(10YR8/3)	不	良 やや不良	
343	手捏土器 鉢	② 3.6	①にぶい褐色(7.5YR7/3) ②にぶい褐色(5YR7/4)	良	好 良 好	
344	手捏土器 鉢	② 1.9	淡黄色(2.5YR8/3)	良	好 やや不良	
345	手捏土器 鉢	② 4.6	①灰黄色(2.5YR7/2) ②にぶい褐色(7.5YR7/3)	やや不良	良 好	
346	手捏土器 鉢	② 3.0	明褐灰色(7.5YR7/2)	良	好 良 好	

出土遺物観察表

法量 ( ) は復原値

番号	器種	法量 (cm) (①口径②底径③器高)	色調 (①外面 ②内面)	胎土	焼成	備考
347	手捏土器 鉢	②(6.2)	にぶい黄橙色(10YR7/3)	良 好	良 好	
348	手捏土器 鉢	②(6.2)	灰黄色(2.5Y7/2)	やや不良	良 好	
349	手捏土器 鉢		にぶい黄橙色(10YR7/3)	良 好	良 好	
350	手捏土器 鉢	② 3.2	にぶい黄橙色(5YR7/4)	精 良	やや不良	
351	手捏土器 鉢	② 3.4	にぶい橙色(7.5YR7/4)	良 好	良 好	
352	手捏土器 鉢	② 3.3	橙色(5YR7/6)	良 好	やや不良	
353	手捏土器 鉢	② 3.1	にぶい黄橙色(5YR7/4)	精 良	良 好	
354	手捏土器 鉢	② 2.2	橙色(5YR7/6)	良 好	良 好	
355	手捏土器 鉢	② 3.1	①明褐色(7.5YR7/2) ②褐色(10YR4/1)	良 好	良 好	
356	手捏土器 甕	② 6.6	褐色(10YR5/1)	良 好	良 好	
357	手捏土器 鉢		灰白色(7.5Y8/1)	やや不良	不 良	
358	手捏土器 鉢		浅黄橙色(10YR8/3)	不 良	やや不良	
359	手捏土器 鉢	① 3.6 ② 2.5 ③ 2.6	橙色(5YR7/6)	精 良	良 好	
360	手捏土器 鉢	②(4.1)	①橙色(5YR6/6) ②灰黄褐色(10YR6/2)	精 良	良 好	
361	手捏土器 鉢	①(4.9) ②(4.4) ③4.75	橙色(5YR6/6)	精 良	良 好	
362	手捏土器 鉢	② 5.8	橙色(5YR6/6)	精 良	良 好	
363	手捏土器 鉢	① 6.0 ③ 4.8	橙色(2.5YR6/8)	精 良	堅 緻	
364	手捏土器 鉢	① 7.8 ③(4.3)	橙色(2.5YR7/8)	精 良	良 好	
365	手捏土器 高坏		にぶい黄橙色(10YR7/2)	やや不良	良 好	
366	土製模造品 鏡	最大長 3.8 最大幅 4.2 最大厚 1.5	橙色(5YR6/8)	精 良	良 好	
367	土製模造品 鏡	現存長 2.0 最大幅 3.5 最大厚 1.5	橙色(5YR7/6)	精 良	良 好	
368	土製丸玉	最大長1.95 最大幅 1.8 最大厚 1.8	灰白色(2.5Y8/2)	良 好	やや不良	
369	土製丸玉	最大長 1.8 最大幅1.65 最大厚 1.9	橙色(5YR7/6)	やや不良	良 好	
370	土製丸玉	最大長 2.0 最大幅 1.8 最大厚 1.7	橙色(5YR7/8)	良 好	堅 緻	
371	土製丸玉	最大長(2.0) 最大幅 1.8 最大厚(1.6)	橙色(5YR6/8)	精 良	良 好	
372	土製丸玉	最大長 1.8 最大幅1.75 最大厚 1.7	橙色(5YR7/6)	良 好	良 好	
373	土製丸玉	最大長 2.1 最大幅 2.2 最大厚 2.1	にぶい橙色(7.5YR7/3)	良 好	良 好	
396	円筒埴輪		①明赤褐色(2.5YR5/8) ②浅黄橙色(7.5YR8/3)	精 良	良 好	土師質
第6層 (Fig. 84・85)						
397	縄文土器 甕		橙色(7.5YR7/6)	良 好	良 好	粗製
398	縄文土器 甕		①橙色(7.5YR7/6) ②にぶい黄橙色(10YR7/3)	良 好	良 好	粗製
399	縄文土器 甕	②(9.6)	①淡黄色(2.5Y8/3) ②褐色(10YR6/1)	良 好	良 好	粗製
400	弥生土器 壺		①淡黄色(2.5Y8/3) ②明褐色(7.5YR7/1)	良 好	良 好	
401	弥生土器 壺		にぶい橙色(7.5YR7/4)	やや不良	不 良	
402	弥生土器 壺		①浅黄橙色(10YR8/3) ②にぶい黄橙色(10YR6/3)	良 好	堅 緻	
403	弥生土器 壺		にぶい橙色(7.5YR7/4)	良 好	良 好	
404	弥生土器 壺		にぶい黄橙色(10YR6/3)	良 好	やや不良	
405	弥生土器 壺		赤褐色(2.5YR4/6)	不 良	やや不良	

吉田構内本部2号館新営に伴う発掘調査

法量( )は復原値

番号	器種	法量 (cm) (①口径②底径③器高)	色調 (①外面 ②内面)	胎土	焼成	備考
406	弥生土器 壺		明赤褐色(5YR5/6)	精 良	堅 緻	畿内系
407	弥生土器 壺		にぶい黄褐色(10YR7/3)	良 好	良 好	畿内系
408	弥生土器 壺	①25.6	にぶい橙色(5YR6/4)	不 良	良 好	鋤先状口縁 須玖Ⅱ式
409	弥生土器 壺		にぶい橙色(5YR7/4)	良 好	良 好	
410	弥生土器 壺	①(17.6)	橙色(5YR6/8)	良 好	やや不良	複合口縁
411	弥生土器 壺	②(8.4)	①浅黄褐色(7.5YR8/4) ②浅黄褐色(10YR8/3)	やや不良	堅 緻	
412	弥生土器 壺	②(7.4)	①褐色(2.5Y7/6) ②にぶい褐色(7.5YR5/3)	不 良	良 好	
413	弥生土器 甕		にぶい橙色(7.5YR6/4)	良 好	良 好	
414	弥生土器 甕		①褐色(2.5YR6/8) ②にぶい黄褐色(10YR7/4)	精 良	堅 緻	
415	弥生土器 甕		①にぶい橙色(5YR6/4) ②にぶい黄褐色(10YR7/3)	不 良	良 好	跳ね上げ口縁
416	弥生土器 甕		①にぶい黄褐色(10YR5/3) ②にぶい黄褐色(10YR7/3)	良 好	良 好	
417	弥生土器 甕		にぶい褐色(7.5YR5/3)	精 良	堅 緻	
418	弥生土器 甕		灰黄色(2.5Y6/2)	不 良	不 良	
419	弥生土器 甕		褐色(7.5YR7/6)	精 良	良 好	
420	弥生土器 甕	①(18.8)	①にぶい褐色(7.5YR6/4) ②灰色(N4/0)	精 良	堅 緻	跳ね上げ口縁
421	弥生土器 甕	①(24.2)	にぶい褐色(7.5YR5/4)	精 良	堅 緻	跳ね上げ口縁
422	弥生土器 甕	①(24.8)	浅黄褐色(7.5YR8/6)	良 好	やや不良	跳ね上げ口縁
423	弥生土器 甕	①(24.0)	浅黄褐色(10YR8/3)	不 良	やや不良	
424	弥生土器 甕	①(15.1)	にぶい褐色(7.5YR6/4)	良 好	良 好	
425	弥生土器 甕	②(5.8)	淡褐色(5YR8/4)	良 好	やや不良	
426	弥生土器 甕	②(5.6)	褐色(2.5YR6/8)	良 好	良 好	
427	弥生土器 高坏	②(16.6)	①灰黄色(2.5Y7/2) ②にぶい黄褐色(10YR6/3)	良 好	やや不良	
428	弥生土器 鉢	①(8.6) ②(2.2) ③ 6.5	灰白色(10YR8/2)	やや不良	やや不良	
429	弥生土器 支脚		①にぶい黄褐色(10YR7/4) ②灰黄褐色(10YR4/2)	不 良	不 良	
430	土師器 把手?		浅黄褐色(10YR8/3)	不 良	不 良	
第7層 (Fig. 86~88)						
433	縄文土器 浅鉢		黒褐色(10YR3/1)	精 良	良 好	精製
434	弥生土器 壺		にぶい褐色(5YR7/4)	精 良	堅 緻	
435	弥生土器 壺		①灰褐色(7.5YR4/2) ②灰白色(2.5Y7/1)	やや不良	良 好	
436	弥生土器 壺		①にぶい褐色(7.5YR7/4) ②灰黄色(2.5Y7/2)	やや不良	良 好	
437	弥生土器 壺		にぶい黄褐色(10YR7/4)	良 好	やや不良	
438	弥生土器 壺		①浅黄褐色(10YR8/3) ②にぶい黄褐色(10YR7/2)	不 良	良 好	
439	弥生土器 壺		にぶい褐色(7.5YR7/3)	精 良	堅 緻	
440	弥生土器 壺		にぶい黄褐色(10YR7/3)	良 好	良 好	
441	弥生土器 壺		①浅黄褐色(10YR8/3) ②灰白色(10YR7/1)	良 好	やや不良	
442	弥生土器 壺		浅黄褐色(10YR8/3)	良 好	良 好	
443	弥生土器 壺		にぶい赤褐色(5YR5/4)	精 良	堅 緻	
444	弥生土器 壺		①浅黄褐色(10YR8/3) ②黄灰色(2.5Y5/1)	良 好	やや不良	

出土遺物観察表

法量 ( ) は復原値

番号	器種	法量 (cm) (①口径②底径③器高)	色調 (①外面 ②内面)	胎土	焼成	備考
445	弥生土器 壺		①橙色(7.5YR7/6) ②橙色(2.5YR6/8)	やや不良	やや不良	
446	弥生土器 壺		にぶい橙色(7.5YR6/4)	良好	堅緻	
447	弥生土器 壺		にぶい橙色(7.5YR6/4)	精良	堅緻	
448	弥生土器 壺		にぶい橙色(7.5YR7/4)	精良	良好	
449	弥生土器 壺		灰白色(10YR8/2)	不良	やや不良	
450	弥生土器 壺		にぶい橙色(7.5YR7/3)	やや不良	やや不良	
451	弥生土器 壺	①(10.6)	にぶい黄橙色(10YR6/3)	良好	堅緻	鋤先状口縁 須玖Ⅱ式
452	弥生土器 壺	①(18.6)	灰白色(10YR8/2)	不良	良好	鋤先状口縁 須玖Ⅱ式
453	弥生土器 壺	①(28.6)	にぶい橙色(5YR7/4)	不良	不良	
454	弥生土器 壺		浅黄橙色(7.5YR8/4)	良好	やや不良	
455	弥生土器 壺	②(9.6)	浅黄橙色(10YR8/3)	良好	やや不良	
456	弥生土器 壺	② 8.5	灰白色(10YR8/2)	不良	良好	
457	弥生土器 壺	②(9.2)	①橙色(2.5YR6/8) ②にぶい黄橙色(10YR7/3)	良好	良好	
458	弥生土器 壺	②(7.8)	①にぶい褐色(7.5YR6/3) ②浅黄橙色(10YR8/3)	良好	良好	
459	弥生土器 壺	②(17.2)	赤色(10R5/6)	不良	良好	
460	弥生土器 壺	②(10.6)	①にぶい橙色(5YR7/4) ②灰色(5Y4/1)	良好	良好	
461	弥生土器 壺	②(7.8)	①橙色(7.5YR7/6) ②灰色(7.5Y4/1)	良好	良好	
462	弥生土器 壺	②(5.7)	にぶい橙色(5YR6/4)	精良	堅緻	
463	弥生土器 壺	②(9.8)	①橙色(2.5YR7/8) ②にぶい橙色(5YR6/4)	不良	良好	
464	弥生土器 壺	②(9.8)	①にぶい橙色(7.5YR6/4) ②淡黄色(2.5Y8/3)	良好	堅緻	
465	弥生土器 壺	②(8.0)	①橙色(2.5Y6/8) ②明褐色(7.5YR7/1)	良好	良好	
466	弥生土器 壺	②(8.4)	①淡黄色(2.5Y8/3) ②灰白色(7.5Y7/1)	不良	良好	
467	弥生土器 壺		にぶい黄橙色(10YR7/3)	良好	良好	
468	弥生土器 甕	①(18.9)	①にぶい黄橙色(10YR7/3) ②にぶい褐色(7.5YR6/3)	やや不良	不良	
469	弥生土器 甕	①(16.4)	にぶい黄橙色(10YR7/3)	やや不良	やや不良	跳ね上げ口縁
470	弥生土器 甕	①(18.4)	橙色(2.5YR6/8)	精良	不良	
471	弥生土器 甕	①(13.0)	①にぶい黄橙色(10YR7/3) ②浅黄橙色(10YR8/3)	良好	不良	
472	弥生土器 甕		明赤褐色(2.5YR5/6)	やや不良	やや不良	
473	弥生土器 甕		①明赤褐色(2.5YR5/6) ②橙色(5YR6/6)	良好	やや不良	
474	弥生土器 甕		①にぶい黄橙色(10YR7/4) ②浅黄橙色(10YR8/3)	精良	良好	
475	弥生土器 甕		灰白色(10YR8/2)	良好	良好	
476	弥生土器 甕		にぶい黄橙色(10YR7/4)	良好	良好	
477	弥生土器 甕		①にぶい褐色(7.5YR5/4) ②橙色(5YR6/6)	良好	堅緻	
478	弥生土器 甕		①にぶい赤褐色(2.5YR4/3) ②赤色(10YR5/6)	不良	やや不良	
479	弥生土器 甕		にぶい黄橙色(10YR7/3)	良好	良好	
480	弥生土器 甕		橙色(2.5YR7/6)	精良	堅緻	口縁部に穿孔
481	弥生土器 甕		①にぶい橙色(5YR6/4) ②にぶい黄橙色(10YR7/3)	精良	堅緻	跳ね上げ口縁
482	弥生土器 甕		灰褐色(5YR5/2)	精良	堅緻	跳ね上げ口縁
483	弥生土器 甕		①赤褐色(10R6/8) ②橙色(5YR7/6)	やや不良	やや不良	

吉田構内本部2号館新営に伴う発掘調査

法量( )は復原値

番号	器種	法量 (cm) (①口径②底径③器高)	色調 (①外面 ②内面)	胎土	焼成	備考
484	弥生土器 甕	②(6.8)	浅黄橙色(10YR8/4)	良 好	良 好	底部に初痕
485	弥生土器 甕	②(7.0)	①にぶい橙色(7.5YR7/4) ②灰色(5Y5/1)	不 良	良 好	
486	弥生土器 甕	② 6.3	①橙色(2.5YR7/8) ②黒色(N2/0)	良 好	堅 緻	
487	弥生土器 甕	②(6.2)	①にぶい橙色(5YR7/4) ②灰色(7.5Y4/1)	精 良	良 好	
488	弥生土器 甕	② 5.2	①淡黄色(2.5Y8/3) ②灰色(5Y4/1)	やや不良	やや不良	
489	弥生土器 甕	② 7.2	①にぶい橙色(7.5YR6/4) ②にぶい黄橙色(10YR7/2)	良 好	やや不良	
490	弥生土器 甕	②(4.6)	淡黄色(2.5Y8/3)	良 好	やや不良	
491	弥生土器 甕	②(6.8)	にぶい橙色(7.5YR7/4)	不 良	良 好	
492	弥生土器 甕	②(4.4)	①にぶい橙色(5YR6/4) ②オリーブ黒色(5Y3/1)	良 好	良 好	
493	弥生土器 甕	②(5.6)	①赤褐色(5YR4/8) ②にぶい赤褐色(5YR4/4)	不 良	やや不良	
494	弥生土器 甕	②(5.9)	①にぶい橙色(5YR6/4) ②にぶい黄橙色(10YR7/3)	良 好	良 好	
495	弥生土器 甕	②(6.4)	①浅黄橙色(10YR8/4) ②にぶい黄橙色(10YR7/3)	精 良	やや不良	
496	弥生土器 甕	②(1.9)	①浅黄橙色(10YR8/4) ②黄灰色(2.5Y6/1)	良 好	良 好	
497	弥生土器 高坏		①にぶい橙色(5YR7/4) ②浅黄橙色(7.5YR8/4)	良 好	やや不良	
498	弥生土器 高坏		にぶい橙色(5YR6/4)	良 好	良 好	
499	弥生土器 高坏		にぶい黄橙色(10YR7/4)	精 良	不 良	
500	弥生土器 高坏		①淡橙色(5YR8/4) ②浅黄橙色(10YR8/4)	やや不良	やや不良	
501	弥生土器 高坏	②(20.1)	①浅黄橙色(10YR8/3) ②にぶい黄橙色(10YR7/3)	良 好	良 好	
第2・3層 (Fig. 89)						
504	土師器 坏	①14.0 ② 6.5 ③ 4.8	橙色(5YR6/6)	良 好	やや不良	
505	土師器 皿	①13.1 ②4.75 ③3.1	淡赤橙色(2.5YR7/4)	良 好	良 好	
506	土師質土器 鍋		橙色(5YR7/6)	良 好	良 好	
507	白磁 碗		素地-灰白色(10Y8/1) 釉調-明緑灰色(7.5GY8/1)			玉緑

法量( )は現存値

番号	器種	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	石質	備考
Aトレンチ (Fig. 51)							
31	打製石斧	10.2	8.3	4.4	385.6	硬質砂岩	
32	石製円板	6.0	5.95	0.95	49.3	角閃石安山岩	
33	二次加工のある剥片	2.0	1.75	0.4	0.56	西九州(腰岳)産黒曜石	
Bトレンチ (Fig. 52)							
47	打製石斧	10.45	5.0	1.8	100.2	緑色片岩	
48	磨製石斧	(7.9)	(4.7)	(3.6)	149.3	結晶質凝灰岩	
54	紡錘車	4.05		7.5	23.1	滑石片岩	穿孔外径0.65cm
第1号土壙 (Fig. 59)							
118	紡錘車	5.4		0.8	35.2	滑石片岩	
第2号土壙 (Fig. 62)							
141	扁平打製石斧	10.35	6.2	1.15	98.0	緑色片岩	
142	砥石	(7.5)	(6.3)	(5.0)	248.7	花崗岩	仕上げ砥
第1号溝 (Fig. 72・73)							
209	砥石	(6.1)	8.8	4.3	311.2	花崗岩	円礫素材

出土遺物観察表

法量 ( ) は現存値

番号	器種	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	石質	備考
211	石臼	(28.3)	(16.9)	9.5	6430	砂岩	
柱穴 (Fig. 75)							
230	砥石	(8.4)	5.65	3.7	299.7	流紋岩質溶結凝灰岩	P8 仕上げ砥
第5層 (Fig. 81~83)							
374	石製模製品 盾形	8.25	4.85	1.9	86.3	滑石	穿孔径 0.2cm
375	石製模製品 斧形	5.75	4.25	0.9	42.9	滑石	穿孔径 0.5×0.3cm
376	石製模製品 斧形	5.5	3.75	0.75	30.0	滑石	
377	石製模製品 斧形	6.2	3.45	0.7	27.6	滑石	穿孔径 0.4cm
378	石製模製品 斧形?	7.95	3.6	0.9	39.0	滑石	
379	石製模製品 円板	4.3	3.95	1.0	29.2	滑石	
380	石製模製品 円板	3.5		0.35	7.5	滑石	穿孔径 0.3cm
381	石製模製品 円板	3.1		0.3	5.6	滑石	穿孔径0.25cm
382	石製模製品 円板	3.3		0.45	6.2	滑石	穿孔径 0.2cm
383	石製模製品 円板	1.9		0.35	1.7	滑石	穿孔径 0.4×0.3cm
384	石製模製品 鎌形	3.85	1.5	0.3	3.3	滑石	穿孔径 0.15cm
385	磨製石庖丁	(6.7)	4.65	0.8	37.0	讃岐岩質安山岩	
386	打製石庖丁	(5.3)	(3.2)	0.35	8.5	讃岐岩質安山岩	
387	石鎌	(6.85)	(3.2)	0.8	24.1	讃岐岩質安山岩	刃部局部磨製
388	敲石	11.7	10.15	6.25	956.9	花崗閃緑石	円礫の転礫
389	敲石	10.8	9.2	5.1	623.1	花崗岩	円礫の転礫
390	円板	8.0	7.85	0.9	80.1	結晶片岩	
391	石鎌	2.3	1.95	0.4	1.21	安山岩	剥片鎌 挟り深さ 0.2cm
392	石剣or石戈	(2.7)	(2.45)	(0.4)	3.0	デイサイト	
第6層 (Fig. 85)							
431	磨製石斧	(8.95)	(4.8)	1.45	100.3	緑泥石片岩	
432	砥石	(8.1)	(5.2)	1.6	89.3	角閃質安山岩	円転礫素材
第7層 (Fig. 88)							
502	打製石斧	14.0	11.5	4.7	884.1	泥岩ホルンフェルス	
503	砥石	(5.65)	(5.3)	4.8	187.4	花崗岩	

法量 ( ) は現存値

番号	器種	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	備考
第1号土壙 (Fig. 59)					
119	鉄鎌	(2.3)	0.35	0.4	茎
第1号溝 (Fig. 72)					
210	鉄釘		0.55	0.45	脚中位から大きく屈曲
第5層 (Fig. 83)					
393	板状鉄斧	4.65	4.35	0.7	刃部幅4.35cm
394	鉄鎌	(5.65)	1.0	0.5	茎
395	鉄鑿?	(12.85)	1.0	1.05	



吉田構内本部2号館新営に伴う発掘調査  
(1)



(1) 調査区遠景(北東から)



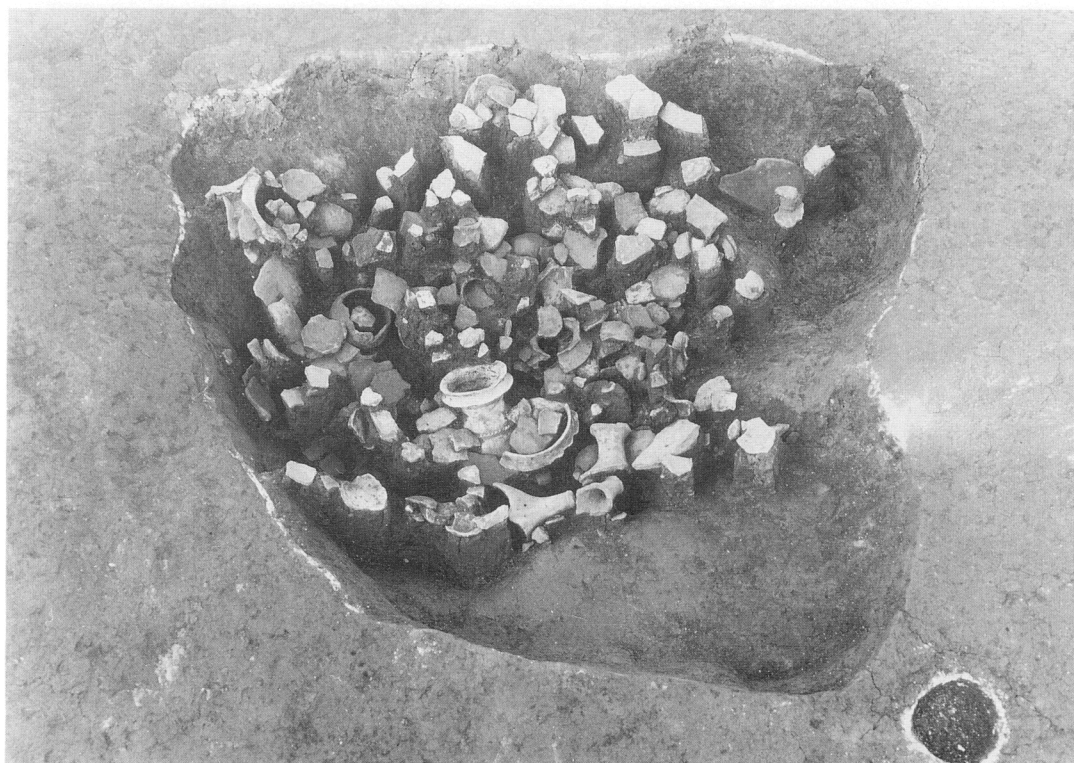
(2) Bトレンチ西壁土層断面(東から)



(3) Aトレンチ遺物出土状況(北から)



(1) 調査区全景(東から)



(2) 第1号土壙遺物出土状況(1)(南西から)

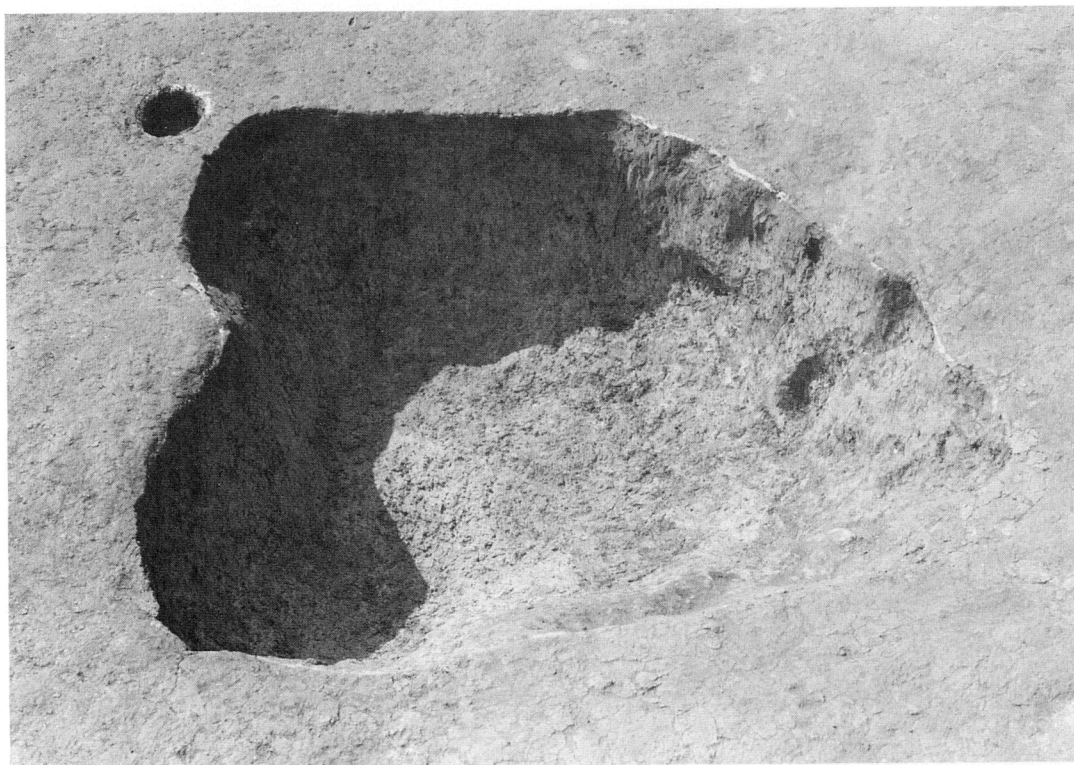
吉田構内本部2号館新宮に伴う発掘調査  
(3)



(1) 第1号土壙遺物出土状況(2) (南東から)

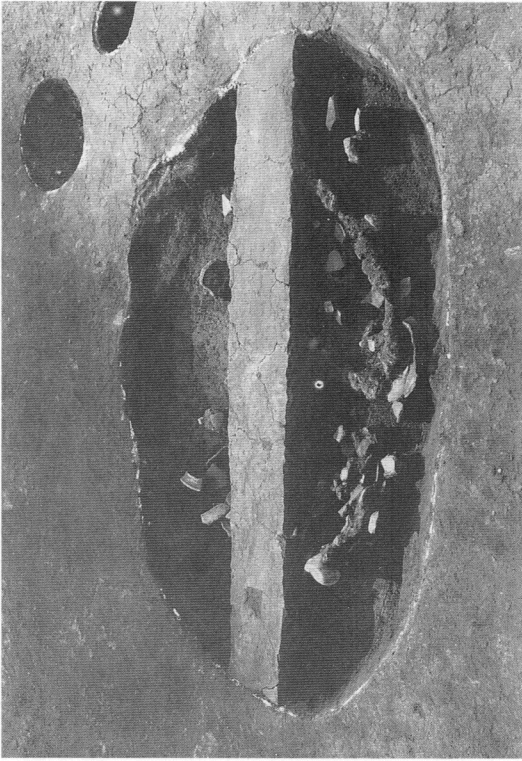


(2) 第1号土壙遺物出土状況(3) (東から)

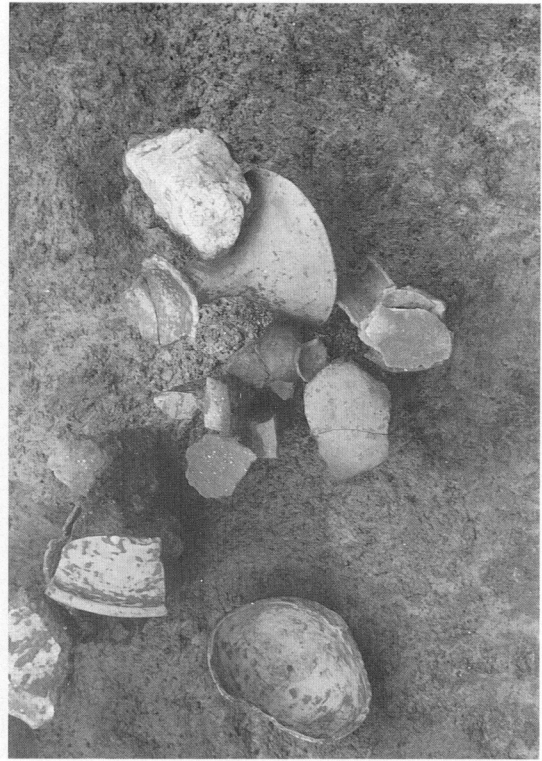


(3) 第1号土壙(北西から)





(1) 第2号土壙遺物出土状況(1)(北東から)

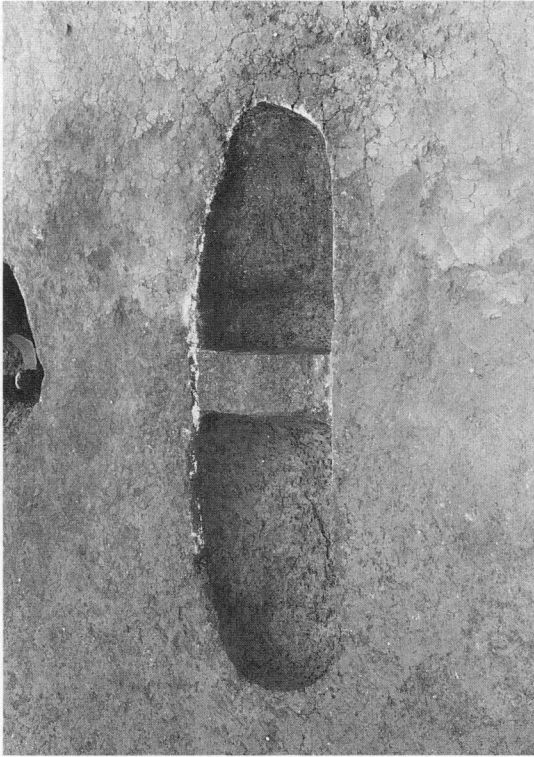


(2) 第2号土壙遺物出土状況(2)(北東から)

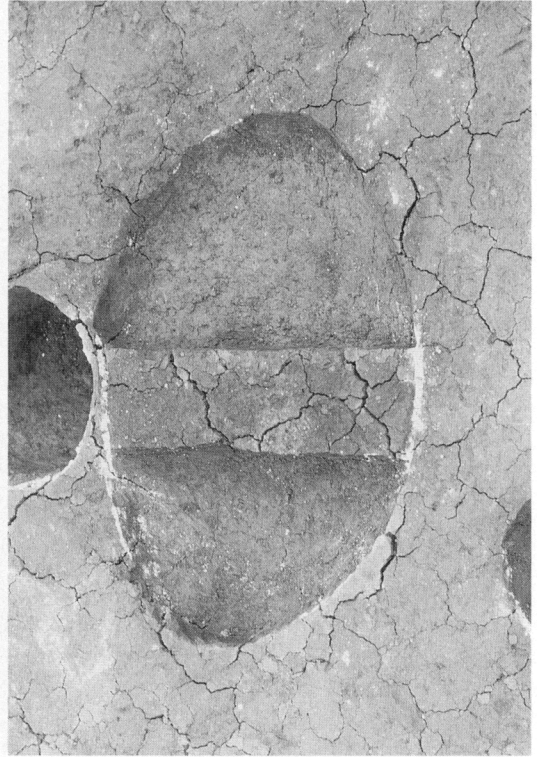


(3) 第2号土壙(北東から)

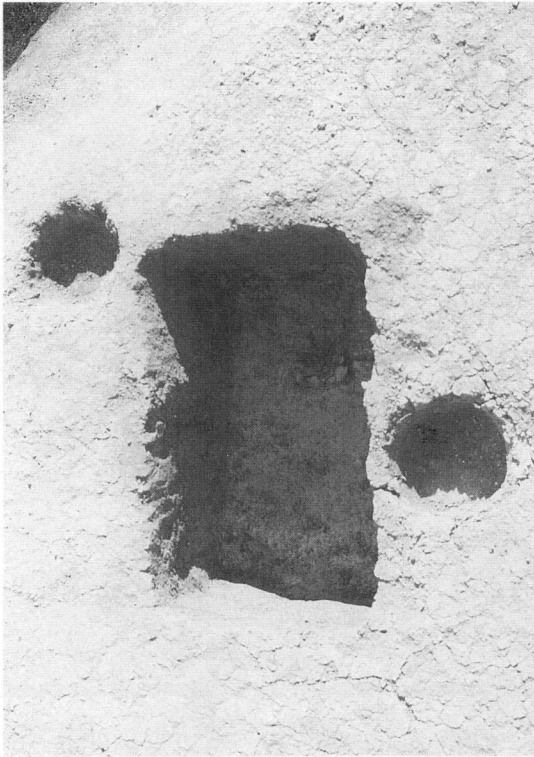
吉田構内本部2号館新営に伴う発掘調査  
(5)



(1) 第3号土壙(北東から)



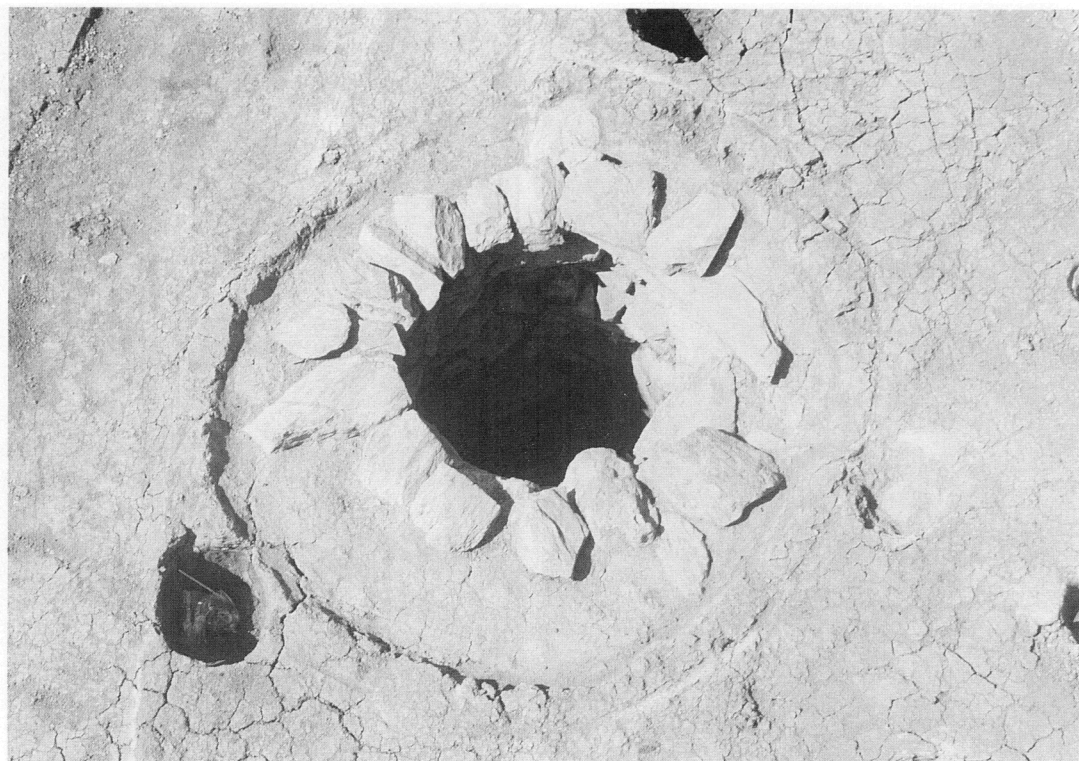
(2) 第4号土壙(北西から)



(3) 第5号土壙(北東から)



(4) 第5号土壙遺物出土状況(南西から)



(1) 第1号井戸(東から)

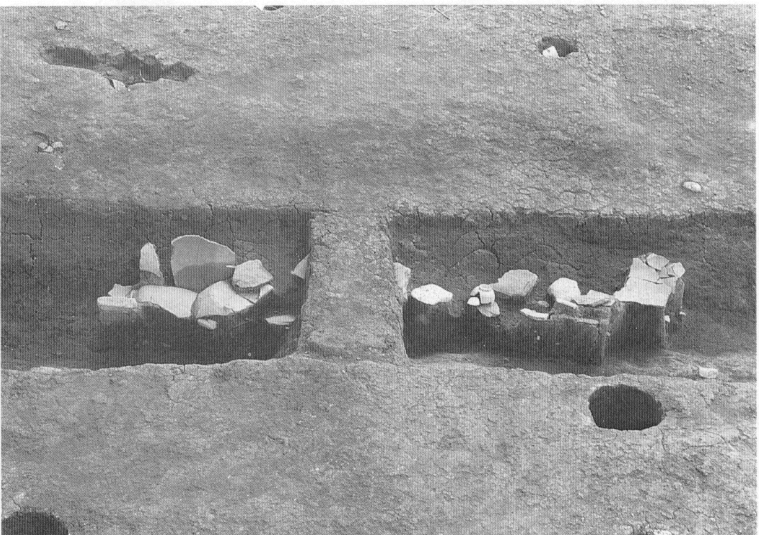


(2) 第1号井戸遺物出土状況(北から)

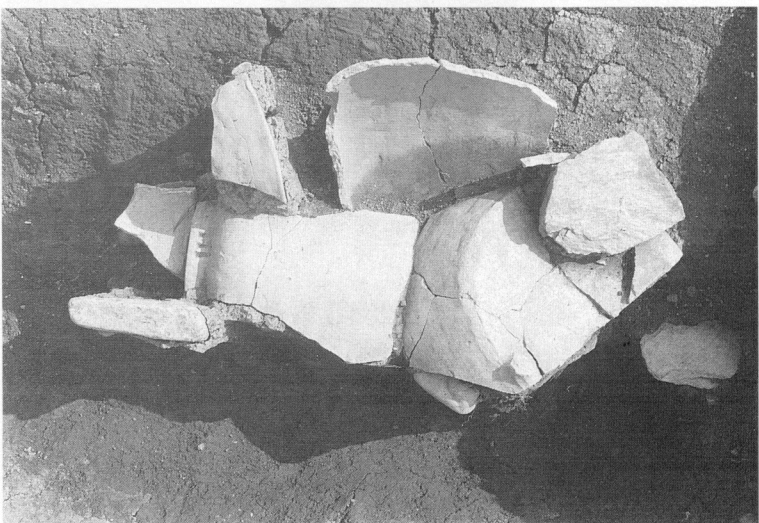


(3) 第1号井戸石組状況(北西から)

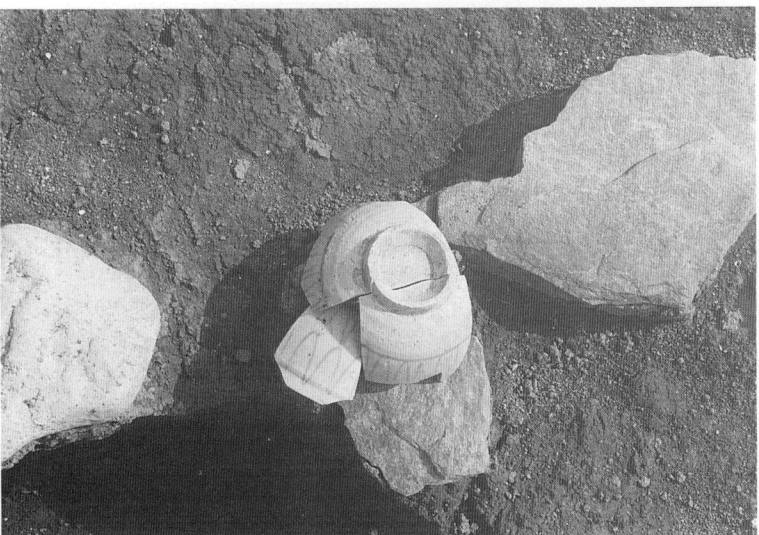




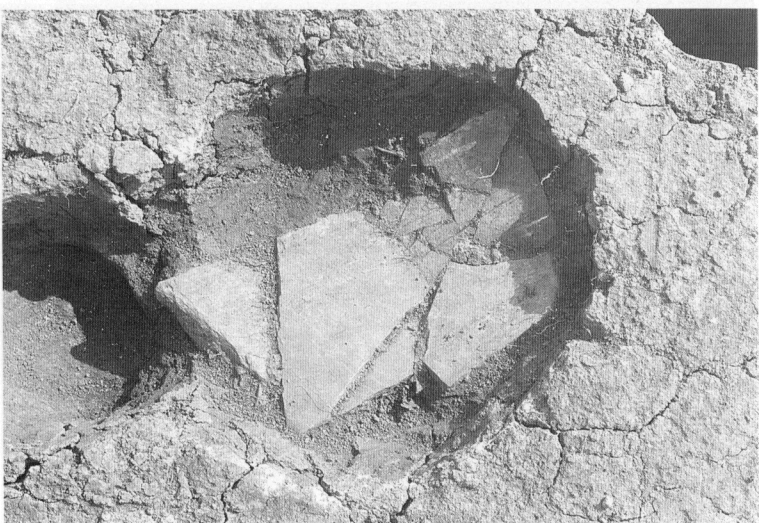
(1) 第1号溝遺物出土状況(1)(北西から)



(2) 第1号溝遺物出土状況(2)(北西から)



(3) 第1号溝遺物出土状況(3)(北西から)



(4) 柱穴根石検出状況(北から)



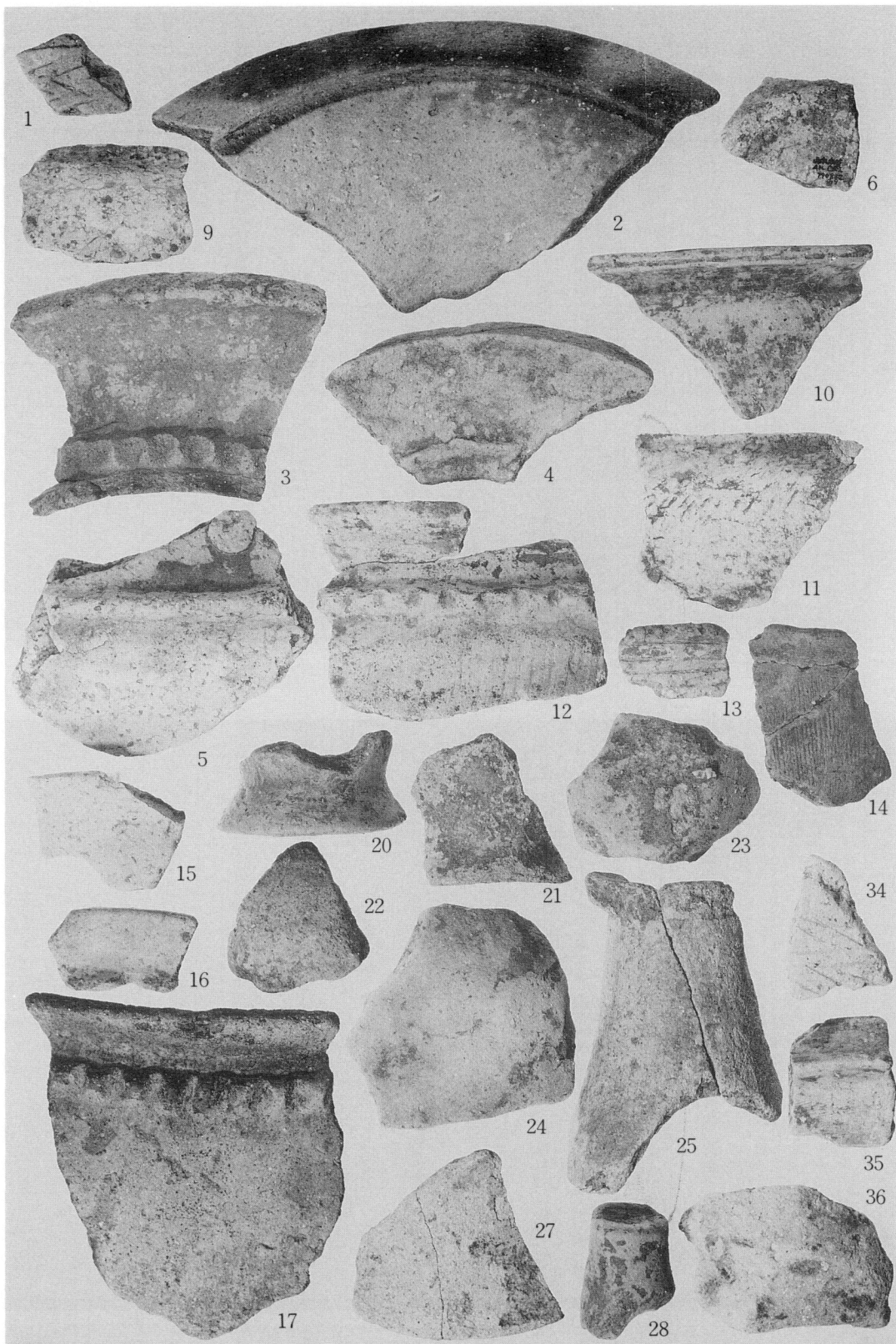
(1) 西壁南端部土層断面(東から)



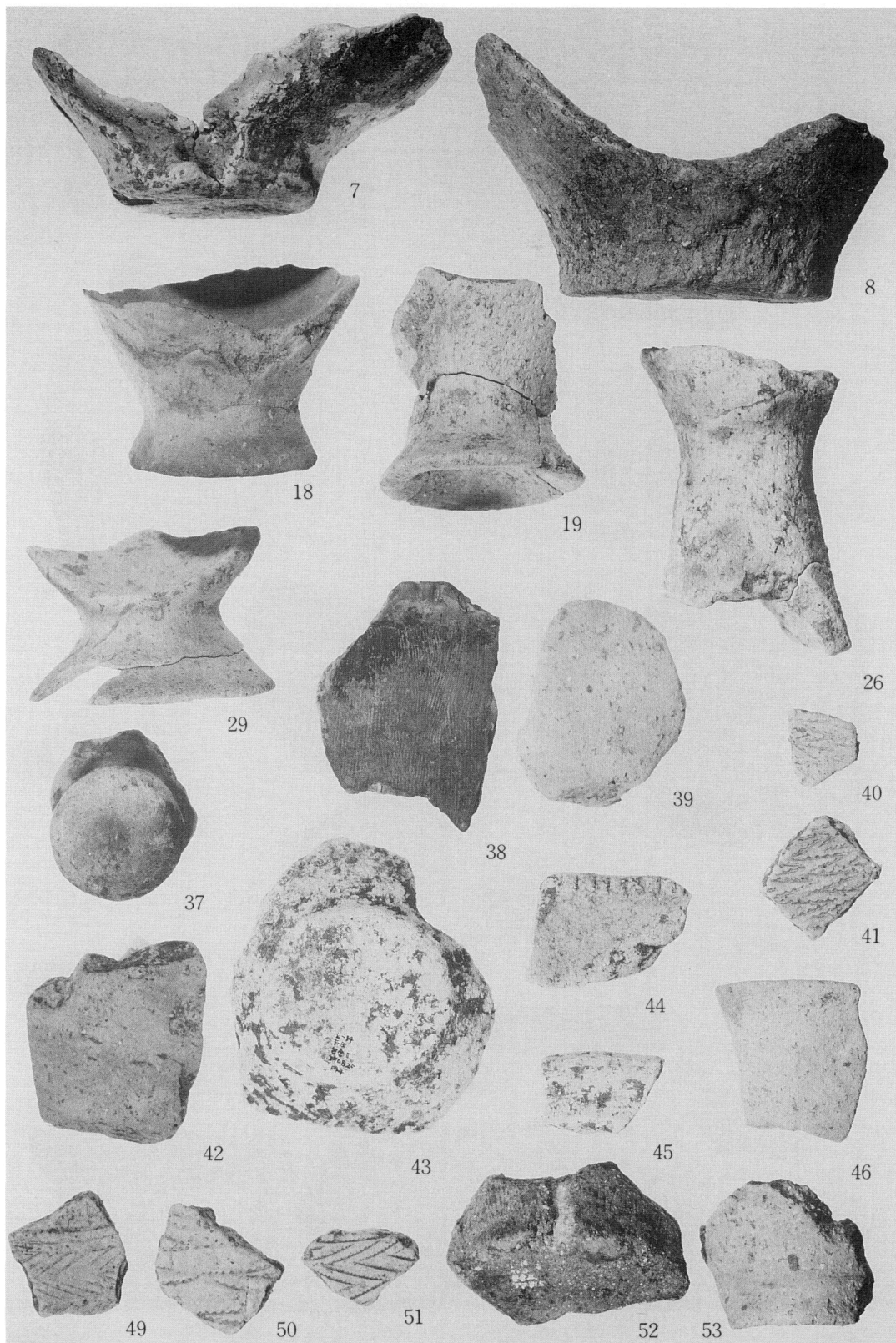
(2) 南壁西端部土層断面(北から)



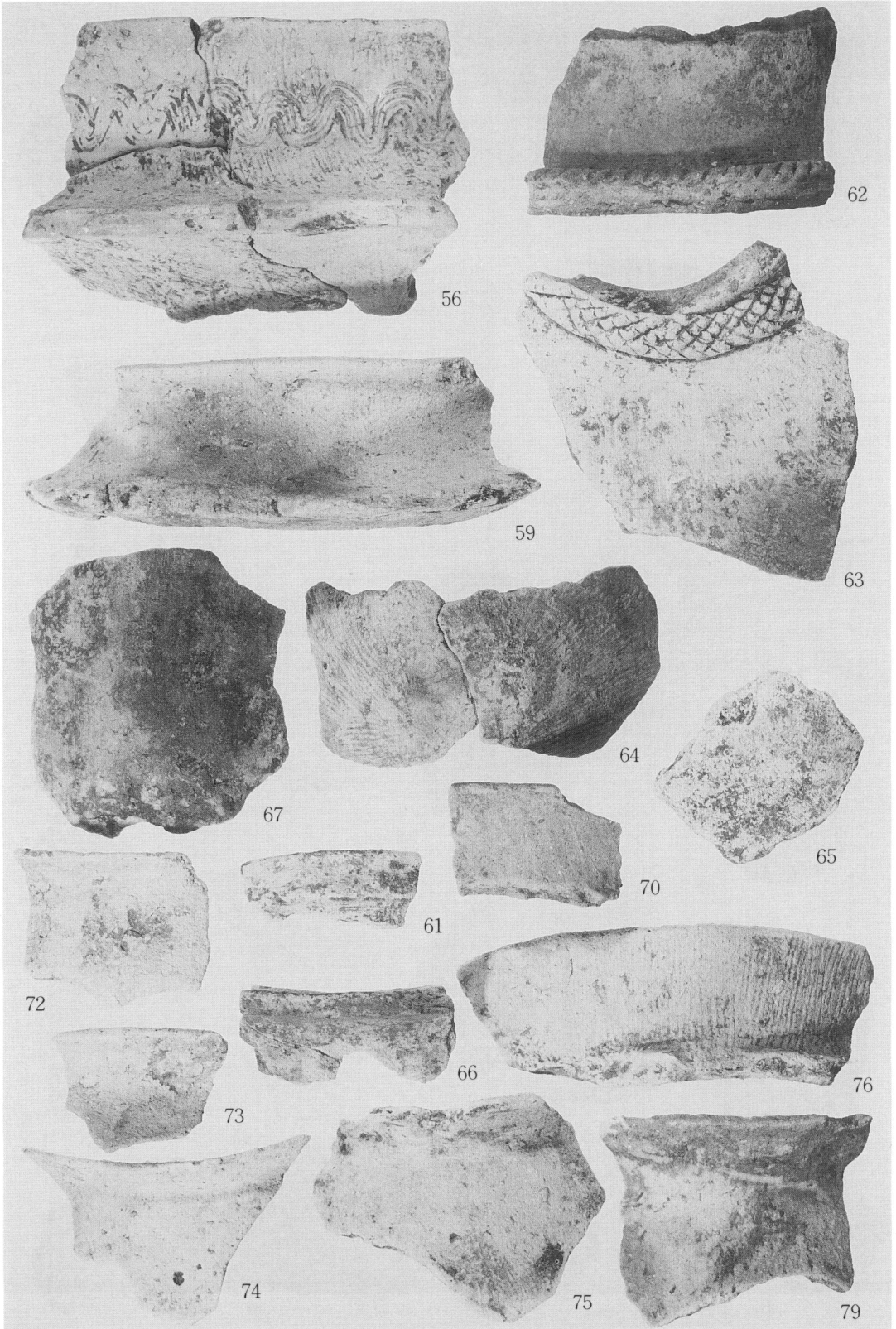
吉田構内本部2号館新営に伴う発掘調査  
(9)



出土遺物 (1)

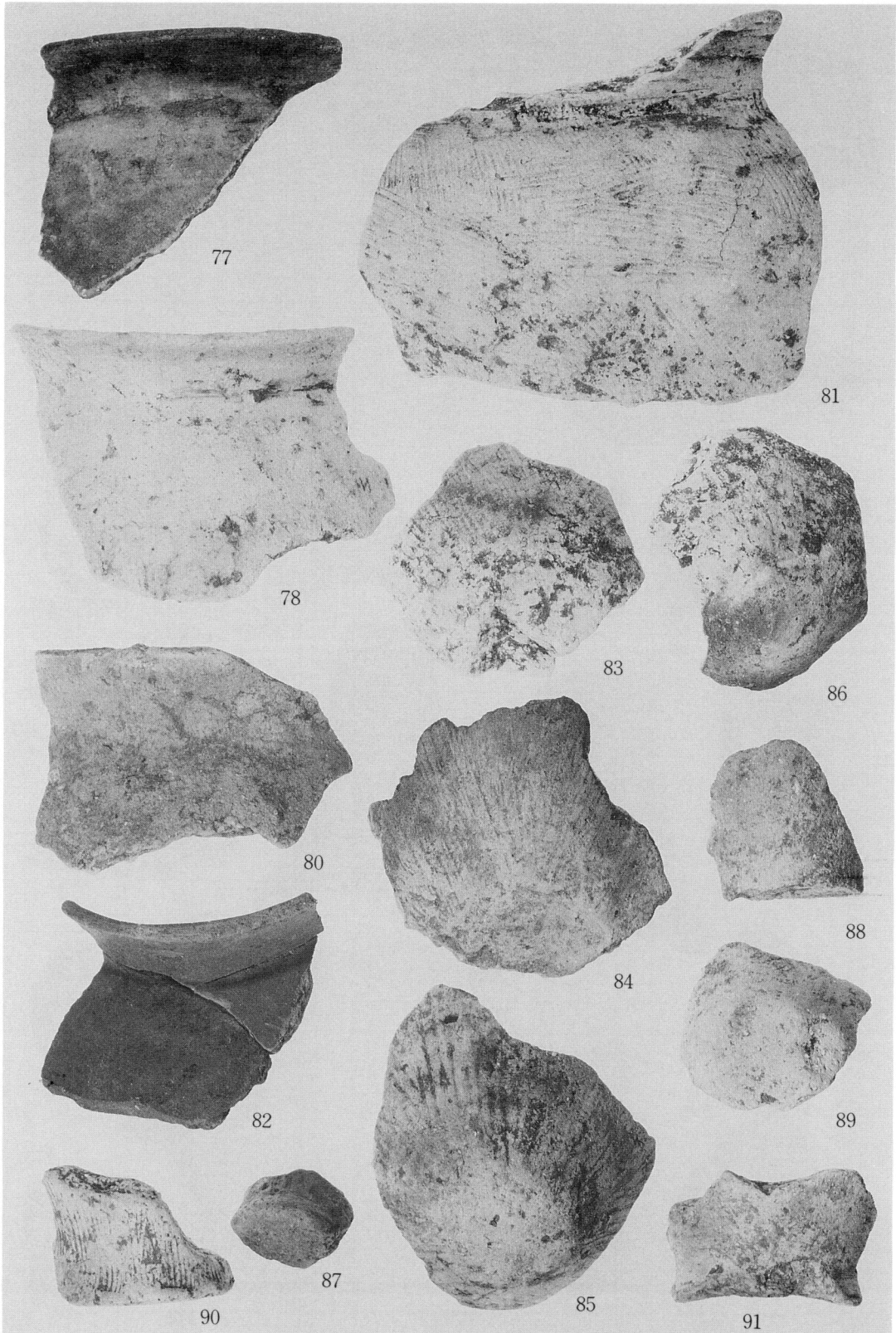


吉田構内本部2号館新宮に伴う発掘調査  
(11)



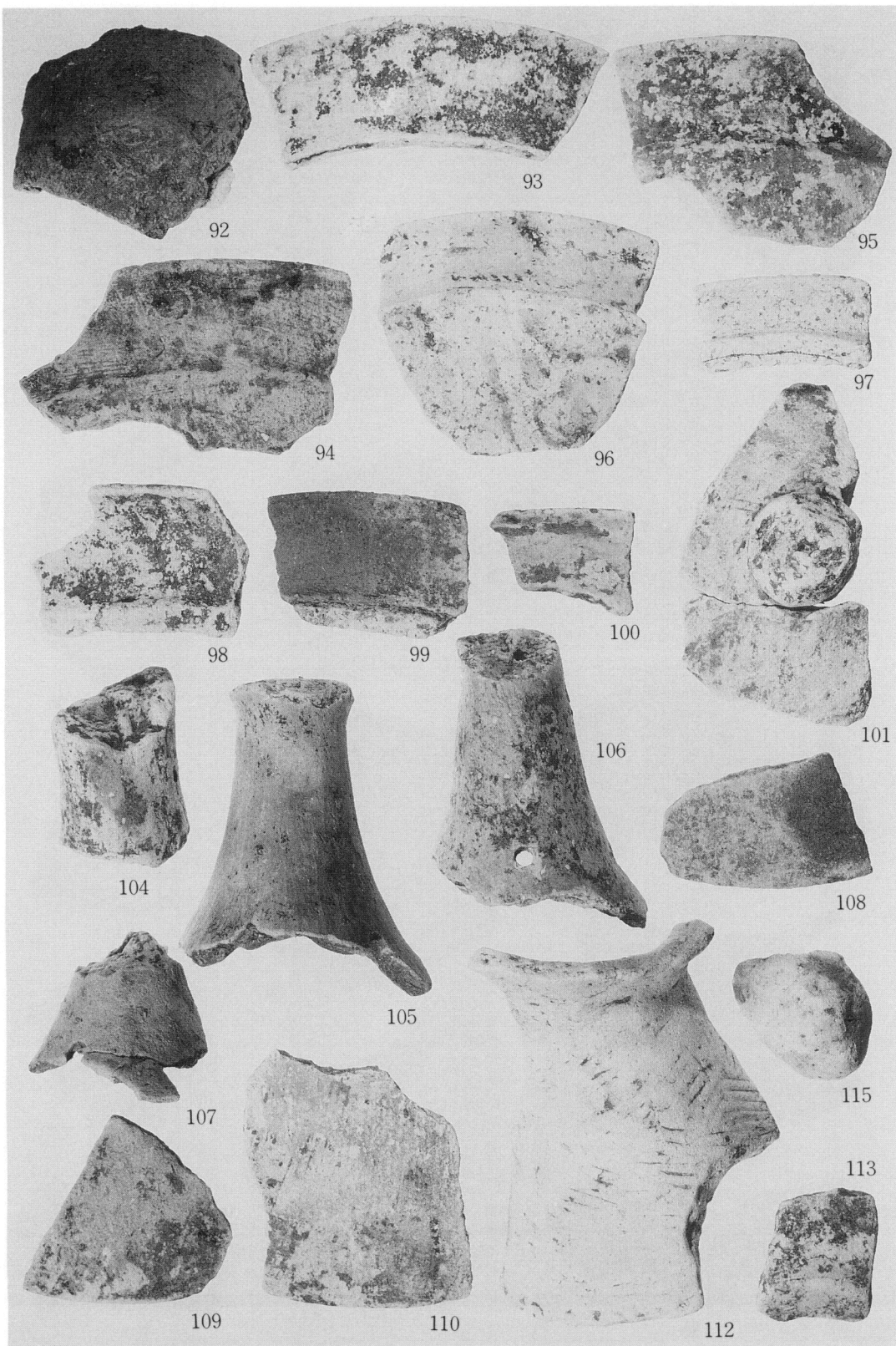
出土遺物 (3)

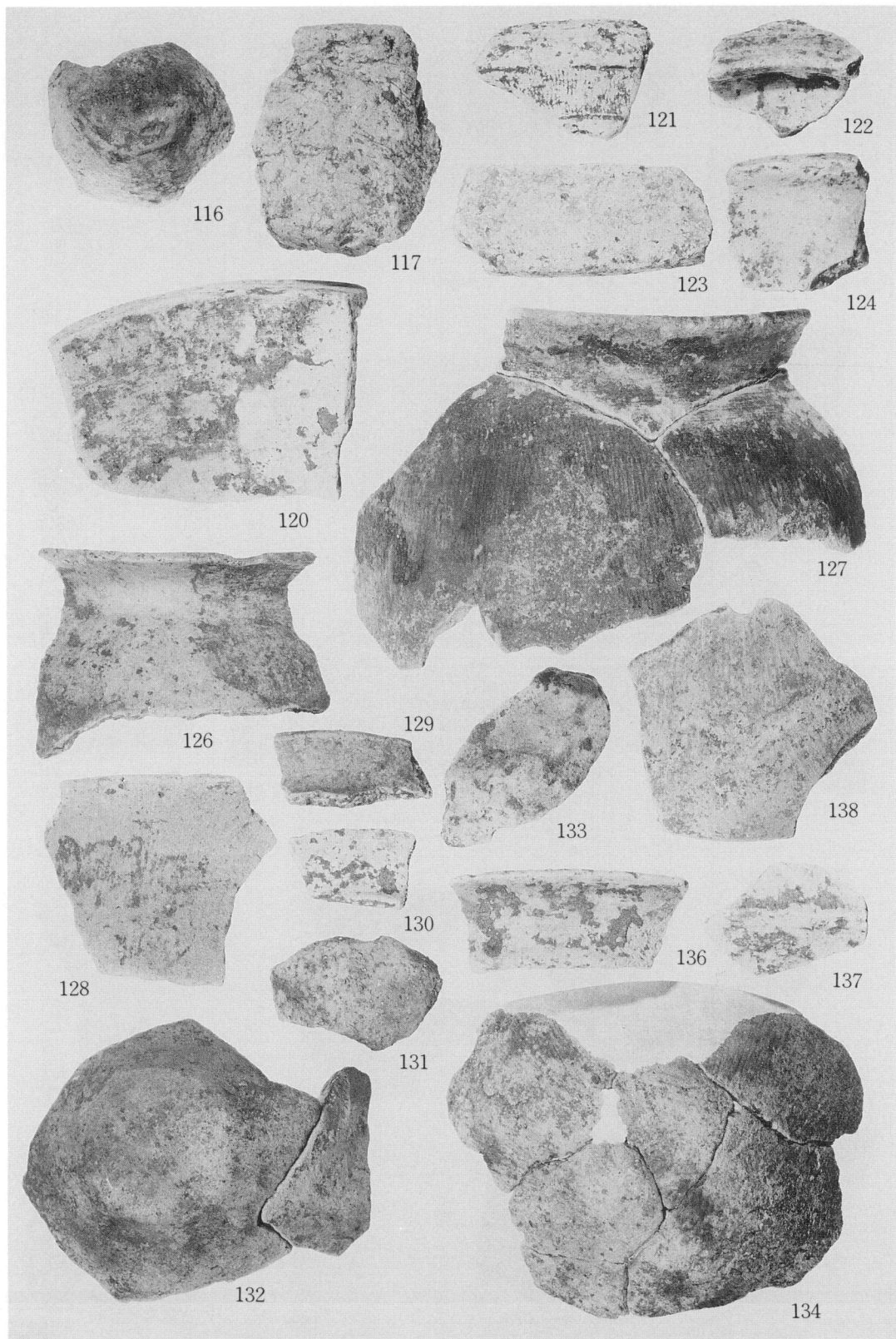




PL. 34

吉田構内本部2号館新営に伴う発掘調査  
(13)



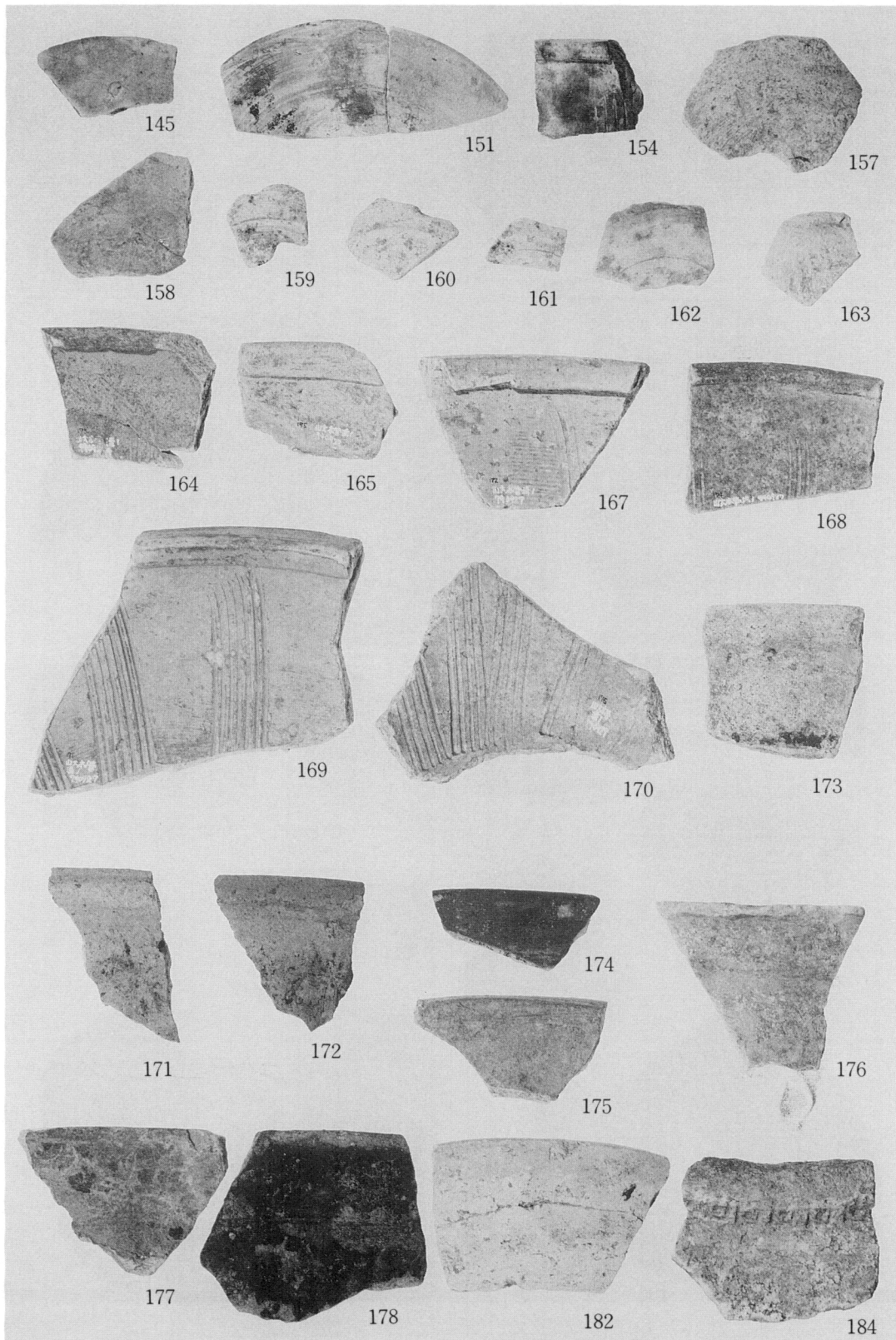




PL. 36

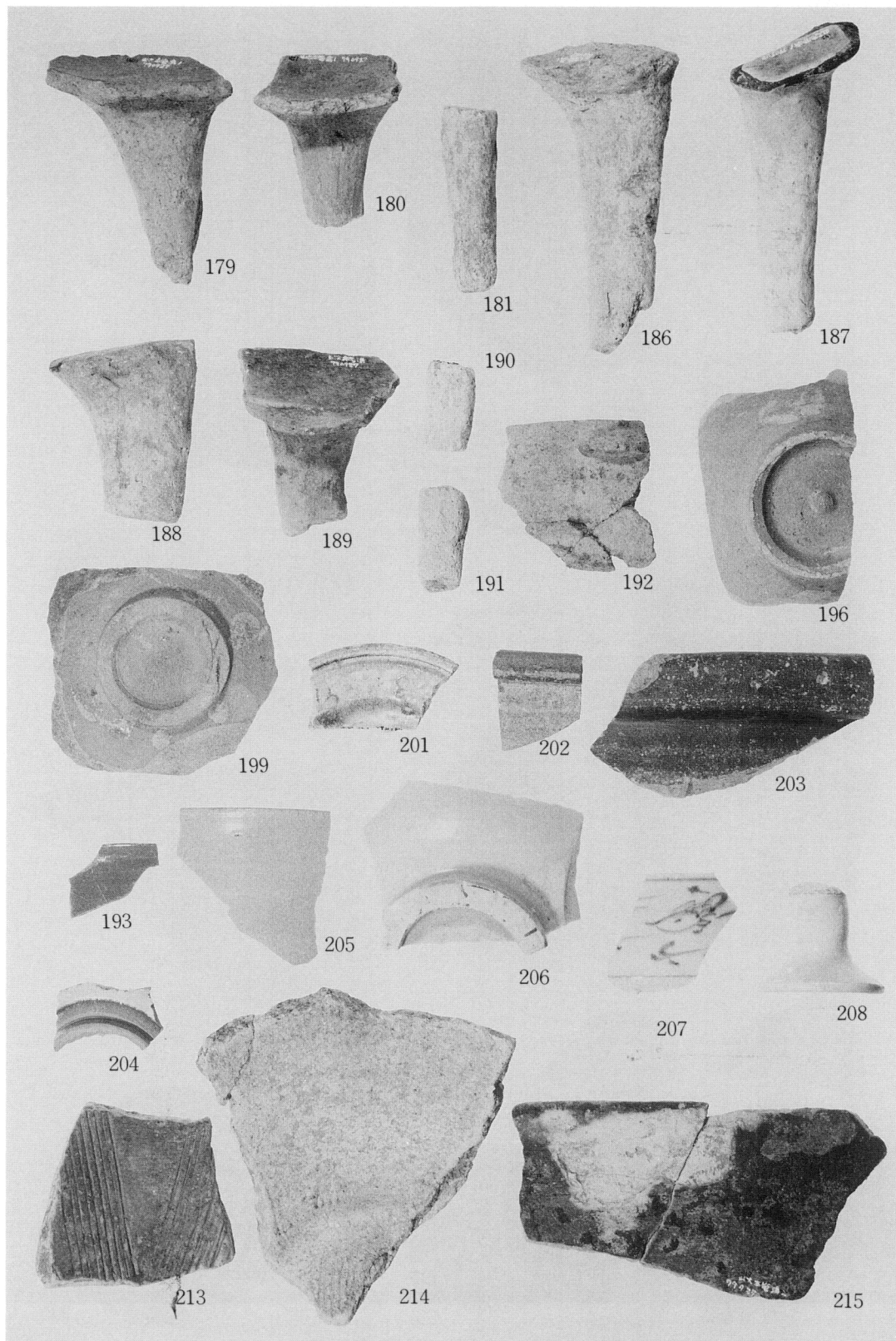
吉田構内本部2号館新営に伴う発掘調査

(15)



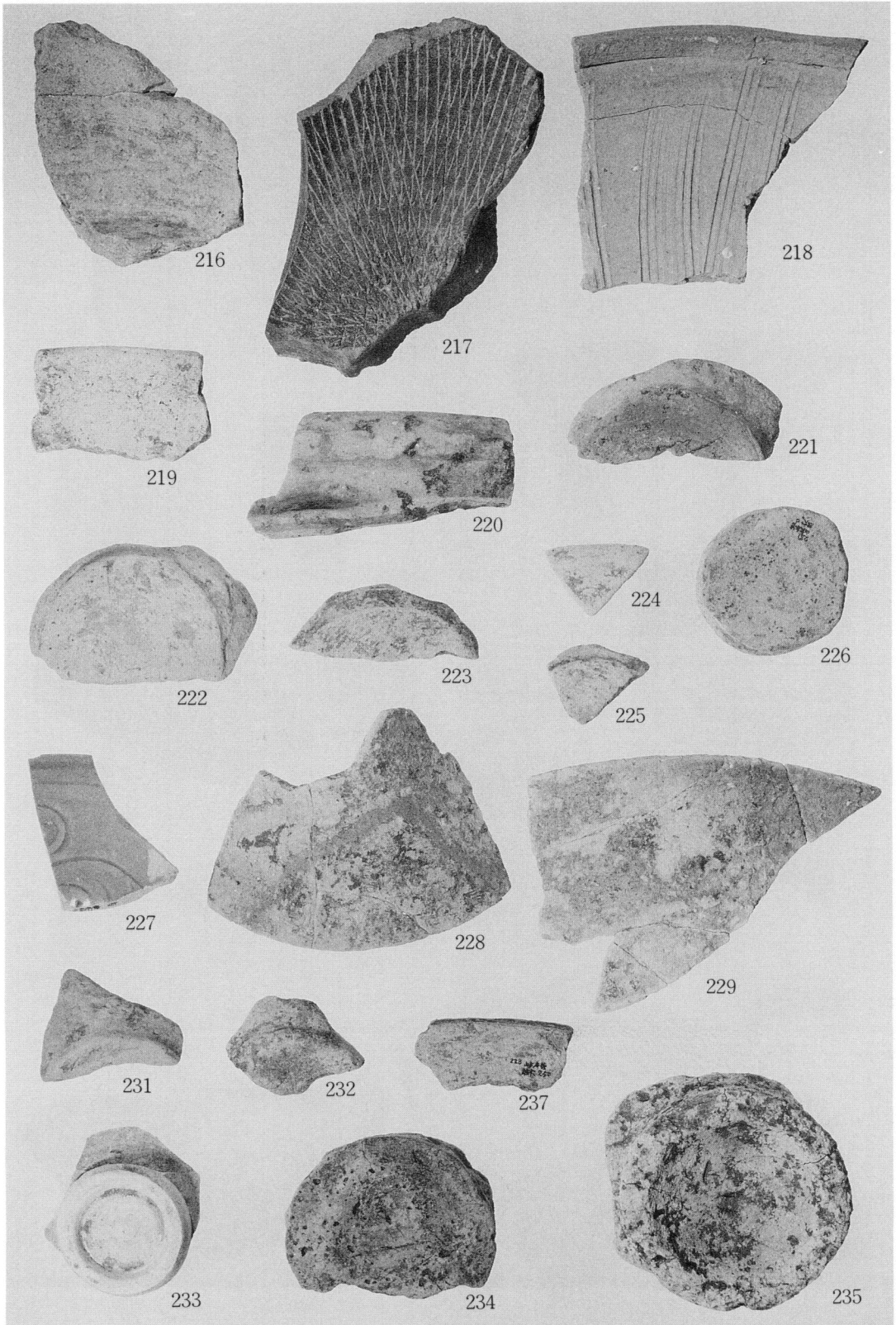
出土遺物 (7)

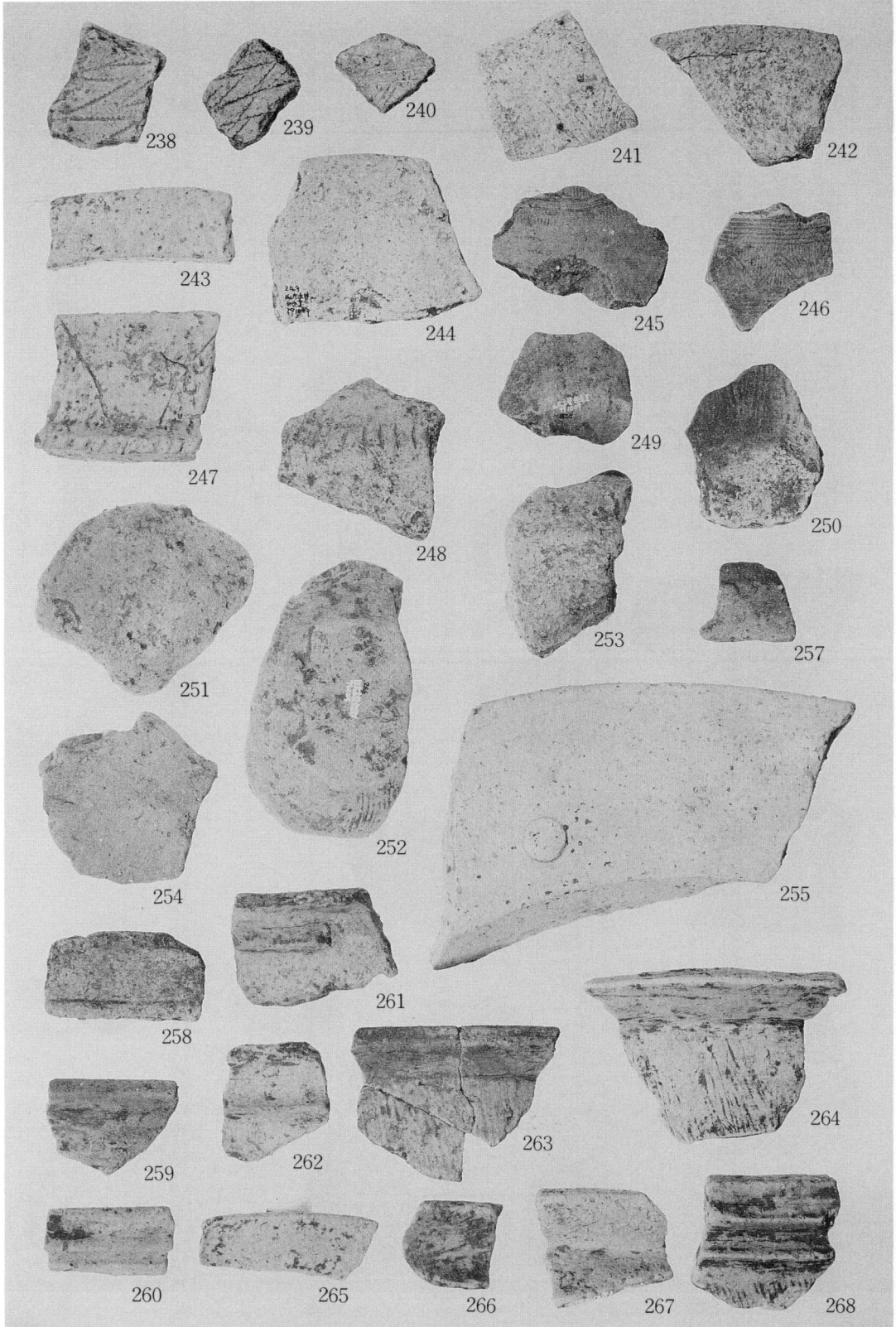
約 1 : 2





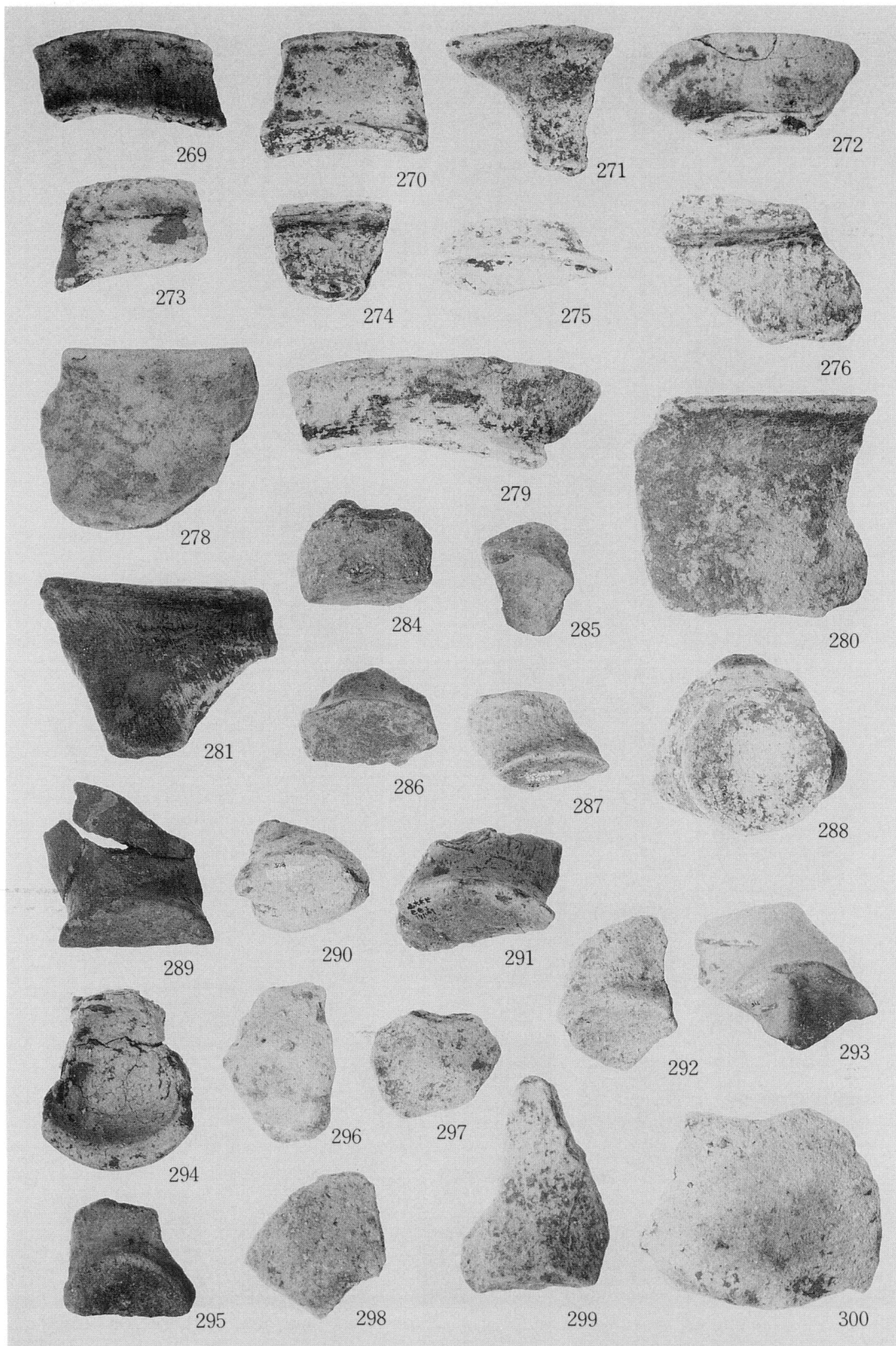
吉田構内本部2号館新宮に伴う発掘調査  
(17)



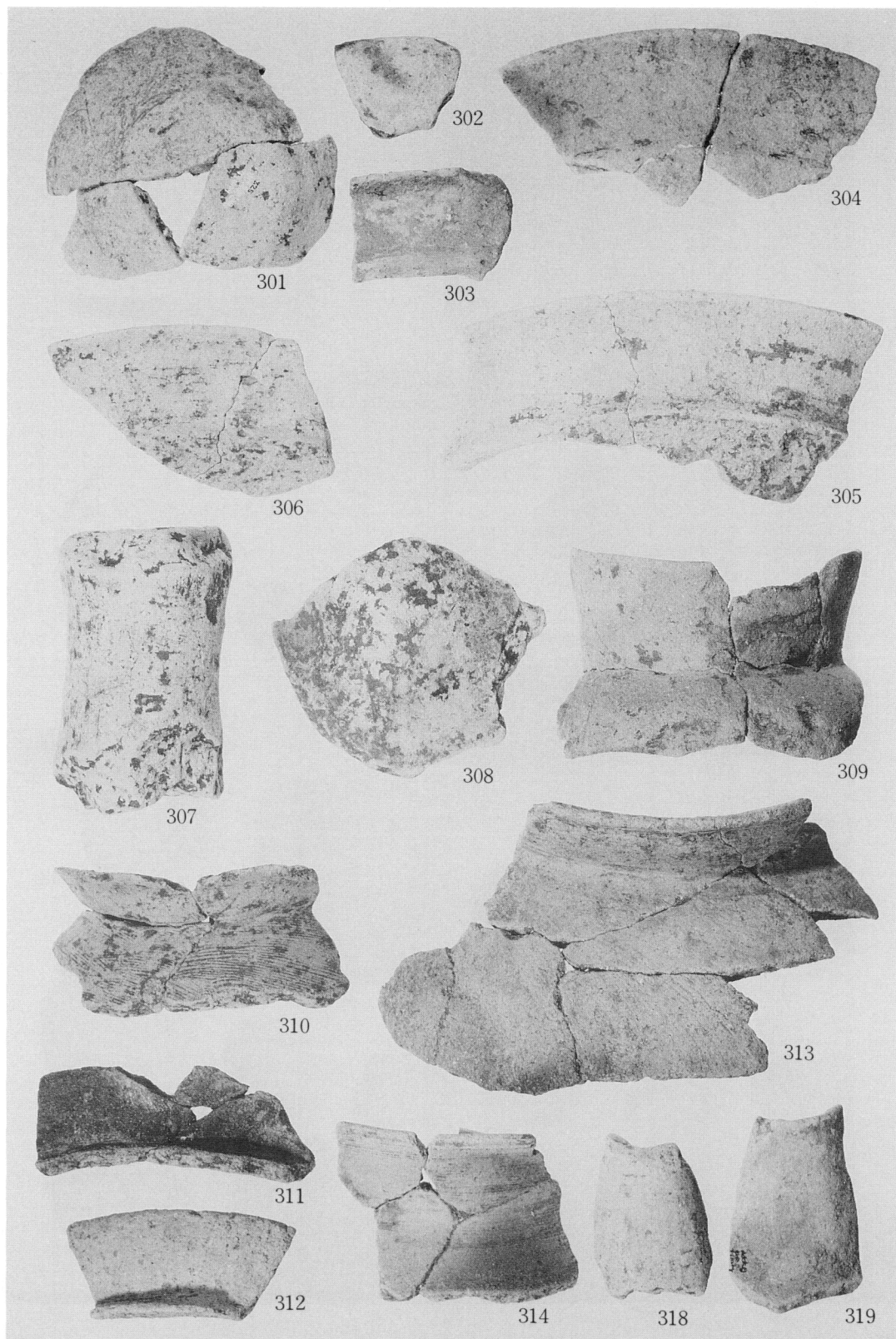


吉田構内本部2号館新営に伴う発掘調査

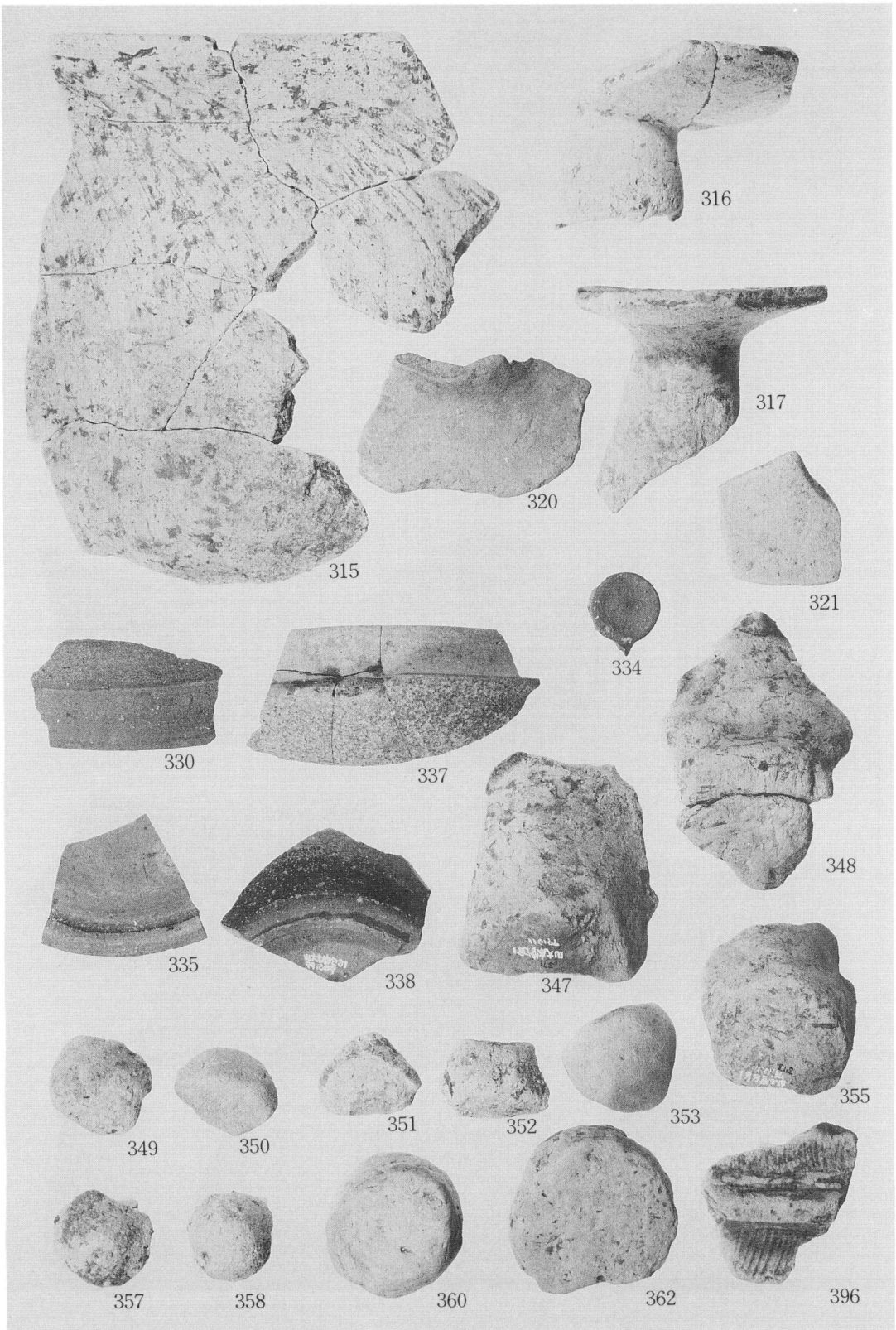
(19)

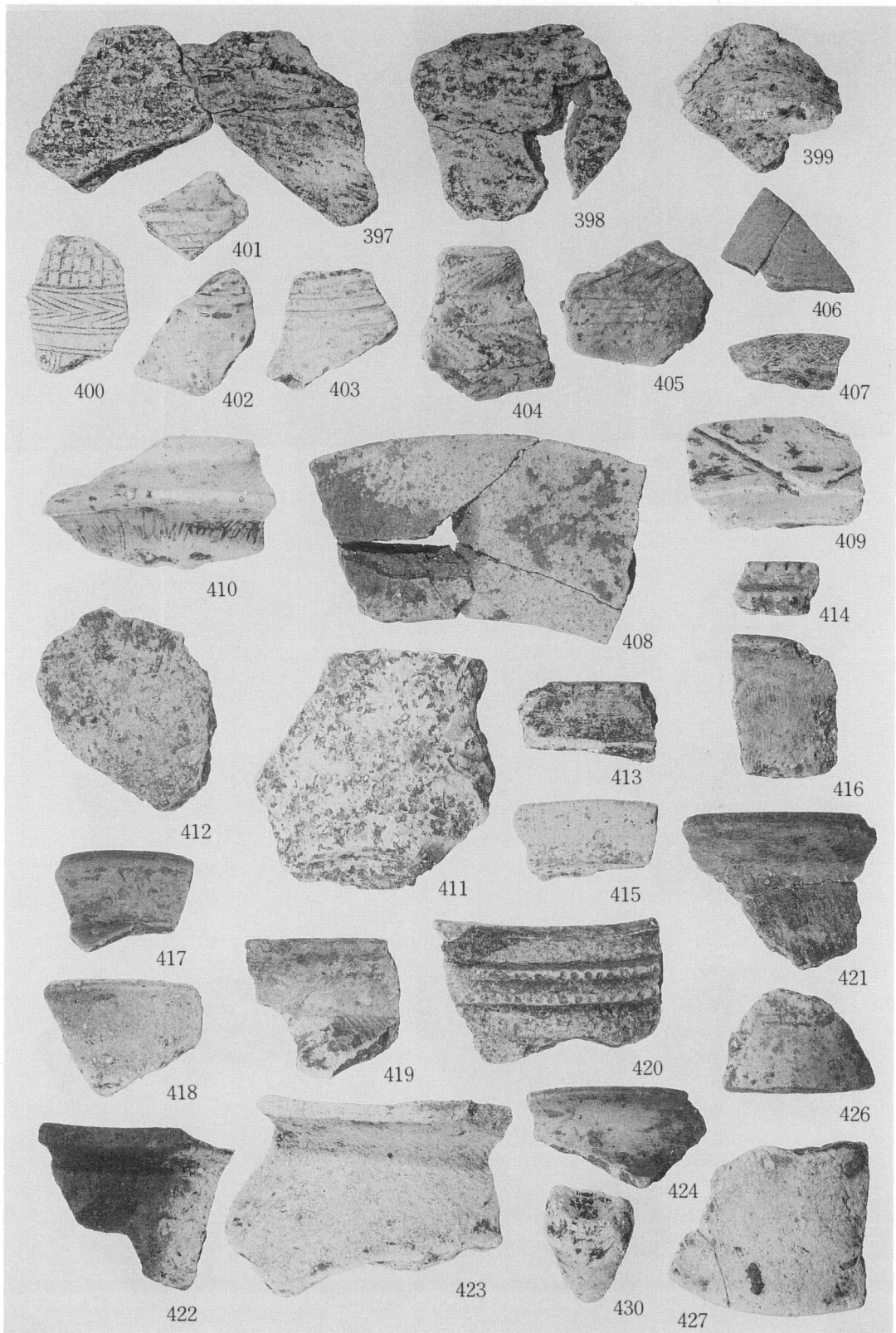






吉田構内本部2号館新営に伴う発掘調査  
(21)



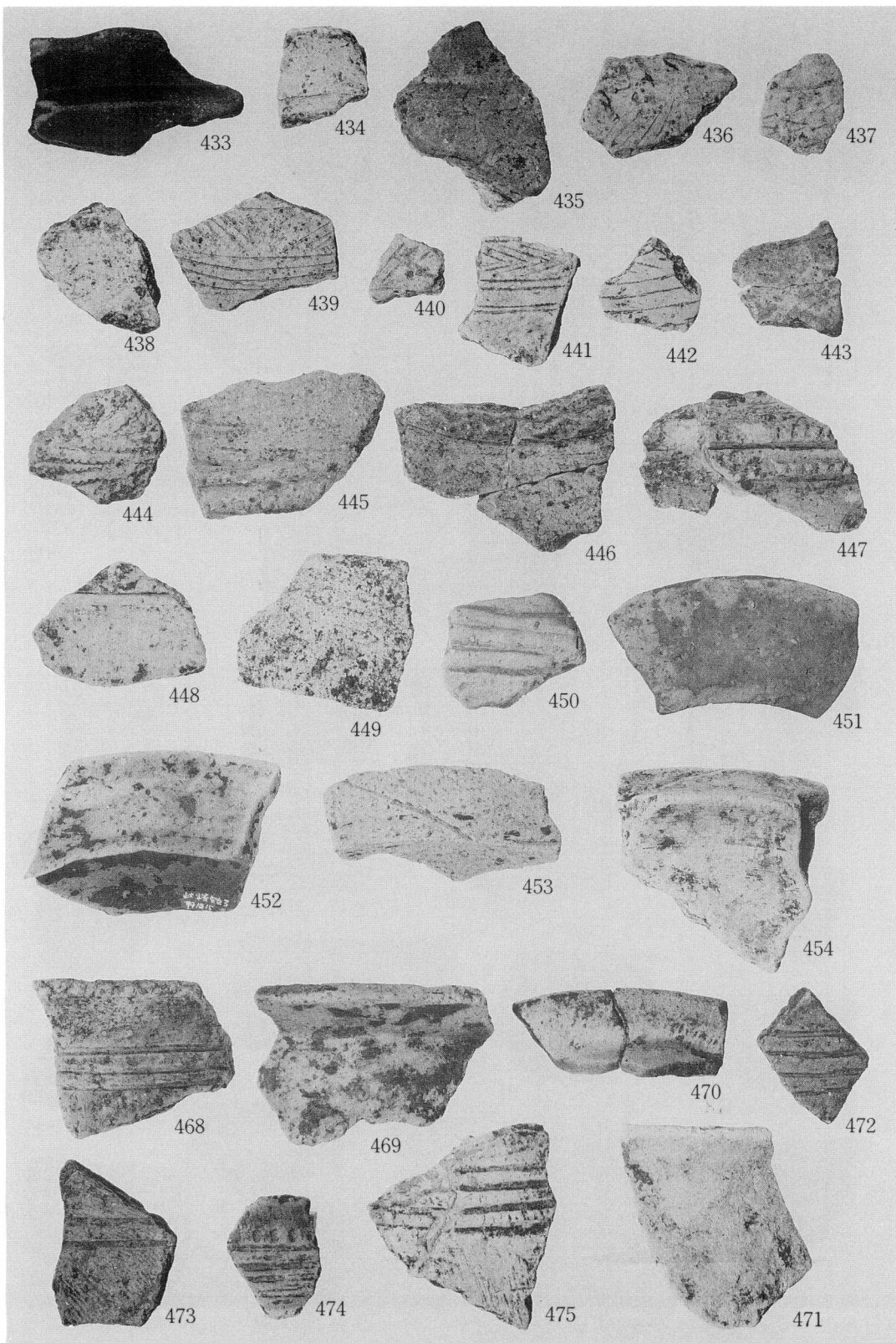


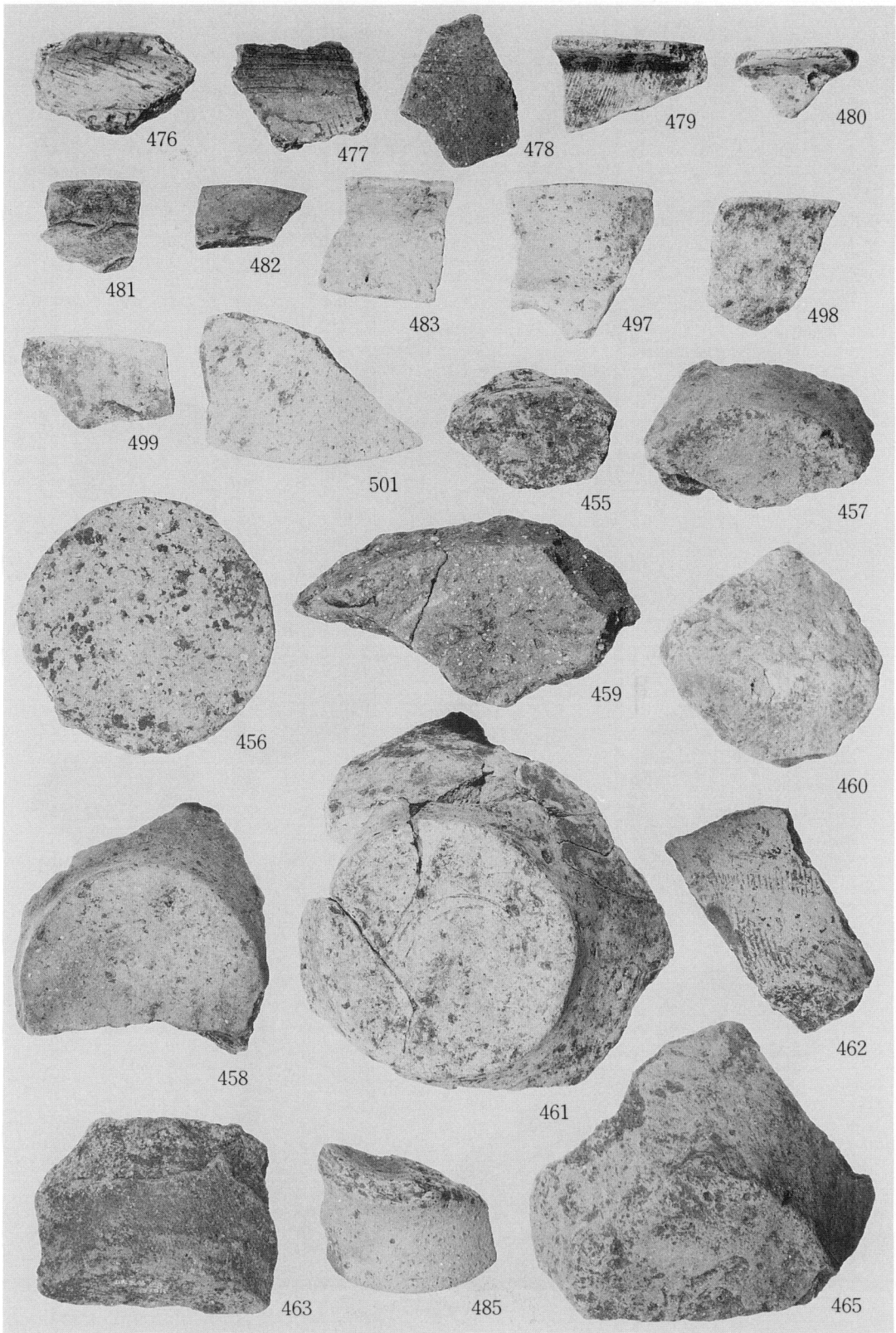


PL. 44

吉田構内本部2号館新宮に伴う発掘調査

(23)



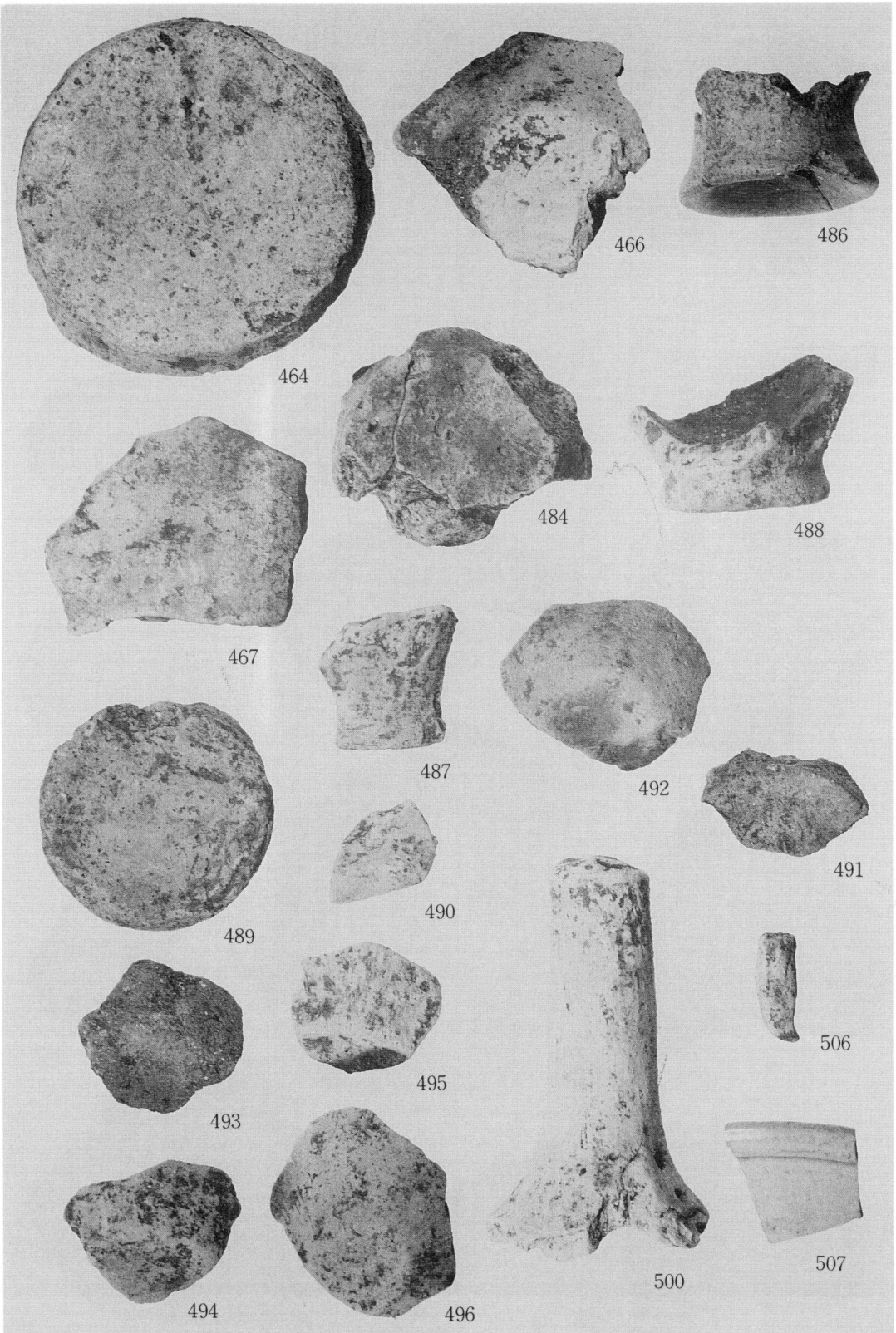


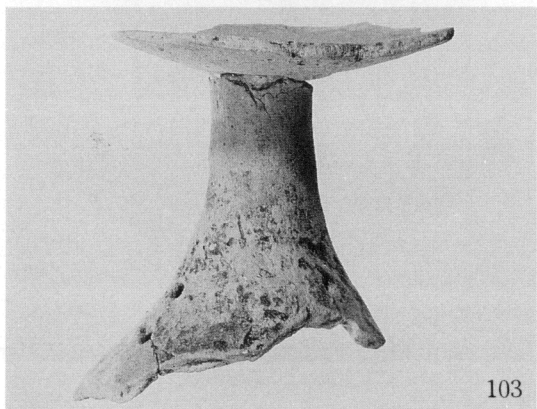
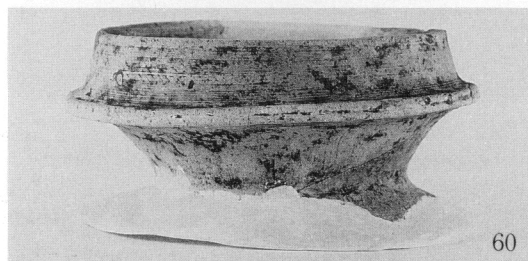
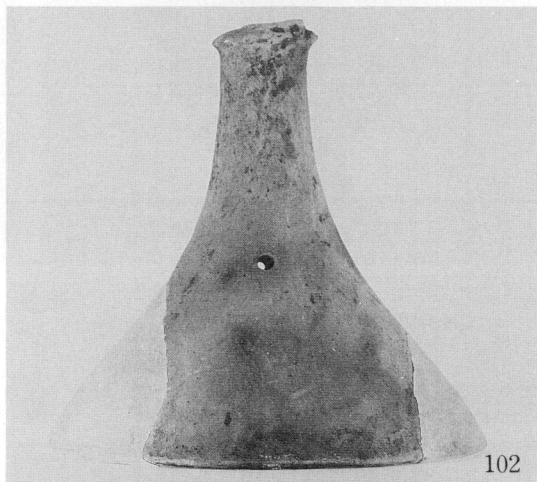
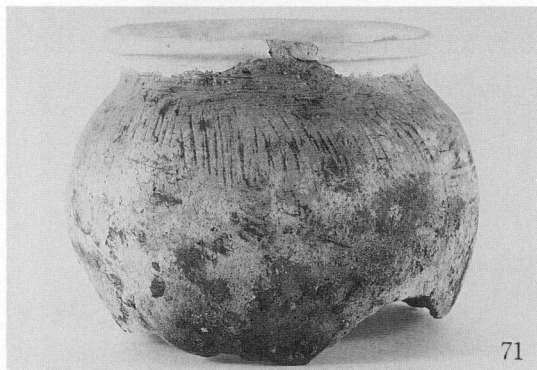
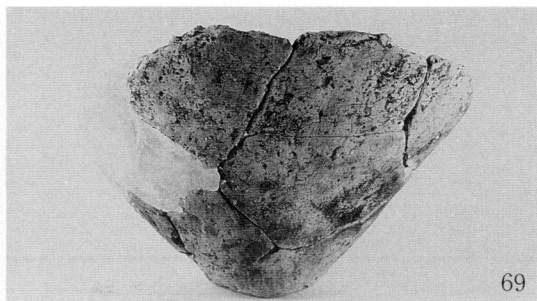
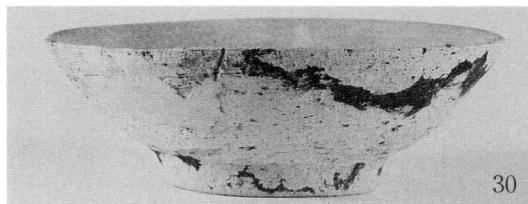


PL. 46

吉田構内本部2号館新営に伴う発掘調査

(25)



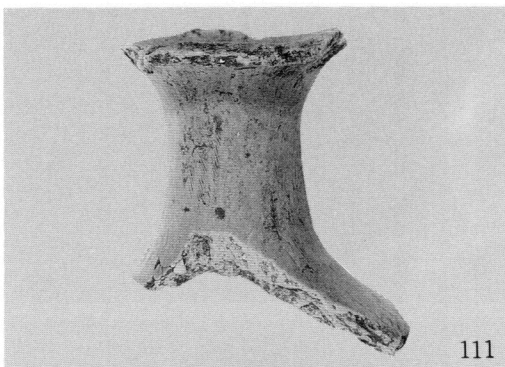


出土遺物 (18)

55…約2 : 3, 30…約1 : 2, 60・71・102・103…約1 : 3  
その他…約1 : 4

PL. 48

吉田構内本部2号館新営に伴う発掘調査  
(27)



111



125



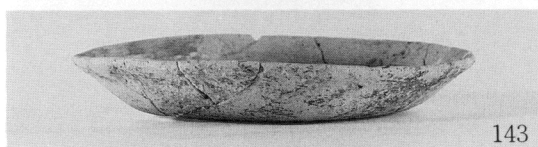
114



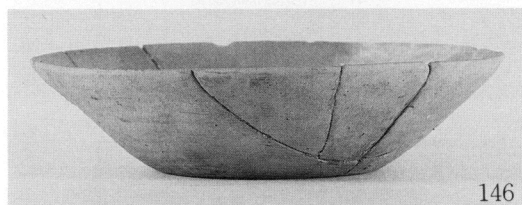
139



140



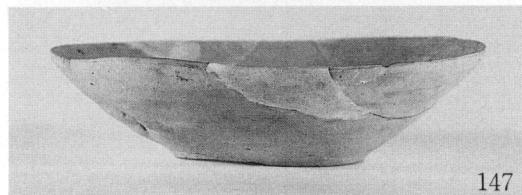
143



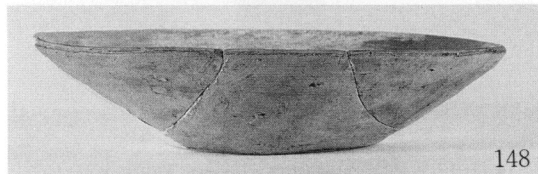
146



144



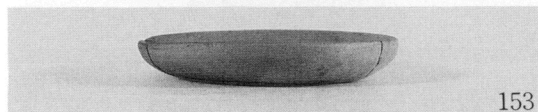
147



148



149



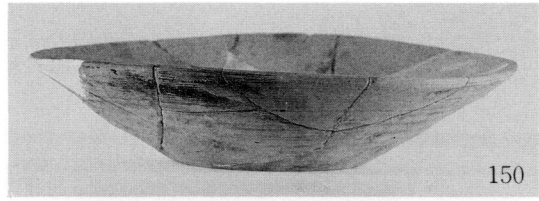
153

出土遺物 (19) 140…約2 : 3, 111・114・125・139…約1 : 3, その他…約1 : 2





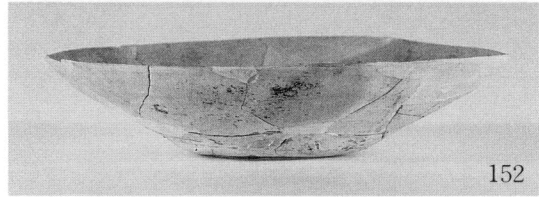
166



150



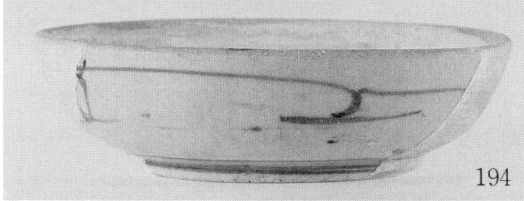
185



152



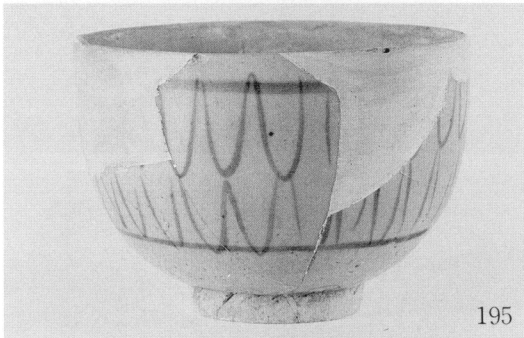
183



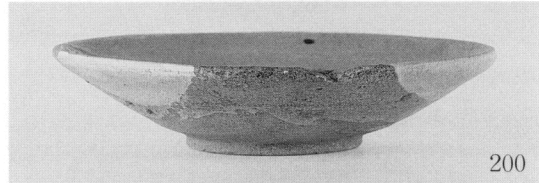
194



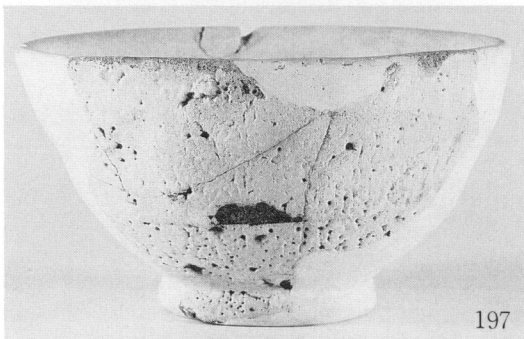
198



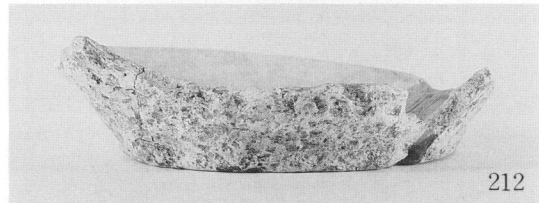
195



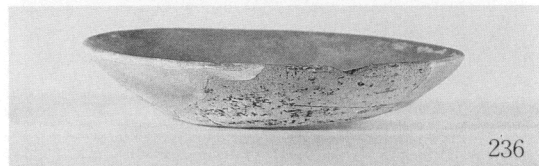
200



197



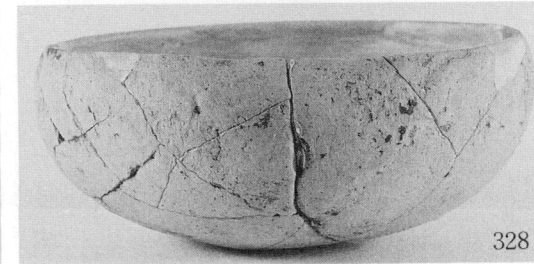
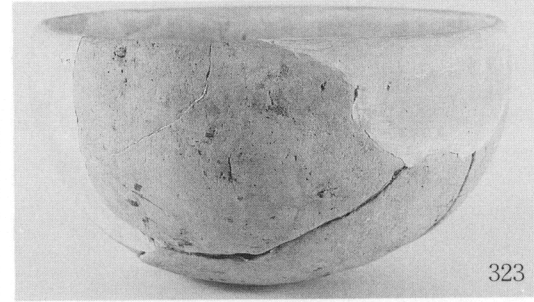
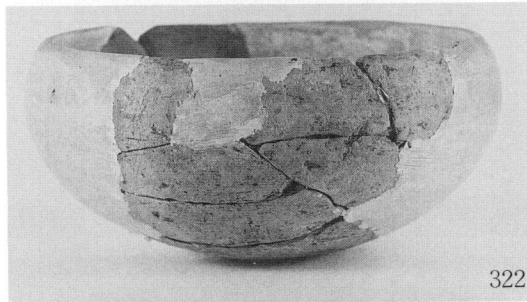
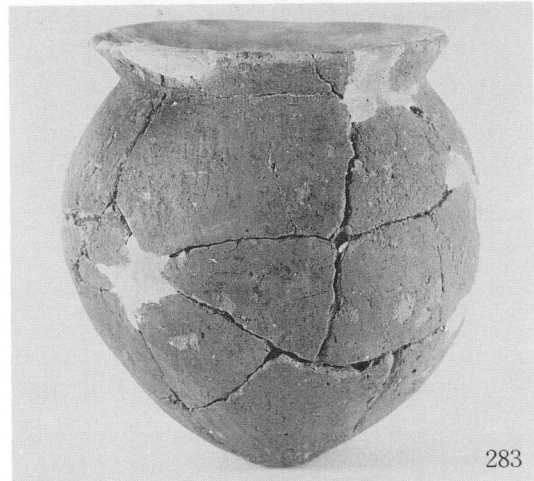
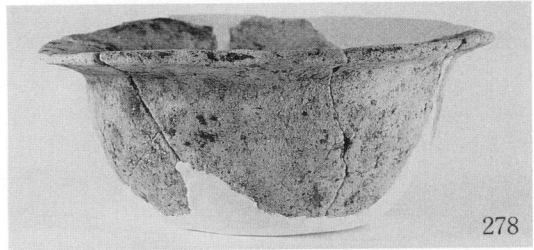
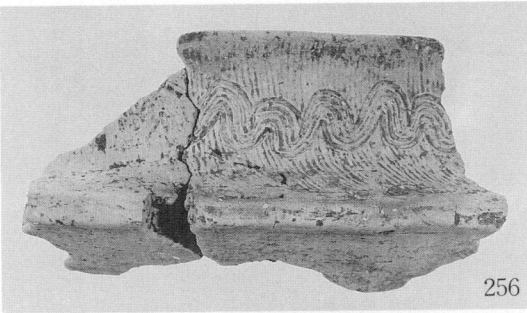
212



236

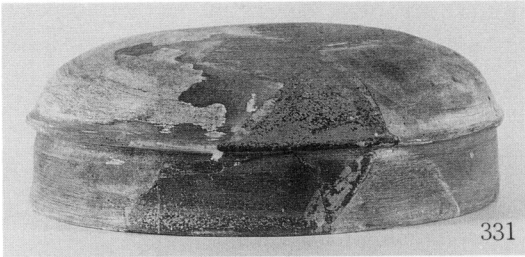
PL. 50

吉田構内本部2号館新営に伴う発掘調査  
(29)

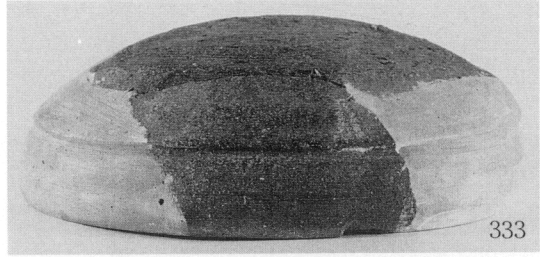


吉田構内本部2号館新営に伴う発掘調査

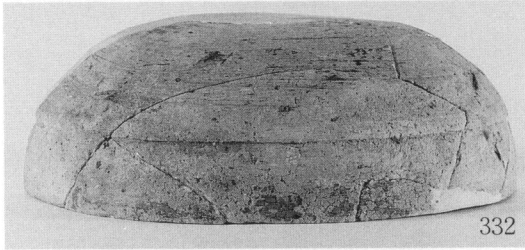
(30)



331



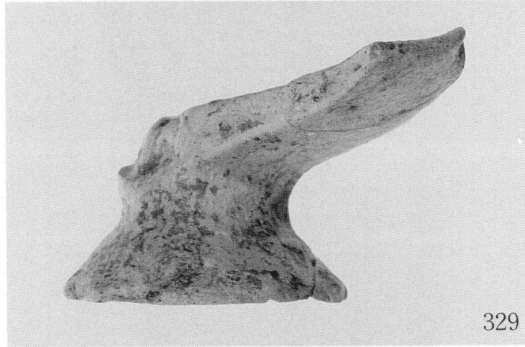
333



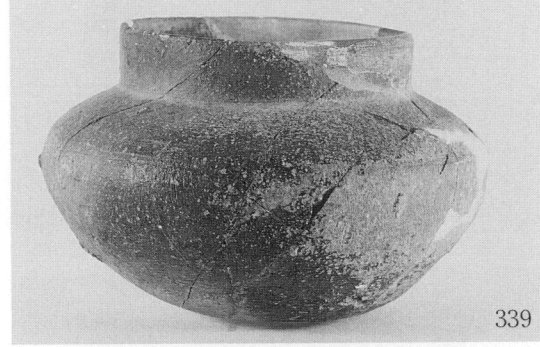
332



336



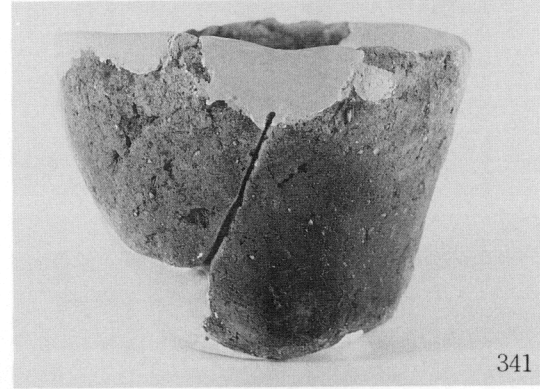
329



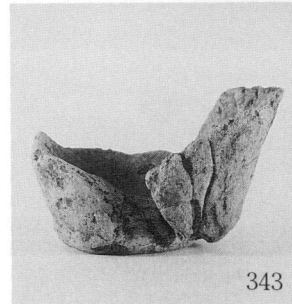
339



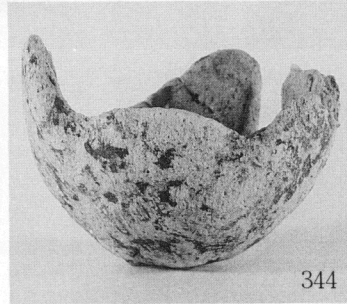
340



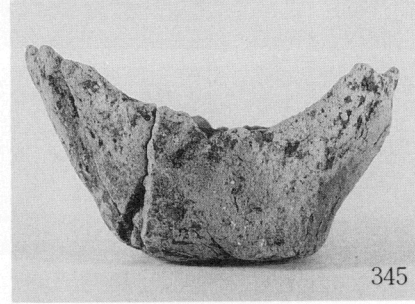
341



343



344

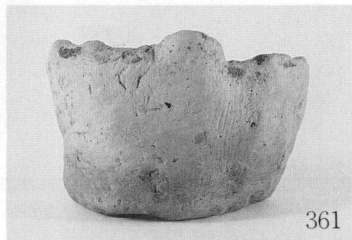
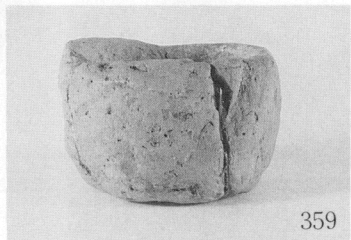
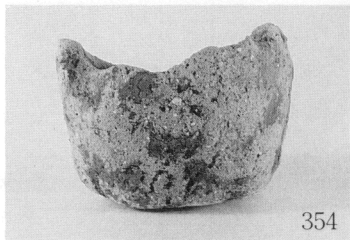
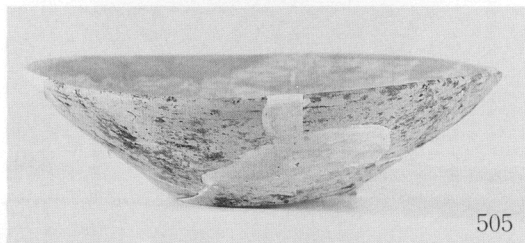
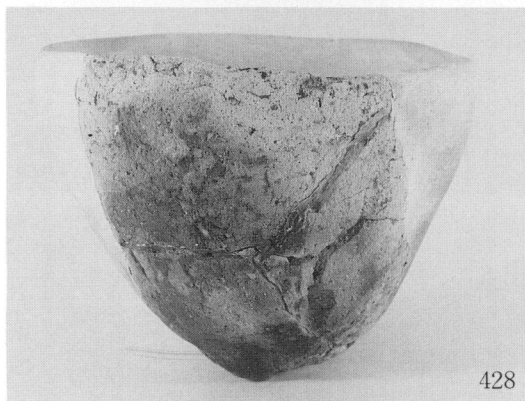
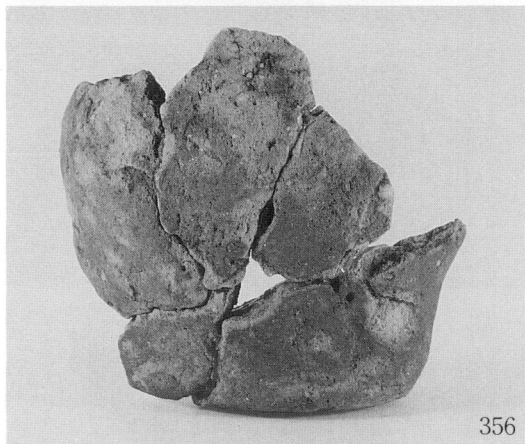
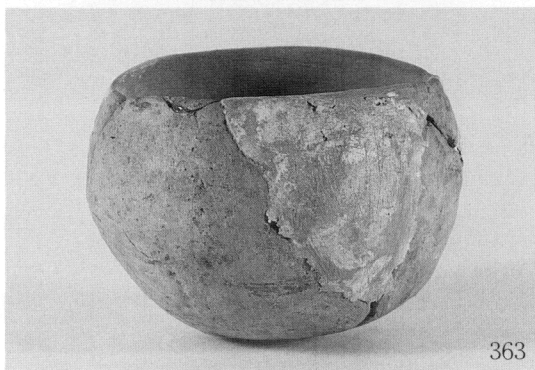


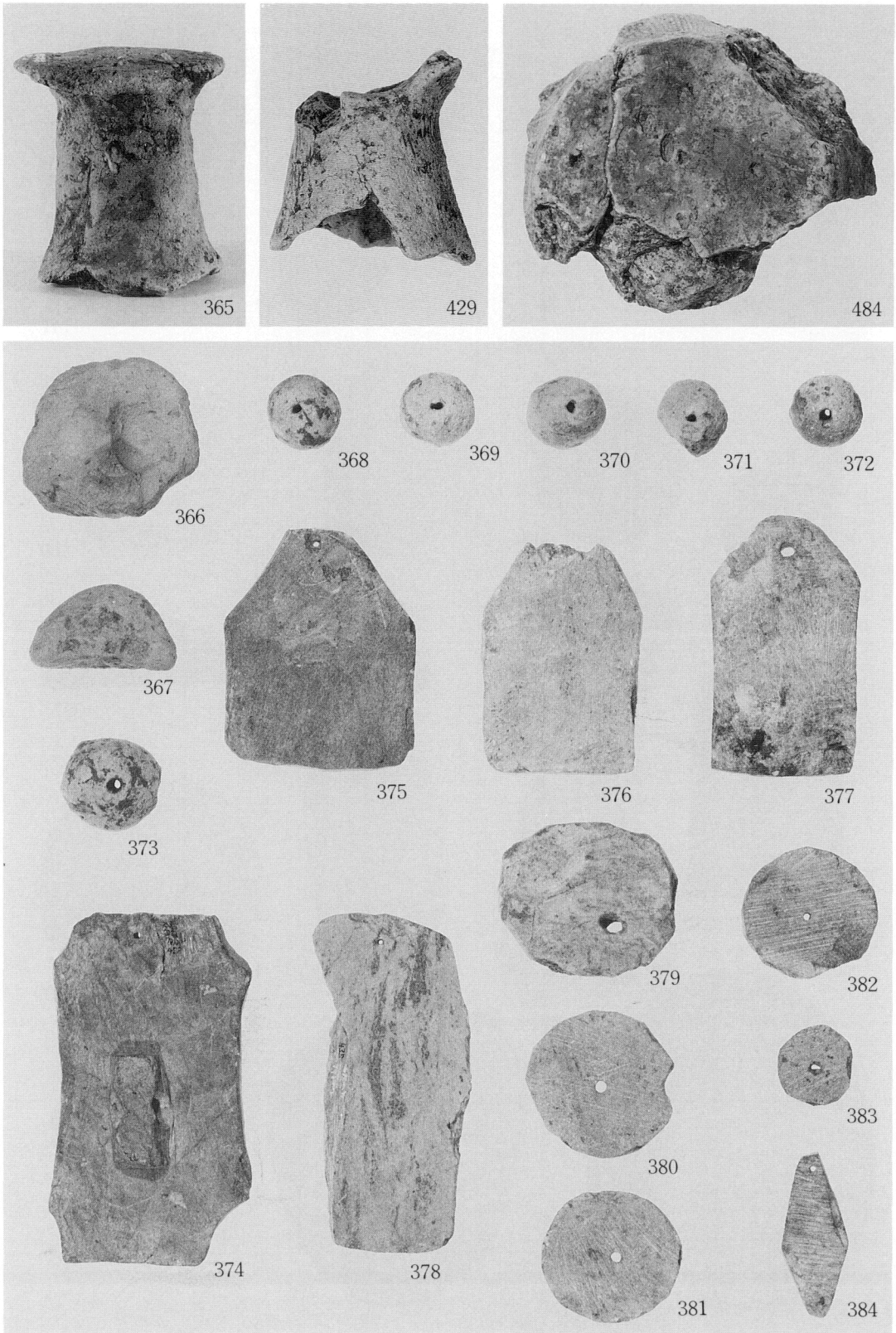
345



PL. 52

吉田構内本部2号館新営に伴う発掘調査  
(31)



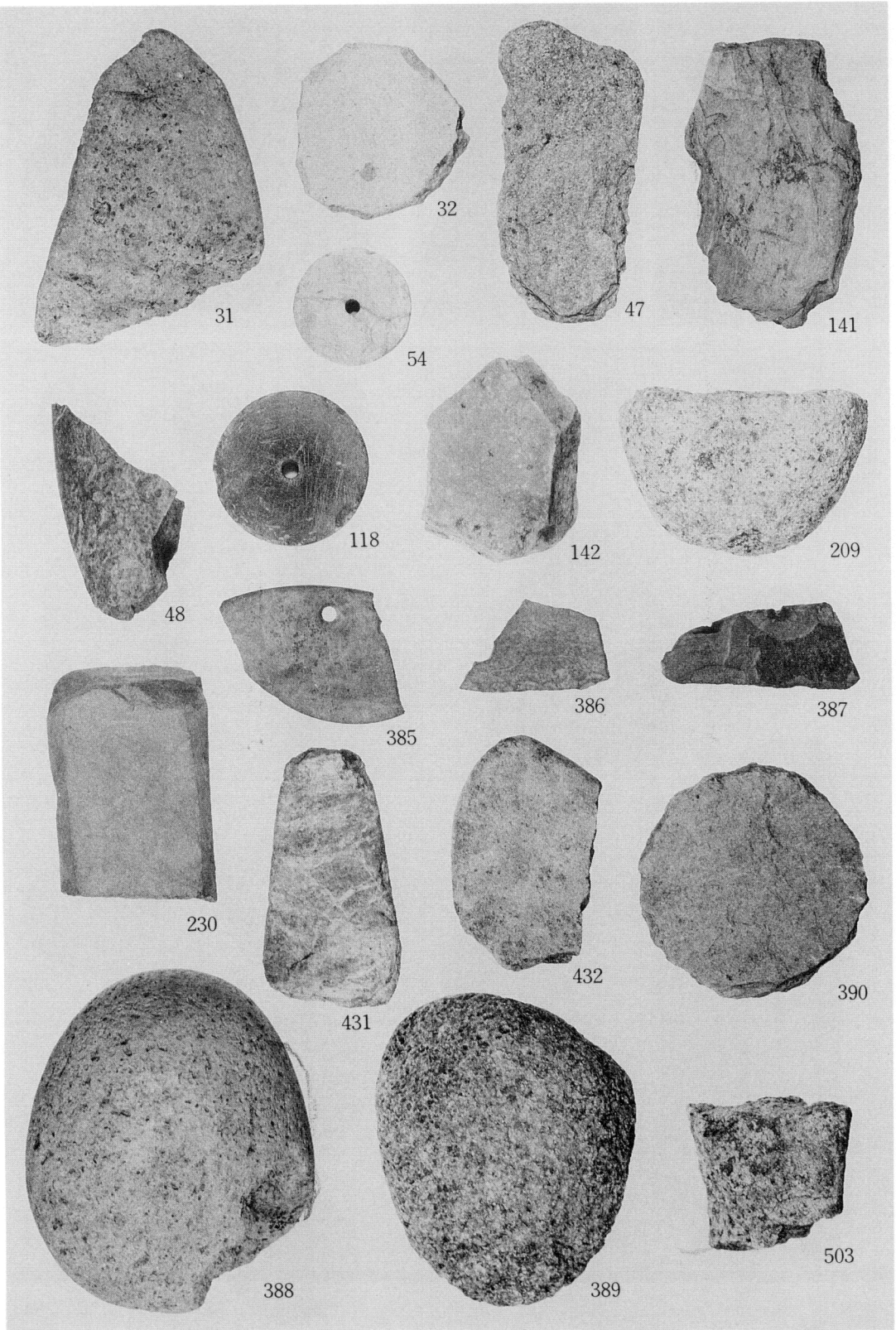


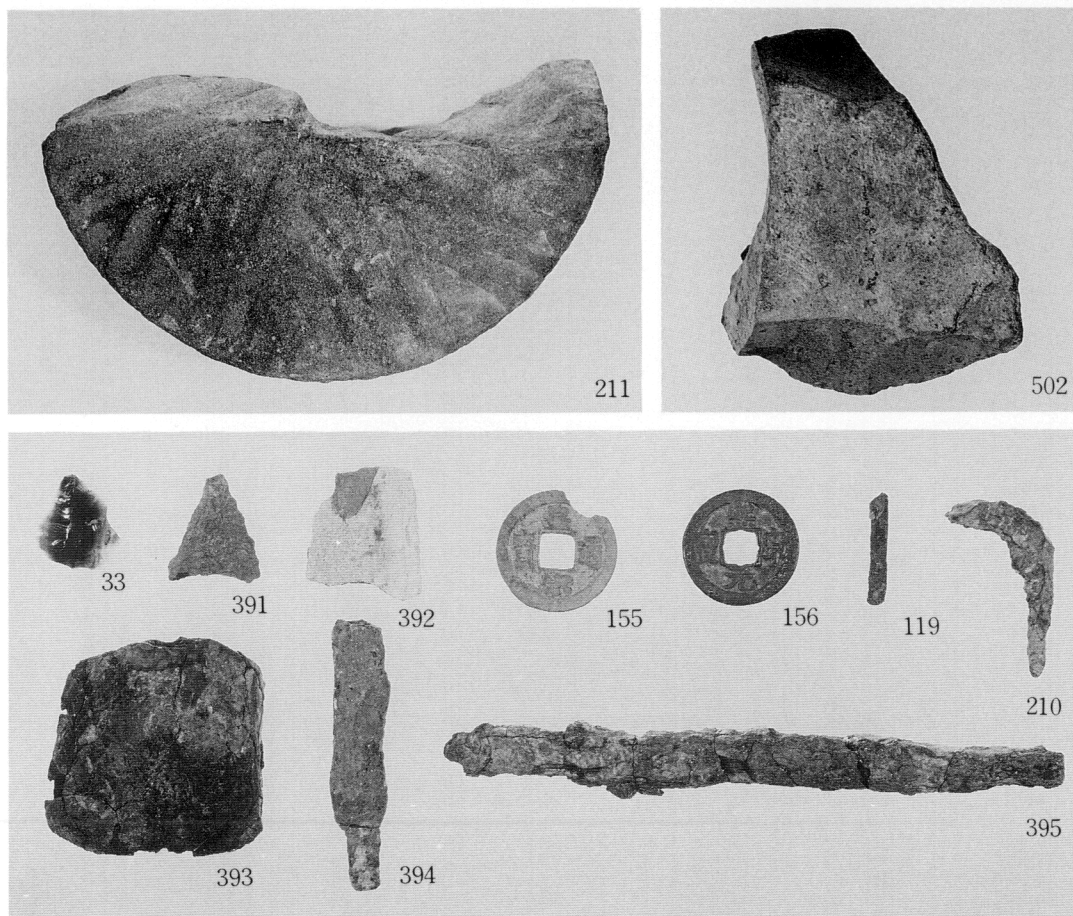


PL. 54

吉田構内本部2号館新営に伴う発掘調査

(33)





出土遺物 (26)

211…約1:4, 502…約1:3, その他…約2:3